
白き剣製/other future

ふ～やん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き剣製／other future

【Nコード】

N6095N

【作者名】

ぷくやん

【あらすじ】

第四回聖杯戦争終了後、士郎が切嗣に引き取られ数年過ごした後、切嗣が死んでからの出来事になります。士郎が男↓女になり聖杯戦争に参加するというお話です。初作品であり、妄想から書き始めた小説なのでかなり苦しいところ、理解不能なところあるかと思いますが、ご注意ください。

元の作品と設定がかけ離れています。許容できない場合は申し訳ありませんが戻るを押してください。また質問、感想は随時受付中です。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

初作品になります、ぷくやんと申します。

この作品は紹介でも書いた通り、f a t eの二次創作ものとなっています。

主人公チート、原作崩壊、キャラ崩壊等ございますのでお気をつけください。

プロローグ

それは突然だった。

何かが光った気がしたから振り返った。

自分がしたことはそれだけだ。

光を見た瞬間に白が広がった。

端から見たら「人が消えた」と言うだろう。

学者が見たら「人の存在がなくなった」と言うだろう。

魔術的に見るとそれは「人が飛ばされた」となる。

要は空間を、時間を、次元を超えたのだ。

・・・・・・。

「おお成功したようじゃ。これでようやく魔法使いとして名を残せる。・・・ここまで長かった。」

薄暗い部屋の中。蠟燭台に刺してある数本の蠟燭しか明りがなかった。どこかの洞窟みたいな部屋の中、一人の老人と少女がいる。老人は光る円形の線の内側に、少女は中心の簡素な台の上に寝かされている。

「これ、そろそろ起きんか。」

「・・・ん。・・・うう・・・ん。」

「・・・ふむ。しょうがないの。」

ザバツ

「……！つぷは、なにするんだ！」

「お主が起きないからじゃろう。起こしてもらえてありがたいと思え。」

とても理不尽だ。

「誰だよ爺さん。ここはどこだ。」

「ここはわしの工房じゃよ。お主は魔術師じゃろ？分からないのか？」

わかるかよ。

「あいにくと魔術師になってからはそんなに長くないんでな。ちゃんと教わってもない。」

「まあよいじゃろ。お主はわしの魔術……いや魔法の実験で連れてこられたのじゃよ。」

「っな！魔法だって！」

「そうじゃ。元々は空間に関する魔術に時間の概念を加えたものじゃ。まあ、ただ加えるだけじゃなく、加えることによって起こるすべての事象を計算するのが面倒なんじゃがな。一番心配しておった未来の部分もようやく完成したというわけじゃ。どれ、何かおかしいところはないかの？」

「おかしい？……そういえば体が小さいというか……声が妙に……高い……というか……っ！女！この身体は女なのか！」

ガクガクと首を掴まれ振られている老人。身体は丈夫なのだろうか

？ぜんぜん堪えてない様子だ。

「……なに？その言い方からじゃと元は男なのかのう？まあええじゃろ。その方が見栄えがいいじゃろうて。」

「そういう問題じゃねえだろ！これからどうするんだよ！女として生きていくのか！？それよりもここから帰れるのかよ！」

「帰りのことは大丈夫じゃ。これから魔法の術式を物に付与させてから元の世界に帰してやるぞ。なに、すぐに終わる。ただどのようなものにするか決めてないからそこから考えなければいけないがの。じゃがお主を見て決めた。剣じゃな。わしのこの術式を扱うには宝石が必要じゃから宝石剣というわけか。思いつきにしてはいいのう。」

なんなんだこの爺さんは。無茶苦茶にもほどがあるぞ……。

「帰れるってことはわかった。けどこの身体はどうするんだ？」

一生女の体なんていやだぞ。絶対に戻ってやる。むしろ身体を元に戻せ。

「ふむ……。お主がいいのならわしが研究をしてやるが。どうかの？修行ついでに元の身体に戻す方法を探すというのは。」

「……まあ、鍛練にはなるか。本当に治るんだろうかこの身体は。正直この爺さんのノリでこの身体にされたような気も……」

「そんなことはないぞ」

「心を読むな！……しょうがない、帰れる方法も元の身体に戻る方法もあんたが知ってるようだからな。」

「そうかそうか。なら名前を与えてやろう。どうせ男の名前だから似合わんじやろう。」

好きでなったわけじゃないわ！

「余計なお世話だ！」

「ふむ決めたぞシロじゃ。わしの名前をとってシロ・ゼルレッチ・シュバインオーグじゃ。なかなかじやろう？」

んー、髪の色が白だからだろうか。かなり安直過ぎる。けど元の名前から離れてないしなあ。

「……まあいいだろう。」

……ん？ゼルレッチ？どこかで聞いたことがあるぞ。……っ！

「ゼルレッチって宝石翁か！」

「おお知っておったか。未来ではやっぱり名が広まっておったか。」

「……ああ、魔法使いの中でも変わった爺さんだって噂だ。なるほど、確かに変わっている。」

変わっているどころかかなりはっちゃけているな。

「ほうほう、そんなに元の世界には戻りたくないのかのう。しかた・

・
・
」

「すみません。」

土下座して謝る俺。かなりカッコ悪い・・・。
さてこれからどうなることやら。

プロローグ（後書き）

りみっとぶれいく様と比村乳業様の同人誌の、士郎子、アチャ子からの妄想小説です。

二サークル様の設定は完全無視されております。容姿をご想像する場合はそれぞれのサークル様のHPをご覧くださいできれば幸いです。また元のFate／stay nightの設定も歪曲して理解しているところもありますので、原作からの単語の意味等、かなり変わっているかもしれません。

そのところは読者様の脳内補完にて修正お願い致します。許容できない方は遅くありません。戻るからお戻りください。

また、ご質問、誤字等々ありましたら、感想で知らせていただければ幸いです。

私は両サークル様を応援いたしております。

第一話 新しき日常（前書き）

かなり中二病くさい・・・。

文才ない自分が書いてますので申し訳ない。

かなり不定期で書いていきます。いつの間にか2、3話増えてたりするかもしれないですが、温かい目で見守ってください・・・。

第一話 新しき日常

ひよんなことから女になってしまった俺。

いきなり別次元に飛ばされてしまったのだが、実はいろいろと不備があったらしい。

こちらの世界に來た時に、必要な魔力が術式に込めた魔力より大きかったらしい。

なぜだか俺が鍛練していたときに大けがをしていたらしく、その直後に起きた大魔力反応を元に俺の身体が運ばれたらしいのだ。

その大魔力反応の中のオド、すなわち俺の体内で生成されている高魔力を抜き出し、その魔力で不足分を補って自分が運ばれたようなのだ。厳密に言えば俺が生成した魔力ではないらしいが。

とりあえず、俺が元の世界に戻るためにはそこまでの魔力が必要なわけだが、その術式の改造、調整をしながら俺の身体を研究、さらには修業をつけてくれるらしい。

・・・うう、ここまで全部自分のことなのに人事にしか話せない・・・悲しすぎる。

それで、その厄介事をしでかした張本人はというと、

「飯はまだかのー。はやくつくってくれー。」

「黙って待ってろ！」

このように腹ペコ爺さんになっているわけだ。どっかの昔話に出てきそうだな。

俺はというとちょっと大きめのエプロンをつけて料理中だ。

くそっ、爺のくせにいいキッチンと料理道具が置いてある。材料は・・・、うおっ！これはすごい。冷蔵庫代わりとみられる地下空

間には山盛りの野菜野菜やさい……。どんなに集めてくるんだよ。しかも日洋中さまざまな野菜を。

しかもあっちには冷凍庫とみられる扉が冷氣という存在感を放っている……。もう考えるのはやめにしよう。とりあえずいためものでも作って……。

「はやくー」。――」

「今作ってるから待ってろ！」

とまあそんなこんなでご飯を作ったわけだが。かなり料理を気に入ったらしく、「一応弟子にしたんじゃから飯、雑用ぐらいはこなしてもらおうぞい。」なんて言いやがって、すでに決定事項と化していた。理不尽だ。

それからというものの、さらに爺さんの変態っぷりが身にしみてわかった。

修行中であの宝石剣の試作品でつくった次元の狭間に放り込まれるわ、いきなり使徒を倒してこいなんてのもあった。

ただものを教えるのはやたらうまくて、いきなり自分の特性を当てたのはさすがに驚いた。こんなのもさすがは魔法使いだな、うんうん。

「完成じゃ！宝石剣の完成じゃ！シロー、シローーーーーー！」

「聞こえていますから。もう少し声を抑えてください。」

「しかし宝石剣の完成なんじゃぞ！？これで元の並行宇宙へ帰れるんじゃぞ！？」

「わかりましたから。それでいつ決行するのでしょうか。」

「うむ、最終調整後だから今日中には飛べるぞ。だから晩御飯は盛大によろしくたのむぞい。」

「わかりました。今日は腕によりをかけます。だからって最終調整で手を抜かないでください。」

やれやれ、やっと帰れるのか。長かった。本当に長かった。実に一年もかかったのだ。

一時期は帰れないかとも思ったのだが、そこはやはり魔法使い。約束は果たしてくれたのだ。

元の身体に関しても対応策も考えたし。これで晴れて自由の身だ。いや、ほんとに長かった。

「今日もおいしかった。」

幸せそうな笑みを浮かべて椅子に座った老人がつぶやく。

「これでこの美味しいご飯とお別れかのう・・・。」

「何にあわないこと言ってるんですか。というよりあなたはいつで

も食べに来れるでしょう。」

「本当に食いに行くぞ？」

「・・・・・・・・・・」

「何か言ってくれんかのう！？」

「まあまあ抑えて。それで調整はどうでしたか。」

むう・・・とふくれてるわね。おっと気持ちまで女言葉は・・・

「最終調整も終わりじゃ。時間单位的に5分間隔の周期で飛ぶことが可能じゃ。もう少し時間があれば1分単位までいけるのじゃがな。かといつてもいつまでもシロを此処にとどめておくのも世界がいつまで認めるじやろうか。元に戻すのがいい気がするのじゃ。」

「そうでしょうね。この世界には世界が確認した総人口に一人が加算されているわけですから。といっても、世界はそれさえも予定として入れているかどうかはわかりませんが。」

本当にそれがわかるには、それこそ魔術師の夢、「根源」を探し当てなければいけないのだが。かといって根源にたどり着いたとしてもわかるのかどうかも確かでない・・・。

「まあそれは良いじやろ。向こうでも困らないよう技術と知識は教えたはずじゃからのう。」

それについては確かに。お礼参りしたいと思うくらいに。

「・・・それで答えは見つかったかの？」

「ええ、それなりには。あとは気持ちの持ちようかと。それについては大丈夫でしょう。かなりの時間を費やしてしまいました。」

「それは一生の問題じゃて。早々見つかるものではないからの。しっかりと悩め。」

ちよつとカッコイイじゃないか。少しは見直し・・・。

「今のわしはかつこよかったかのう？ いいこと言ったつもりじゃ！」

「威張って言わなくてもよろしい。」

バコッ。

これだから爺さんは・・・。

「お言葉はありがたく頂きます。準備はよろしいですか。」

「もう行くのか。早いう。」

「善は急げと申します。」

「可愛げがな・・・。」

バコッ。

「もう一度ですか？」

「ごめんなさい」

今度は土下座ですか。まあ許してあげましょう。この一年間の感謝の気持ちも込めて。

「これが宝石剣ゼルレツチの設計図じゃ。変更点はこことここ。」

「わかりました」

トレースオン

頭にある宝石剣の設計図に修正を加えて作り出す。やはり爺さんは天才だ。すごい概念の数。これほどまでしなければ次元の壁を、宇宙を超えることができないのか。といっても俺のためにわざわざ剣にしてくれたんだ。しっかりと作り出さなきゃ。

創造の理念を鑑定し

基本となる骨子を想定し
構成された材質を複製し
製作に及ぶ技術を模倣し
成長に至る経験に共感し
蓄積された年月を再現する

「ふう。」

うまくいったはずだ。この一年間ずっと作り出してきた試作品の数々が思い浮かぶ。これほどの剣はあの剣以来だ。

「どうです？ 精度はほとんど完璧なはず。」

「・・・うぬ、やはり卑怯と言いたくなるような業じゃな。」

「ということはokサインは・・・。」

「出してやろう。安心するがええ。」

ようやく帰れる。この手に帰れる手段が揃った。

「では元の世界へ帰ります。遊びに来てくださってもよろしいですよ。」

「そうかそうか、やっとわしのありがたみが分かったのk・・・。」

バコツ。

「これで帰らせないつもりですか。なら気が済むまで殴ってから行くのでしょうか。」

「すまんかったから、ゆるしてくれ。」

あやまるなら最初からやらなければいいのに。さあ帰りましょう、元の居場所に。

「ではまたいつか。」

「そうじゃのう。気が向いたときにな。おおそうじゃ、遠坂によるしくな。」

「私のやり方であれば。では。」

私は、俺は剣をふるう。光が飛ぶ。空気が割れる。

亀裂の狭間には数えきれない可能性。分岐点その向こうには一つの世界。宇宙

私が、俺が行くあの世界は、戻る世界とどこが違うのだろうか。

広がる宇宙に数ある可能性を手繰り寄せ、元の世界を探し当てる。

それが悲しい未来を過去通るとしても。救ってしまえば私が消える。

英雄がわたし消えるというならば、救うあの世界の未来はわたし過去ではなくなる。

可能性としての未来なら、私は、俺は元わたしの未来に帰ろう。

たとえそれが英雄のゆめすべきことと違ったとしても。

帰ろう、元の世界に。わたし今までに感謝しながら。

光が満ちていく。建物の中を余すことなく光が照らす。魔力の塊が純粹に光となっているようだ。光の中から人の足らしきものが出てくる。次々と人の身体が出てくるにつれて光が弱くなる。人が一人完全に出てくると同時に光が消える。一人の男が窓から月を見る。そこは月の光が差す神聖なる祠。これから先起こる人生の分岐点となる場所。ぐるっと見まわし、やることは……。

「……とりあえず掃除しよう。」

第一話 新しき日常（後書き）

よく他の作者様が「side」って書かれてますが、そういうものは一切書きません。そのところはわかるように、もしくは分からせないように書いていきます。
そこも含めて脳内補完お願いします。

第二話 懐かしき青春（前書き）

前回もそうでしたが、かなり短くなっています。
たぶんこれから長くなる（予定）です。

楽しんでいるかどうか分かりませんが、どうぞごゆっくり。

第二話 懐かしき青春

「……………何なのよ、この魔力は」

それは突然だった。

この町の魔力の流れと魔力の大きさを量る針がいきなり大きく動き出した。

通常マナの減少とそこに生み出される魔力容量はある程度釣り合いが取れている。

通常オドを量ることが出来ないため、生み出される魔力反応に込められている魔力容量を量るのだが、今回に限ってはその釣り合いがおかしいのだ。

この魔力測定器の有効範囲内における魔力に関しては、魔力の動きがあるうちはその針がその動きを示し続けるのだが、今回のそれは全くと言っていいほど動きがなかった。

ほんの一瞬、あくびをするよりも格段に短い反応だった。

魔力量はこの地脈にある霊力のほぼすべて。それが一瞬にして無くなったのだ。

なのに魔力効果があったのは、ほんの数秒しかなかった。

一瞬にしてマナが消えたのだ。

過去の事例がないかそこしらの本棚をぶちまけ、それこそ足の踏み場がなくなるほどに部屋を荒らしたまではいいのだが、なぜが元に戻っている。

マナというのは空間にある私たちが使うことができない魔力だ。

私たちが使うために、私たち自身がそのマナを取り込み使える魔力に変換する。

そのため元々あるマナがなくなってしまうのだが。

通常マナがたまるのは低級魔法分であれば数分。ある程度強力な魔法を使うなら数時間。

しかし今回の魔力測定器の針が指示したのは、その周辺のマナ量ほぼゼロ。しかも回復した時間は2分〜3分。それだけでなく回復したオドの魔力色が虹色ときたものだ。

明らかにおかしい現象。けれども一族の宿題のヒントになる魔力反応が……。

またとない絶好のチャンスだった。

すぐにでも行きたいが場所がここからは少し離れる。

今は夜中を回って2時を過ぎたところ。

さすがに一人で出歩くのは危ない時間だ。慎重を期すために明日の夜行くとしてしよう。

「とりあえずこの結果は記録として残さなくちゃね。ああ、明日が楽しみだわ。……フフ、……フフフ、……フフハハハハハ。」

奇妙な女の笑い声が夜中に響き渡る。近所に迷惑を振りかざしながら。

「なんにもかわってないな。といっても時間的に数分しか変わらないからな。」

男の声が聞こえる。ゆつくりとした、この場を懐かしむような声が。

「口調も気にしないでいいし、何より男の姿が感動だ。掃除もしやすい。」

せつせと働く少年が独り言をつぶやく。

「といっても男の姿は仮だからな。幻術の一種だから下手をすればれてしまう、気をつけないと。さしあたって一番の問題は藤ねえか。」

藤ねえとは、こんな子供にまで飯をたかりにくる狩人。

掃除洗濯自炊・・・洗濯は機械に任せているから大丈夫か、が致命的にまで出来ないという藤村大河ことタイガー。

ここ冬木においてヤのつく頭の娘さん。そのおやっさんこと藤村雷画の爺さんに気に入られて家族ぐるみ、というよりおれが世話になっている偉い人だ。

俺は養子だが切嗣じいさんが死んで以来いろいろと援助してもらっている。
・・・娘さんの世話と引き換えに。

そんなハチャメチャ突撃娘さんが何かあるとすぐ疑るのが大丈夫だろうか。ぼろがあればすぐ見つけてきそうだ。と言っても魔術とはかけ離れている家系だから大丈夫だとは思うのだが。
機嫌取りに明日のおかずを少し豪華にしようか。

「そしたら冷蔵庫の中身を見て寝るとしよう。」

掃除道具をかたづけ、土倉という建物から離れる少年。この少年こそ少女の身体だったシロ・ゼルレッチ・シュバイオーグの元の姿。

「衛宮士郎」である。

「おっはよー、しろー」

きたきた、来ましたあの虎が。

「ああ、おはよう。もう朝飯できてるぞ。」

テーブルの上にはかなりの量の料理が並んでいた。

「今、みそ汁を用意するから座っててくれ」

うん、久々に和食を作ったが完璧だ。今までの中で最高の出来だ。
一時間も準備に費やして正解だった。

「わー、どうしたのしろー？ なにかよかったことでもあった？」

「まあ、そんなところだ。」

そっかあと言って食べ始める藤ねえ。今日は気分がいいと思ってく
れたみたいで、「うわっ、これおいしい」とテーブルの上の料理が
次々と胃袋へ流れていく。そろそろたべないとおかずが無くなるな。
俺も食べるでしょう。

「いただきます。」

久々の学校だ。約一年間の間が空いたが、時間軸上昨日は学校に行ったことになってる。

たからこそ今日はいろいろと学校を楽しもうかな。普通の運動もしたくなってきた。

その日の学校は何事もなく終えた。実は一年間の修行中にこっちの勉強もしていたのだ。事実、今の学力は高校生並である。

夕方、学校に残り陸上部にお願いして高跳びをしていた。高さは身長より低い1m40cm。この身体じゃ飛ぶのは簡単だが、元の姿で跳ぶには無理な高さだ。

ただであえてこの身体で跳ぶことにした。この身体でどこまでできるのか試してみたくなったのだ。

しばらくやっていると、もう目的は変わっていた。ただ「跳びたい」と。

成功しなくてもいい。ただこうやってがむしゃらに身体を動かす。成功するのが目的じゃなくて、「跳ぶ」ことが目的なのだ。

久々に楽しかった時間はあっという間に過ぎてしまった。

楽しい時間というものは経過するスピードが速いものだ。いつの間にか日が暮れてしまった。いつもなら帰って晩飯を作る時間だが、今日は朝の残りが結構たくさんあるし、めったに言わない我ままだからな、たぶん聞いてくれるだろう、藤ねえは。

それにしてもずっと見てたな3人とも。まあすぐに会えるから大丈夫だ。半年も過ぎずに顔をあわせることになるさ。

時刻は7時過ぎ。冬半ばを過ぎたこの時期は暗い。制服の上に学園指定のコートを着て帰り路を歩く。
家の前には何かがある……。何か集合体のようなものが……。

「誰かいるのか。」

声をかけてみるが反応はない。しらを切るつもりか。

「ここで何をしている。なぜ答えない。」

「……………」

「っ！……………」

いきなり消えた。文字通り音もなく。

魔力反応を確認する。色は黒。いや少し水色が混ざっているか……。

だとしたら一人しかいないか。

近々会いに行くでしょう。あのご隠居に。

……。まずいわね。あの化け物があるなんて予想外だわ。いやあいつがいることも予想外だが……。それにあの化け物が引いた？何かやばいものでもあるのだろうか。

いったん出直して様子見。いや動きがあるまで監視を続けよう。それにあいつが動くとなると……。そろそろそんな時期なのか。

用意を進めましょう。
次こそ私がとってみせるわ、必ず・・・。

第二話 懐かしき青春（後書き）

句読点の位置がなかなかしっくりこない・・・。
ほんとに小学生から勉強しなおしたい気分・・・。

第三話 つかの間の休息（前書き）

はい、こんにちわ。

かなりフランクになっていますが、こんな感じでずっといきたいなあ
あって思ってます。

なかなかうまく文が書けませんね。妄想で書き始めたのが無理だったかな？

さてさて、そろそろFateの本ストーリーに入っていきます。

楽しんで描くので、頑張って読んでください。

第三話　つかの間の休息

この世界に戻ったあの日から、もうすぐで一年経つ。

中学を卒業し高校へ進学したのだ。

高校はあの事が起きる前に決めていた、藤ねえが教師をしている学校。

あの事件が起こる前に準備を進めることが一番無難なところだが、それよりも大変な問題がある。

「どうやってシロを入学させようか……。」

そうなのだ。一番の問題は女の身体であるシロのこと。入れ替わってしまうわけだから衛宮士郎の身もどうするか決定しないと。あとついでにあいつへの伝言。

伝言に関してはシロが学校に入ることさえできればすぐにできるのだが、入れ替わってしまえば衛宮士郎はいないわけで、藤ねえをどうにかしないといけないし、それ以上に彼女を救わなければいけない。

どうすればいいのだろうか。

「でも藤ねえがいないのはしずかだなあ。」

この家にいきなり来るあの獣は、教育委員会主催の研修会合宿に参加して当分はいない。

この一年はいろいろなことがあった。主に藤ねえのせいで……。高校に入ってから自分をひっぱりまわし、挙句に弓道部まで参加させた。

普通はそれぞれが入部したいという意味に基づいて部活動に参加す

るはずだが、俺の場合あの藤ねえに「これから10本の内、5本以上当たったら入部決定ね！」なんて言い出しやがって。仕方ないから真剣にやってみたが、5本どころかすべて当ててしまった。わざと外してもよかったのだが、こんなことで歴史を変えてしまうのは良くないと思ったのだ。

だけど、それ以上に弓道に憧れてたのだ。あの修行中未来の俺はすべて弓道をやっていた。部活動中はとも生き生きとしていて、思わず「いいなあ」とつぶやいてしまうほどだったのだ。

だがしかし、もうすぐあれが始まる。だからこそあそこに居ちゃいけないし、その他関係を戻しておかなくちゃいけないのと、さらには動きやすく……。

かといってもあそこには時々お邪魔する予定ではあるが。場所も音も空気も好ましい場所だから、冷静になれる場所だからな。

さらには予定通り、美綴には「絶対にあきらめないからな。覚えてろよ。」なんて宣言されましたよ。実際に言われるとちよっとくすぐったくなるね。

さて、予定としては俺自身新学期から約3カ月は消えることになる。建前は「切嗣^{じいさん}の遺産が見つかった。その他も近くにいろいろなものが発見されている。それを引き取り、ついでに搜索する。」ということだ。

実際には切嗣^{じいさん}の葬式を日本で行ったが、度々フラツといなくなり、いきなり外国の土産を持って帰ってくるということを繰り返していたので、何とかごまかせるだろう。そのための遺品もちゃんと掘り出してきた。

切嗣^{じいさん}が使っていたライフルだ。必要だったのは弾だったのだが、一式が倉庫に眠っていたのだ。土蔵は自分のテリトリーだったが故に

何も手を触れなかったらしい。

藤ねえがない利点を最大限に使わせてもらえば、すべて置き手紙
がいのだが……。

帰ったら怖いなあ。実際に行くわけじゃないから余計になあ……。

まあこのあたりでいいだろうか。これ以上考えても何も案が浮かんでこないし、無駄にお茶ばかり消費させるのはもったいない。

―ズズツ

これで考え始めてから5杯目のお茶がなくなった。

「そういえば……。」

パカッ

お茶の葉が入っている缶の中は空っぽだ。

「買いに行かないとなあ」

時刻は現在11時半。お昼は軽くうどんでも作って食べようか。としたら材料がいろいろないかも……。

立ち上がり冷蔵庫の中を見るためドアを開く。中は整理するものもないほどガラガラだ。

ここのところ食いぶちがないせいか買い物に行かなかったからなあ。いろいろと買い出しに行かなくちゃいけないな。

「それじゃあ……、着替えるか。」

着替えるために居間を離れる士郎。近くの商店街までは遠くないにしろ坂があるため、少しばかり時間を食うのだ。さすがに息が白くなるこの時期に長袖一枚は寒い。

襖から見える影は男から女へ変わる。服を着ているように見える。どうやら身体を変換するときは服を脱いでからというのがポリシーらしい。確かに男↓女はまだまだだが、女↓男は・・・・・・・・、見たくもない。

最近では男の姿ではなく女の姿で買い物をする。

やはり商店街の人たち、というより世の男商売人は女の子が買い物に来てくれると嬉しいらしい。いつも何か安くしてもらえるかオマケをつけてくれる。得をするというのはかなり嬉しいものだ。買い物中はいつも視線を感じるのだが、今日は少し違う視線もある。その視線の主はあの子だ。この姿で買い物をして何回か顔を合わすのだが、それ以来だろうかこちらに興味を抱いているようだ。それがどういう意味かは分からないが。

このままでは埒が明かないから声をかけてみようかな。

「こんにちはー。桜さんー。」

いきなり声をかけられたからだろうか。びくっとなってぎこちなく手を振る桜。

この子があの間桐桜なのだ。将来自分の世話を焼いてくれる一つ下の先輩。自分の同じ学校、弓道部に入り、あれに関わる一人。そして救いたいと思う一人。

そろそろ行動に移してもいいかもしれないし。そうでないかもしれない。といっても今の桜は桜の意味で行動することは少ないはず。となるとここに来たのも・・・・・・・・。

「こんにちはー。桜さんー。」

びっくりしました。いきなり声をかけてくるんですから。確かに何回かは買い物の途中で偶然会ったりお話もしたのですが、私みたいな暗い子はいつもみんなから煙たがられ、あの「間桐さんの家」の子と指さされていました。私はわからないのですが、昔に何かあったようなのです。最近では兄さんがいろいろとしているみたいですし。一定以上の年齢の人は私を見ると逃げるようにその場を離れ、影から何か言っているようなのですが・・・。

あの人、シロさんというのですが、いつも親しくお話しています。といっても私はテレビやファッションのことはよく知らないのですが、いつもお料理のお話しかしないのです。実際に作ったことは数えるくらいしかありませんが。けど、シロさんは料理好きであるらしく、いつも長話してしまいます。

「こんにちは、シロさん。今日はたくさん買うんですね。」

たどたどしくわたしは答えます。

「そうですね、ここのお買い物ものに来ていなかったの、いろいろと切れてたんです。しっかりチェックしておかないといけませんね。」

今日もシロさんはお元気そうです。私もこんな風になりたい……。

「いつもいろいろとお話してきましたけど、今日は私の家に来ませんか？前に約束したようにお料理を教えてほしのですが。いいでしょうか。」

今日はお爺様に頼まれてきたのです。シロさんを監視しろと。家に誘いこめるのなら誘いなさい、と言われました。どうしてなのかわかりません。

「んー、いいですよ。今日は一人ですし。それなら一旦家に帰って荷物を置いたら行きますね。」

このままでいいのでしょうか。シロさんがお爺様に■■■されてしまうのかと、私のように。

でもお爺様に逆らうのは……。

「今日は何を作りましたよかね……。んー今日は洋食にしましょうか。それだとお肉に、コンソメ、野菜はニンジンに玉ねぎと……。」

そろそろ動き始めたか。やはりいつものような雰囲気ではなかったのだからな。ただ、こちらからの先手が打てなくなってしまったのはちよつと困るな。

桜と話しながら買い物もいいが、そろそろ用意しなくちゃいけないものも……。

その前にお昼か。お昼はどうするんだろう……。聞いてみるかな。

「桜さん、お昼はどうします？どこか一緒に食べに行きませんか？ちよっとおやつには早いですけど美味しいケーキが食べれるところを知ってるんです。どうですか？」

ぱあっつと明るい笑顔でこちらを振り向く桜。うっかわいいじゃないか。やっぱりそのところは年相応の女の子じゃないか……。ちよっとずるいな。

「さあ、行きましょう。」

手をつなぐ桜と俺。またつなぐことができるのだろうか。たとえば間桐臓硯を殺したとしても……。

俺は女のまま、ケーキを食べ、家に戻り、準備をして、桜の家に向かった。準備とは武装。といっても見た目は普段とはあんまり変わらない。自分の魔術でほとんどのものは出せるし、それ以外のものだって少ない。ライフ弾数発分のみであったから。

元々切嗣じいさんが使っていたこの弾には、その名前の由来、切って嗣じいさんぐという意味が込められている。切嗣じいさんの切り札であるこの弾は、相手の概念武装を一旦切り離し、すぐに貼りなおすというパソコン用語の「コピー&ペースト」みたいなことを行う。ただ単にコピー&ペー

ストを行うのではなく、起動中の概念武装、魔術等を一瞬だけコントロールを奪うのだ。ただこちらが動かすのではなく、制御状態を暴走させるのだから、また制御しなおすのは困難を極める。それだけならいいが、物によっては対象を術者本人に向けられたり、概念武装、魔術等が暴走、オーバーヒートによるバックファイアによって相手が自滅するなんてこともあり得る。

この弾には少し細工をして罅ぐ方の機能を停止させてある。つまりは相手の魔術作用を切り離すことができるのだ。あの間桐臓硯を確実に消滅させるのはこんな小細工が必要というわけだ。といっても成功するかは五分五分だが……。チャンスはモノにしたい。

さあ、あの化け物を退治しに行こう。大切な人を守るために。始めようか、俺たちの聖杯戦争を。

第三話 つかの間の休息（後書き）

最後は無理やり締めました・・・。

さすがに無理があるだろ。orz

切嗣の弾の意味等は実際にZERO読んでないので、聞いたり、他の作者様のを参考にして、自分で意味をつけました。たぶん合ってるはず・・・。

まあ違ったらオリジナルということでご勘弁を。

次回は長くなります。

第四話 動き出す時（前書き）

はい、こんにちは。

さっそく感想をもらってうれしいです。

ですけど「しっかり書いてくれ」と言われました・・・orz

・・・

申し訳ないですが、しっかり書く気はございません。

ですので、こんなんでもいいやゝなんて思ってくれる人は是非に読んでください。それ以外の方は戻るを押していただければ・・・。

エピソードとプロログを素で間違えてた・・・。

穴にこもって小説書きます。

捜さないでください・・・。

第四話 動き出す時

「おじゃまします。」

桜の家は初めてきた。といっても何回も見てきたし、探索まがいなこともした。おかげでこの家のことはたぶん桜よりも知っているのかもしれない。だとしても気分的にはとても嫌なんだがな。

「はいどうぞ。キッチンはこちらです。キッチンを見たら居間でお話しましょう。」

スリッパを出す桜。やはりこういった家事一般や気配りはもうかなりできているんだな。

先ほどのケーキを前にした笑顔がかなり暗くなってきているけど……やはり臓硯からの指示か。

スリッパを履き、廊下を歩きながら顔色をうかがう俺。

あそこは地下につながる扉だし、あの階段を登れば慎二と桜の部屋か。そういえば……。

「今日はお兄さんは居ないの？」

少しびっくりした表情の桜。やばい、なんかヘマでもしたか。

「前にお兄さんがいるって話してたよね……。そんな記憶があるけど。」

「いえ違ふんです。最初の頃よりかなりフランクになったというか・・・。私はこっちの方がうれしいですけど。・・・あつと、この部屋です。ここがキッチンですね。」

キッチンはかなり広い。洋式のコンロに食器棚、さらには旧式っぽいガスオーブンまである。これだけ広ければ三人くらい入れるのだが・・・。自分の家にはせいぜい2人までしか入れないからなあ。

「どういたんです？確かにちょっと古そうですけどちゃんと使えますよ。使い方は聞いておきますか？」

「いや広いなあ。家のキッチンの倍くらいあるし・・・。使い方は聞いておこうかな・・・。」

いやはや、こんなすごいキッチンを使えるとは。実際に見ること自体は初めてだしな。だいたい魔術反応たどってこの家の探索だったから・・・っ！

「どうしたんです？」

殺気と魔力を感じる。これは・・・サーヴァントか。といったもマスターが指示していないから手を出せないということかな。これは助かった。予定よりも早く召喚していたんだな。

「なんでもないですよ。そろそろ居間に行きましょうか。紅茶を入れますよ。」

さて、どうなるだろうか・・・。

「本日はお招きいただきまして・・・」

「カカカ、そんな堅苦しい挨拶はいらんよ。せっかく作ってくれた料理じゃ、冷めてしまう前に食べるとしようじゃないか。」

お皿が数々載っているテーブルに座る3人。そのうち自分の向かい側に座るお爺さんが間桐臓硯だ。いつの間にか料理中にテーブルについて桜と話していたが・・・これが桜の病の元凶。必ず・・・。

「というても、食べる前に自己紹介はしておこうかの。ワシが桜の爺さんの臓硯じゃ。お主がシロと言うたかの。桜がたいそう世話になったそうじゃな。」

「はい。こちらこそ大変お世話になっています。シロ・カレイドールと申します。とはいってもこちらは正式名ではありませんが。こちらの方が言いやすいのでこちらをいつも使っています。」

カレイドールはあのゼルレッチの偽名の女verだ。あの爺さんはカレイルって言ってたがな。バカ正直に敵に名前を教える気はない。名前はその人自体の意味を知られることになる。意味を知られれば弱点も対策も立てられてしまうからな。といっても爺さんの受け売

りだが。

「ではいただきます。今日は準備する時間がありましたから、2人でいろいろと作ってしまいましたので、お兄さんにも食べていただければ……。」

「なに、慎二のことはよい。いつもどこかに遊びに行ってるからう。なかなか言うことを聞いてくれんから困っておるわい、カカカ。」

「そうですか。それならばまた帰ってきたときに温めてあげてください。私たちは食べましょうか。」

「そうじゃのう、ではいただくとするか。」

「いただきます。」

三人が食事を始める。桜はさっきから黙っているがどうしたのだろうか。何かされているとしても今行動を起こすのは少し厄介だ。桜を人質にとられるとそこでおしまいだな。何とかして初手で封じたいものだが……。

食事が進むにつれて話は弾むように見えた。実際は生返事ばかりで、考えてごとをしていたのだが。しかしさっきから臓硯の体内で魔力

がぐるぐると廻っているが……。何かしてくるのだろうか。

「桜がいては話が進まんかの。こちらの話もいろいろと抜けているようだ。」

「それはどういう意味でしょうか。」

「桜よ、偽臣の書を取ってきてくれるかの……。」

俺は即座に反応した。桜をあいつの言うとおりにさせてはいけな、と頭のどこかで警告を発している。

まずは桜を気絶させる。まだ聖杯戦争が完全に始動されていないこの時期に、桜の聖杯を自立させることはできない。そして臓硯が使う桜をコントロールする術は桜の意思を基本にしているため、気絶させることで操ることができないのだ。逆を言えば、桜の意識がある状態はいつでもあいつの駒のままだ。

「トレース・オン」

俺は剣を造る、創る。この手に取るのは殺傷するための武器ではない。一瞬でこの手に武器を掴む。やつが驚く顔をするが気にしない。一瞬で桜の元へ。気絶する程度の攻撃を繰り返す。

ガキッ

鈍い金属音が聞こえる。研ぎ澄まされた金属ではなく、尖っても研いでもない無名の剣が俺の剣を受け止めた。

止められた……。

「どけ！ライダー、これは桜のためなんだぞ！」

その声に反応したのだろうか、先ほどより目の濁りがなくなった桜がこちらを見つめる。その顔は驚愕と恐怖を掛け合わせたような表情をしていた。

「シロさん、なんでライダーのこと知っているの？貴方も、……
・魔術師なの？」

「事情はあとで話すよ。……まあ魔術師というより魔術使いだけだね。」

今度はその言葉に反応した臓硯が言葉を発する。

「魔術使いか。とはいえどこで魔術を習ったのかのう。投影なんか役にも立たんじやろうに。」

俺はその言葉を見無視しながら目の前に現れた長身の女に目を向ける。女は体に張り付くような服をまとって、妖艶な姿をしている。目には何かで覆われていて両目が見えない。だが、見逃すことなどないかのようにこちらを見続けている。まるで親の仇を見るかのような……。

「その目を使われるのは厄介だ。先手は打たれたが能力は封じさせてもらう。」

【固まら】 【ない】

途端に臓硯が書を開く。いつの間に持ってきたのだろうか。偽臣の書から光が発せられる。

それは形容し難い魔力の光。ライダーのマスターとして仮契約されたのだろうか、ライダーからも不機嫌そうな顔色が、目が見えないにもかかわらず見えてくる。

「それでのう、先ほどの自己紹介じゃが本名を言ってくれなかったからのう。さすがに聞いておきたいのだが。これから長い付き合いになりそうだからの。」

そう言い出す臓硯の顔は、歪んだ笑い顔をしていた。

「本名ですか……。まあいいでしょう。冥土の土産とも言いますしね。私の名はシロ・ゼルレッチ・シュバインオーグと申します。魔法使いに最も近い魔術使いと言いまししょうか。」

その言葉に臓硯の顔がさらに歪んだ。

「ゼルレッチの直系かの。これは僥倖、僥倖。ワシの夢がさらに一歩近づく。」

さらに勘違いは続くのだろうか……。そんなに自分が弱いと思っているのだろうか。それとも自分が強いとでも？とはいえこの状態のまま時間が過ぎれば自分是不利になり続けるか。

「勝手におっしゃるのはいいですけど、そろそろ死んでいただきますね。」

「無理じゃよ、桜がいる限り。まだ不完全だが・・・」

「転移する用意はもうある程度は完成していると？そんなことは知っています。そのうえで貴方を殺します。」

「ふむ、どこで知ったかは知らんが無理なものは無理じゃ。」

「それができるんですよ。トレースオン」

創造の理念を鑑定し

基本となる骨子を想定し

構成された材質を複製し

製作に及ぶ技術を模倣し

成長に至る経験に共感し

蓄積された年月を再現する

この手に掴むは宝石剣。完全体ではないにしろ、自分をこの世界に戻らせる程度の完成度は持っている。空間だけでなく時間も操る。だからこそ魔法と呼ばれるのだが・・・。

宝石剣を三度振る。一度目は時空をこじ開け、二度目は魔力波を放つ。ライダーが俺と臓硯の間に出てきたが、そんなの意味がない。直接臓硯を空間をすっ飛ばして攻撃したのだから。

ポッ

その攻撃は臓硯ではなく、偽臣の書を燃やした。

第一の目標は達成。

「さて次は・・・。」

さっきの三回目に出した時空の裂け目、実際は違うのだが、そこか

ら今回用意した銃弾を入れる。対象は桜の心臓の蟲。入れるといっても弾頭が触れるだけでいい。魔術的機能はすべて契約前に戻る。単に蟲を取りだすだけでも良かったが、それを行うためには時間が必要だ。その間ライダーと臓硯を抑えるなんてできないからな。

弾頭が心臓に巣くう蟲を捉えたみたいだ。蟲は三匹。三匹とも術的機能を切り取った蟲になったからか、臓硯のコントロールが利かなくなっただけで桜がぐらつく。

「桜に何をしたのですか。解答によっては……。」

「殺せませんよ、たとえ英霊だとしても。セイバーぐらいであればできるかもしれませんが。」

ライダーから殺気があふれてくる。先ほどよりも数段濃い視線でこの身を捉えられている。

途端に桜が倒れそうになるが、そこはライダーが受け止める。奥にあるソファーに寝かせ、すぐに戻ってきた。

「さて、次は貴方ですね、化物さん。もうそろそろ寿命をまっとうすることもいいんじゃないありませんか？」

「そうはいかないのじゃよ、夢をかなえるには一人分の一生では届かなくてな。子に恵まれないというのも寂しいもんじゃて。……若いもんには分らんかのう。」

「分からなくはないですが、少しやりすぎました。反省しても対応は変わりませんが。」

言い終わったと同時に、宝石剣が砕けて無に消える。それは時間的、

能力的限界ではなく、ただ単にこれから不要という意味だからだ。

「トレース・オン」

手には長槍。白く輝き、その装飾は神々しさも兼ね合わせたラテン語の羅列。あのイエス・キリストの死を確認するために刺したとされる聖なる槍、ロンギヌス。

その手に槍が握られたと同時に、ライダーが目を覆う帯を外す。その目は石化の眼。^{キュベレイ}見る者を眼から通じ、その身体全体を硬化させる。

しかし、自分は固まらない。先ほどの一手により封じたからだ。

「なぜ効かん！」

声を荒げる臓硯と驚愕を表すライダー。

「言ったでしょう。ここでは固まらないと。分かりますよね、ライダー。貴方なら多少は聞き取れたはずです。」

「だとすれば、それは神言ですか。本当に人間ですか、あなたは。」

「ちゃんとした生き物ですよ。それに神ご言でなく統一言語。旧世代の神言ですが。貴方の眼はもう効きません。次はどうします？」

「止まるなライダー。眼が効かぬなら直接叩けばよい。」

動き出すライダーと臓硯。ライダーは直接自分を、臓硯は援護射撃で魔力弾を打つ。

「この身体はきついな、なら……。」

突然光が差す。こちらを直で見ている2人はその光で目がくらみ、行動をキャンセルされている。

光から見えるのは人型。シロより少し背が高い、体格の良い男の影。光はまだ消えないが、男はこちらに歩き出す。そしてつぶやく。

「縛りし神を（ロン）——」

槍を構える。その槍は、先ほどシロが出した白い槍。言霊と共に槍を突く。

「——突殺す聖槍^{ギスス}」

それはただの突きではなかった。魔力が放出され、その場を固める。この槍はあのイエスを磔にしたうえで刺したのだ。人の身のイエスを。故に人間はその魔力に囚われれば、動くことができない。たとえその身体が何百、何千という蟲でできている化物であろうと。

「ガハッ！」

その魔力に捉えられた、人間の枠に収められた化物。臓硯が人の身で成し遂げるといふことさえ諦めれば、この槍に捉えられることはなかったが。どちらにせよ、現状「人間」という枠の中であろうという意思があったために磔にされ、突かれた。

—ジュウウウ

それだけではなかった。槍を突かれた周りから、まるで汚れを落とすかのごとく溶けているのだ。

「グオツ、ゴプ」

臓硯の口から、血を吐くように何かが出てくる。黒く、透明で、他の色が少し混じった魔力が。

その魔力は空気に触れると気化していき、透明な空気に混ざっていく。

「さあ浄化だ。」

そういうと俺は槍を握りしめた。握った掌から血が流れ、ラテン語の文字をなぞるようにその槍を赤く染めてゆく。その血が刺さった臓硯に届くと、そこから光が輝き、流れ出る魔力の量が増えていった。

それは一枚の絵のようだった。刺され、膝を突く臓硯は、罪を償おうかという信仰者に。その槍を掴む何者かのシルエツト。それは神秘的であり、ライダーは見とれていたのかもしれない。

「さて、これで目標は終わりだ。桜を家に連れていくが、ライダーはどうするつもりか聞いてもいいかな。」

そこには男が立っていた。先ほどシロという少女が立っていたはずの場所に、どこか雰囲気似ている男が。

「カカ、そうか、お主か。たしか衛宮の養子の……。なるほどのう。あいつの跡を継ぐのかのう。そいつはきついぞ。カカカ。」

「まだ生きていたか。しぶといな。心配はいらないさ。切嗣じいさんの言っていた正義の味方にはならないしな。本人に言えばきつと笑顔にな

るさ。あのときは寂しそうな顔だったからな。」

「まあよいて、ではもう衛宮のせがれよ。先に行くかとしようかの、カカカ・・・。」

力尽きたのだろうか、力の抜けた臓硯は槍からずり落ちた。ドシャッという音と同時にその槍は消え、そこにはライダーと衛宮士郎が立っていた。

第四話 動き出す時（後書き）

半分で切れなかったのでちょっと長くなりました。

といっても、もつと長いほうがいいのかな？そこも含めて感想いただければ、いろいろ対応します。

もし「くがくしてほしい」なんていうご感想があれば、ストーリーに組み込ませていただきます。

あと、ENDに関しては、一応イリヤ√を予定にしていますが、他にほしいルートがあれば、ifで出すかもしれません。

次はこの続からです。ちょっと短いです。

第五話 救いし家族（前書き）

どうもお久しぶりです。

前回の更新から一カ月が経ちました。

遅いと思われる方、申し訳ないです。

なかなか妄想に花が咲かず、今はかなり苦しい…………。

といっても結局は駄文ですけどwwww…………ハァorz

非常にテンプレないいわけで申し訳ないですが、学校が忙しくなりましてなかなか続きがかけない。

というわけでした更新はこのペース、または少し遅れる可能性が大でございます。（まだ遅れるのかよ…………

では本文へどうぞ）

第五話 救いし家族

それから数分睨み合ったが、何も起きない。

それどころか、衛宮士郎からは殺気が抜けて、戦う雰囲気ではなくなった。

「桜を俺の家に連れて行きたいが、どうする？俺が運ぼうか。」

冗談ではない。我がマスターを預けるまでは信用してない。

先ほどの行動は、確かに桜のためだったが、それでも彼に対して警戒するのが正しいと思う。

「目の前であんなことがありや信用はないか。そりゃそうだよな。それじゃついてきてくれ。・・・慎二には・・・置き手紙でいいか。」

衛宮士郎はテーブルの上に書いた手紙を置き、自分の血を拭き取ってから家を出た。

わたしは後ろから桜を抱えてついていく。

あたりはすでに暗く、人はいない。

私は戦闘服のままで道を歩いた。人がいればただでは済まないでしょうけど・・・。

少し歩いて行くと、大きめの武家屋敷についた。

入口には何か結界が張られているが、害はなく警報のようなものだった。

衛宮士郎に部屋を案内され、居間に桜を寝かす。

私の分と自分の座布団を用意してきた衛宮士郎は、次にお茶の用意をした。

「悪いが緑茶しかなくてな。楽にしてくれ。」

お茶を取り、テーブルをはさんで座る自分とライダー。

「できれば桜が起きている間に事情を話したいが。とりあえず軽く説明はしようか。」

まだ桜は完全に救われてはいない。だからこそ今倒れているのだから。

「俺の名前は衛宮士郎。シロ・ゼルレッチ・シュバインオーグであり、元の身体は女の方だ。」

「……あなたは人間なのですか？統一言語といい、真名解放、さらには性転換ですか？」

「まあ言いたいことはわかるが……。それは桜が起きたら話しましょう。俺は自分のことを「魔法使いに近い」と言ったが覚えてるか？」

「ええ。この時代にサーヴァントとして呼び出される前に、座から知識としてこの世界に関しての情報は得ていますから。言葉の意味はわかりますが……。」

「知識は持っているのなら話は早い。要点だけ話そう。」

そういうと衛宮士郎は手にあの宝石剣を創った。

「俺の使う術は投影という。」

「投影？」

「ああ、そうだ。この場に無いものを、自分の魔力で創り出すことをいう。それは現実にあるうが、無かるうが、投影者自身がその創造理念、基本骨子、構成材質、製作技術、憑依経験、蓄積年月をこの場に魔力として込め創りあげる。その概念、魔力が一つにまとまるときにできる物体が投影物体であり、その現象を投影と言うんだ。」

「……現実が無いもの。」

「そう。今現在無くなったものでも。つまり伝説上の物体までもが可能性的に投影できるってわけだ。」

「……可能性のとは？」

「そりゃ、物体には様々な概念があるし、それこそ何千年という歴史を創りあげてる物もある。所詮ヒトの自分では不可能な投影なんていくらでもある。それに、自分の特徴で剣類以外はうまく投影で

きない。」

「ですが、先ほどの槍は……。」

「ロンギヌスは訓練の賜物ってやつかな。間桐臓硯を素早く倒すためにはこれほど強力なものはないしね。それに真名解放は単に魔力があればできる類の宝具だからね。もともと所持者は戦ってはいないし、「槍をもつ者」そのものの意でもある。所持者が明確である宝具はさすがに自分じゃ真名解放はできない。」

「……疑問に思うところがありますが、これだけは。なぜ私を知っているんですか。私は貴方の目に映ったこともなければ、声を聞いたこともないはず。」

「……知っていたんだよ。ライダーのことも、ライダーの真名も、桜のことも、間桐臓硯のことも。」

「………」

沈黙が続く。衛宮士郎の顔を見ていたライダーは、それ以上聞くのをやめたようだ。

お茶から湯気の出が収まってきたころ、衛宮士郎は立ち上がった。

「桜に最後の処置を施す。」

先ほど出した宝石剣を片手で持ち、もう片方の手で瓶を取りだす。そして桜の横に膝立ち、心臓を中心に魔法陣を描く。

元々完成品ではないこの宝石剣では、補助なしである程度以上の容量の物質は通過させることはできない。さらには、一工程シングルアクションでするに

は、時間か空間、どちらか力を限定させないと出来ない。そこまでも万能ではないのがこの宝石剣だ。だとしてもかなりの反則技ではあるが。

魔法陣が描き終わり、一呼吸置く。

「トレース・オン」

桜の身体を、特に心臓を解析しながら進める。

同時に魔法陣に魔力を流し術式を行う。

宝石剣の先端を、桜の心臓より上空、少し横から心臓を通り過ぎる形で空間に亀裂を創る。

その亀裂に手を触れると、魔法陣が光を放ち、桜がうめき声を上げる。

「大丈夫だ、桜。すぐに終わる。」

そう声をかけ、心臓内に居た蟲を手につかみ引き上げる。

元々、心臓に同化していた蟲も、概念を切り離してしまえば分離していたらしく、それらしい苦労もなく術式は成功。桜の顔も穏やかになり、規則正しい寝息が聞こえる。

「さあ、これで終了だ。使っている部屋があるからそこまで案内しよう。」

そう言って立ち上がる俺と、あわてて立ったせいか体制を崩したライダーとで桜を運び、桜が起きるまで兩人とも静かな夜を過ごした。

目が覚めると、そこは知らない人の部屋でした。

ライダーが珍しく寝ている様子で、私が起きているのも気づいていません。

私は部屋を出てみると、そこには美味しそうなおいが……。

ぐ~~~~つ。

おなかが減ってしまいました。／／／

おなかが減ってはなんとやら、ともいいます。ここは慎重にこの匂いのするところを探し当てましょう。

廊下をつき当って、右に曲がって、左に曲がり、少し行った右手側の部屋からいい匂いがします。

どうやらここからこの匂いが発生しているようです。

偵察のため部屋の中を覗き込んで……。

後は焼いた魚を皿にのせて、キャベツにハムを添えて、2人が来てからご飯と味噌汁をよそえばokかな。

さて、そろそろ呼びにしよう……。

……もう来てるか。相変わらず朝ごはんには弱いなあ。

「桜、出てきなさい。」

襖の向こう側で、びっくりして音を立てる桜がいた。

「桜、気をつけないと怪我をしますよ。」

その桜の背中を支えているライダー。桜を立ち上がらせ、服のしわを伸ばす。

桜自身は驚いているようで、瞬きもしないでこちらを見つめている。

桜、女の子が口をあけたままで止まらない。

「貴方は……。いえ、先輩は……。」

「俺のことはわかるかい？ 慎二のクラスメイトの衛宮士郎だ。好きに呼んでくれ。」

まさかあの先輩？私が兄さんにいじめられることが少なくなった頃、兄さんが友達をつくったって言っていた人。まさかあの先輩だったなんて……。いや、それだけならまだしも、あのライダーと一緒に先輩の家に一晚泊まり？いやいや、記憶がないだけで泊まったとは……。それだけでなく、朝食を用意させてる？あの先輩に？えっ？えっ！？

「いや、落ち着いてくれ。桜が知らないことはライダーが知ってるし、いろいろと説明するから。とりあえず朝食食べながらでもいいかい？ちょうど用意ができたんだし……。」

目の前には美味しそうな和風の朝食。おかずには湯気が立っていて、出来立てを示す美味しそうなにおいまで漂っている。

ぐーっ

「……………」

「桜、いただきます。食べなければ貴方の身体はもうもちません。」

私は赤面してうなずき、無言でテーブルに座る。

食事は滞りなく終わった。というよりあまり話ができなかったのだ。桜はかなりお腹を空かしていたらしく、朝食は想定していた量になり上回っていた。午後に作ろうとしていた炒飯分のご飯が……

・。

そう言えば、昨日は晩御飯を全然食べれなかったからなあ。しょうがないか。

食後、お茶を飲みながら話することとなった。

「とりあえず、自己紹介から始めようか。」

そんな軽い感じで話がはじめられた。

どう進めていけばいいか、どう始めていいか分からないからな。こういうときに日本語は便利だ。

「名前は衛宮士郎。慎二のクラスメイトであり、友達だ。同じ学校の現在1年。この春で2年に上がる。趣味はガラクタいじりと料理等々。質問はなんでも答えよう。」

なんて大雑把な。しかもホントに自己紹介だ。もっという切り出し方があったろうに……。

おずおずと手を挙げる桜。

「先輩は……。あつ、先に自己紹介ですね。私は間桐桜。この春から兄さんと一緒の学校に通うことになりました。ですので……、先輩と呼ばせていただきますけど……。」

申し訳ないように上目づかいで話を続ける桜。何もそんな怯えなく

ても…………。

「先輩は魔術師なんですか…………。」

Oh…………。

それは怯えるか。というより、そんなこと目の前で正直に聞いているものではないぞ。

「…………俺は魔術使いだ。桜…………。そんなこと正直に聞いてはいけないんじゃないか。」

はっ、となる桜。

魔術師とは神秘を再現することを目的とする人達だ。ただその神秘が厄介で、不特定多数に知られてしまうと神秘ではなくなる。よくいわれる「一般的」というものがそうだ。貴重であり、数が限られている物に対して、その物のランクが高くなるというのは常識であり、誰もがそれを手に入れようと躍起になる。

それが物じゃなくて、技術であつたら？

同じことなのだ。その技術、ここではある特定の魔術だが、習得している人、知っている人が少なければ少ないほど価値は高い。

魔術師であつても知らない魔術、使えない魔術があつて当然だし、相手が知らない魔術を知られてしまうのは神秘の降格を意味する。であるから、魔術師という囲いをまず敷き、その中で自分の魔術を知られないように、一般人には二重の秘匿がされている。

その一番外である一般人に「貴方は魔術師ですか？」と質問するのは主にデメリットしかない。自分の首を絞める行為なのだ。

といっても、それは魔術師の常識であり、魔術使いには神秘なんて

そんなに意味はない。

作戦上、こっちの戦力である術そのものを知られてしまうのはまずいために、ある程度知られないよう行動するが、結局はその程度なのだ。

とまあ説明が長くなってしまったが……。誰に説明してるんだ？俺は……。

長々と説明？している間に桜の顔色はどんどん悪くなっている。どうにかして機嫌を直さないと……。

「まあまあ、俺はぼっと出の魔術使いだからな。知られたからってそう困ることもないし。大丈夫だよ、桜。」

フォローする俺。フォローになってるのか？

「約束通り、昨日の続きを教えてくださいえますか？」

ライダーのその言葉に少し助けられた。

「ああ、そうだな。とりあえずは昨日話したことを桜にも話すか……。」「

そういうと俺とライダーの顔を見比べ？（はてな）を浮かべる桜。

「まずは驚くだろうが、俺のこの身体は偽物だ。桜はシロという少女を知っているだろ？」

「ええ、私の友達ですが。なぜ彼女が？」

「それ俺なんだ。」

.....

「いやあ、先輩。冗談にしても無理がありますよ.....」

そりゃ疑うだろうな。というより顔が引きつってますよ桜さん.....。

「見たら早いだろう.....。 R e f o r m a r e (戻れ) 」

俺の身体の輪郭がぶれ、境目が分からなくなったときに身体は変化する。

認識を女の自分の身体に向けさせる。それだけが、俺の身体は女に変化したように見える。

認識を完全に女の自分の身体へ向けさせると、桜は固まりこちらをずっと見つめている。

数秒後、大音量の声によってすべての音はかき消されることになる。

「ええー.....っ！」

もちろん桜の声だ。

さてどこまで説明しようか。

これ以上桜を傷つかせないために。

この後の目的はあいつを仲間に入れることか.....。

昨晚、魔術決闘、いや魔術による殺し合いがあった。

それともかなり高度な。あの間桐臓硯が生きて行動していたことに対して驚きだが、その間桐臓硯を倒しうる力の持ち主がここに存在しているのか。

あいつの話だともう召喚したマスターは数人いるとか。

だとしてもあの間桐臓硯を出しぬけるのか？

一年前のあの日から今日まで、魔力反応はほとんど無しとっていい。

一体今回のあれはどうなるのだろうか。

だとしても、私は勝つだけだ。

第五話 救いし家族（後書き）

こんな駄文を読んでくださってありがとうございます。

いやぁ半分は前回の続きでつくってあったけど、後半まるまるつくってしまいました。

なかなかうまく話が切れず、×の言葉が見つからない。

ここからは少し説明を。

ロンギヌスですが、元の持ち主である「ロンギヌス」は一応戦闘中相手に対してこの槍（イエスの死を確認するために刺した槍）を使っているというのは、調べても出てきませんでした。（調べきれませんが）

それに、アーサー王伝説の中にも出てきているらしく、人ではなく槍自身に力が宿っているのではないかと仮定してこう書きました。実際の fate の宝具は、宝具自体も力がありますが、その持ち主が使わなければ発揮できない類と、ルールブレイカーといった剣自体の効力があるので分かれていまして、それを後者と仮定しています。

ならば、魔力による能力解放ができるといまして、こんな形になっています。

また、ロンギヌスから滴る血というのはイエスを刺したとき流れる血ですので、いわゆる神の血というのですね。その血には浄化の効果があるとされるため、槍の装飾を伝う血には浄化の効果が付属されるという設定です。

reformare はラテン語で、「再び形成する」という意味です。あ、ちょうどいいじゃん、みたいなノリで使いました。reform の起源ですね。

ではまた次話で会いましょう。
さよならノシ (ニュースキャスター的な感じで

第六話 準備の準備（前書き）

お久しぶりでございます。

予定通り、中間報告を消して更新させていただきました。

さあ、今回はぶっちゃけいつの間にかできたストーリーです。
シリアス書こうとしたのになあ。

書くのが苦しくなると、こう逃げたくなるのは治らないものなのだろうか。

それじゃあ本文をどぞー

第六話 準備の準備

間桐臓硯との決着から、早一週間が過ぎようとしている。

桜はこの家に留まり、今はライダーと一緒に晩御飯の準備をしているところだ。

桜が目覚めたあの日、私は自分の身の上を話した。

細かく言えば、自分の身体、理由、自分の能力（宝石剣、投影関係のみ）、今後の予定を。

といっても、理解していない部分の方が多いようですが。

当然私はあの家に戻るよう話したが、それは嫌だときっぱり言われた。

これから聖杯戦争のセイバー召喚日には確実に危険が来るというのに。いや、あの場合は自分が殺されたから危ない目にあつたのだからか・・・？どちらにしても危険であることには間違いない。

拳句の果てにはライダーに私の護衛を任せてるし。私より桜の方が危ないんだよ？マスターなんだから。

そういうあれこれが過ぎたころ、あの虎は帰ってきた。

事前に話を合わせてもらうように頼んだからいいけど（交換条件でこの家に泊まりこみに・・・）、やはり納得はしていないらしく、今でもうーうー唸っている。

唸っているといっても桜のことは大丈夫であつた。兄の慎二のことを知っていたし、何より問題児の妹が入学してくるからといって情報は流れていたらしい。

そろそろ帰ってくるころだと思うが…………。

「ただいまー！ごはんできてるー？」

とまあ、桜のご飯に見事餌付けされました。

「もうすぐできますよ。シロさんと一緒に待っててくださいね。」

「わかったー。」

そういうながらテーブルの反対側に座る藤ねえ。

新聞のテレビ欄を見ながら「いいのやってないわねー。」なんてつぶやく。

最近では、晩御飯は桜と私が一緒につくる。

朝は決まって和食。朝食には白いご飯を食べないと力が出ないらしい。

藤ねえと桜が…………。

夕食は藤ねえの要望で洋食、気分で時々和食とランダム。

洋食の場合はある程度は桜が、今日は特別に新しいレシピを披露するため一人で作っている。

和食は分かるのだが、洋食となると古いもの、特に煮込む物しかレシピがない。

あの爺さん、十数年イギリスの方で過ごしていたためにレシピがかなり…………。

口では言いたくもないほどひどいものだった…………。

やはり昔から酷かったのですかね…………。

おかげで料理に関しては自分でつくらないのですよ。

ですから、新しくレシピをつくるしかなくて、元々知識の無い洋食はそれほど得意ではないのです。

和食はかなり研究できましたけれども……。

とまあ、そんなことはさておき、そろそろできる頃だと……。

「できましたー。さあテーブルの上を整理してくださいねー。」

言われたとおりにスペースを空ける俺、……いや私。

やはり思考から「女」にならなきゃボロが出そうだな……。

藤ねえは箸、スプーン、フォークを手に握り、今か今かと目を輝かせている。

「今日はグラタンです。一応初めて作ったんですけど、しっかり味見してつくりました。さあ、食べてください。」

「きゃー、グラタン♪チーズの匂いが食欲をそそるわー。いただきますーす。」

と、いきなりがつつく藤ねえ。そんなに慌てて食べると……。

「あっつーーーーー。」

そりゃ出来立てですから。熱いにきまってますよ。ちゃんと冷まさないと……。

そんな光景を見てくすりと笑い手を合わせ、

「いただきます。」

火傷しないようにゆっくり食べましょうね。

「あー、シロちゃん笑った。ひどいんだ。．．．ちえ、熱いよー、
って言うてくれてもいいのに。」

「言う間もありませんでしたよ。ね、桜。」

「そうですね。でも、グラタンの醍醐味でもありますけどね。」

そんな危ない醍醐味はちよつと勘弁してください、桜さん。
さて、いただきますしょう。

口の中を軽く火傷した藤ねえは、私が食べ終わってしまっている今
でも食べ続けている。

よくそんなに食べれますね．．．。

「．．．お姉さま、それで今日のことは．．．．．。」

「．．．そうだった、そうだった！まずはこっちなね！」

そう言って差し出す手には、資料らしき紙が数枚。

「・・・忘れてたわけではありませんよね？」

ツビク！

笑顔で怒る私。桜のそういった顔も怖いのだが、私がしてみても怖いらしい。桜以上に。

「・・・そ、そんなわけじゃない。ほ、ほら、お姉さんがこの美味しいグラタンをアーンしてあげるわよ。ほら、あーん。」

ぱく。

「これで機嫌はよくなりませんが、・・・とりあえずこの資料に必要事項書けばいいですね。」

「そう、ただの編入と違って期間付きの留学という形だからね。ちよっと資料が多いんだよ。」

けど代わりに試験はパス。編入したクラスで一番初めの定期テストで平均以上取ればオッケーということにしておいたから。」

なんじゃそりゃ。テストなし？

「編入テストないんですか？」

桜は思わず聞いてしまったようだ。

「「うちの親族ですし、向こうの学校で跳び級までしています。この学校にこのような才能ある子が留学するのですから、早く取っておかないと損しますよ。」っていったの。というか留学なのに向こうの資料がないからどうのこうのって言うてるし、面倒だったのよ。」

」

「・・・・・・・・・・」

あきれてものも言えない。

働きはとても感謝できるし、事情を知る桜もピンポイントで隠せると思ってるけど、さすがにこれは普通の方々には納得できないかと・・・・・・・・・・。

「まあ、何かあればお姉さまである私が責任を取ります。といったぶんお爺ちゃん取ってくれるでしょう。」

人任せキターー。

っていうか、組まで出張なのか・・・・・・・・。なら納得です。

権力って怖いですね・・・・・・・・。

「私はこの資料を完成させますね。では、・・・・」

そう言って立ち上がる私。部屋へ移動するため廊下を歩いていると・・・・・・・・。

ヒソヒソッ

ん？何やら寒気が・・・・・・・・。

風邪をひいても困りますし、早く寝ましようか。

現在、私はピンチです。

場所は私の家。

くわしく言えば私（シロが使っている）の部屋の隅。

周りは2人。

私は無手。

敵は両手に武器を持っています。

・・・・・・逃走から20分。ついに追い詰められた。

じりじりとすり足でにじり寄ってくる2人。

桜と藤ねえ。

部屋の扉は閉め切り、暗く、かといって見えないほどではない。

顔はこれほど楽しそうな笑顔はない。

誰か助けてください・・・・・・。

———7時間前

「ねえ、シロちゃん。」

とてもうれしそうな、楽しそうな声にする。

「なんですか？今最後の資料書いてるので、待っててください。もう出来上がりますよ。」

何かが私に警告する。これは覚えがあるような……。

「そう言えばね、シロちゃん制服はどうするつもりかなあって思っ
て。サイズ測らせてね。」

思い出せない。……とても嫌な思い出だったはず……。

「ええ、わかりました。ここでいいですか？」

「ならちゃちゃっと測っちゃおう♪」

♪って……。

―――1時間前

「制服持ってきたよ。」

は？

「早くないですか？サイズ測ったの今日でしたよね？」

「いやー、お店に行ったらちょうど入学シーズンの予約キャンセルが出たらしくてね。サイズが一緒だから買ってきた。それだけならもうちょっと早かったけど、いろいろ準備があつてね。時間かかったわ。」

と笑顔の藤ねえ。

笑顔？いや、得物を……見る……目……。

「ありがとうございます。制服は預かりますね。お金は……。」

「お金なんていいわよ。その代わり……。」

やばい。これはかなりやばい。

制服なんて建前だ。

絶対さっきの「いろいろ準備」の方が本命だ。

「へ、部屋の方に忘れ物をしました。ちょっと取ってきますから、待っててもらえますか？」

そう言って逃げる私。

ガシッ ↑桜が私の肩を掴む

ニヤッ ↑桜の顔が笑顔に変わる

グッ ↑藤ねえが親指を立て、手を前に出す

ゾワゾワッ ↑私を感じたものに鳥肌が立つ

ナゼサクラガココニイル？

ソウイエバ、アサカラミテナカッタ。

完璧すぎるコンビネーションに逃げることもできなかった私。
こうなれば最後の手段……。

「ちゃんと着ますから、恥ずかしいので一人で着替えたいです……」

声は小さく、うつむき気味に、顔を赤らめながら、上目づかいで……。

よし完璧。

効果の程は……。

ドサッ

鼻血を出しながら倒れる桜。
チッ、藤ねえは耐えたか。

「は、はいシロちゃん。これが制服。じ、自分のお部屋で着替えて
らっしゃい。」

ノックアウト寸前だったか。

いや、制服渡すまで死ねなかったただけか？

私は制服を部屋隠して（・・・）自分は隠れる場所を探す。

タイムリミットはおよそ30分。

それ以上はたぶん待てないだろう。

桜は私が俺だと知ってるから土蔵は使えないだろう。

藤ねえは単純だから、普通に私の部屋から探すと思うし・・・。
そうなる・・・、裏をかいて・・・。

「遅くありませんか？ 藤村先生。」

「うーん。まさかと思うけど……。逃げた？」

「シロさん最後はなんか急いでたみたいだったし。」

「倒れてたのに分かるの？」

「倒れて、シロさんの……。。」

「とりあえず、そのところは後で教えてもらおうわ。今は本人を探さないと。」

「そうですね。なら手分けして探しましょう。」

あつ、先にあっちのを持ってきたましようか。」

「そうだねー。桜は何持ってきたのかな？ 楽しみだわ。」

「いえ、藤村先生だって……。フフフ。」

そろそろ探し始めるだろうか。

先ほどから寒気がして止まらない……。。

それにしても意外な趣味を持っているんだな。

なんて言うんだっけ？ コスプレ？

かなりマニアックな衣装が大量に入ってた。

そう言えばいつの間にか男口調の思考になってるな。
やはり気をつけなければいけ……。

ガラッ

なん……だ……と。

いきなりここを探り当てた？

いやいや、そんなはずはない。たまたま部屋に忘れ物を（……………）
したかもしれないし。

え？ 一直線？ こっちに向かってくる！

ガラガラ……………

桜はこちらを見るとびっくりしたような顔をして固まってしまった。
私も扉を開けた桜を見ると固まってしまった。

ただ、私の固まっているところをみると、まるで洋服の丈を合わせて
いるような格好に見える。

もちろんそこにある服はマニアックな様々な服。

「桜さーん……………」

返事は聞こえない。

どうやら完全にフリーズ状態であるようだ。

「現在再起動中により脳の起動をお待ちください」というわけで、
逃げることにしましょう。

では桜さん。もう少し固まっててくださいね。

私は桜を避けながら部屋を出る。

すると部屋の中から「ドサッ」という音が響く。

音はかなり響き、どうやら藤ねえにも聞こえたようだ。

桜の部屋に向かう音が聞こえる。
今の内に逃げましょうか……。

この後、「桜だけずるいー。私も見たい！」などといいながら私を追いかける藤ねえ。

その藤ねえの後ろから「もう一度。もう一度見せてくださいー！」
といって藤ねえについてくる桜。
こうなった二人を止めることも、逃げ切ることもできなかった私には、最終的に追い込まれることになる。

――そして現在

「さ、桜さん。もうやめてもらえませんか。いろいろとやる事が残っているの。

お姉さまも興奮を抑えて冷静になってください。」

「今の私は止められませんよー。さあ、これを着てください。もちろん手伝いますから。・・・ハア、ハア。」

「さっき見れなかった分を含めて、今ここで今までの分を清算しなさい！」

「言ってることが分かりませんよ！あつ、いや、こっちに来ないでー。」

「大丈夫ですよ、シロさん。優しく、それこそ身体には（・・・）傷をつけたりしませんから。安心してください。」

「安心できるかー！」

—————2時間後

たっぷりと2時間、試着という即席の撮影会になったのは言うまでもない。

桜がいつの間にか手に持っていたデジタルカメラには、合計54枚ほどのマル秘写真が記録されることとなった。

当然、私は2人にお仕置きとして「朝飯抜き」「弁当無し」という罰を与えたのであった。

第六話 準備の準備（後書き）

さあ、みなさん。いろいろ言いたいことだらけでしょうが、先に一言。

申し訳ありません。

正直つらいっす。話が繋がらないっす。

もうちょつとで聖杯戦争本編なので頑張ります。

今回のシロの口調は仕様です。

本文の方では次話、というより今回の内容にも女口調でしゃべっていると感じ程度なら書いてありますね……。

そろそろ中間テストが近づいてきてまして、更新が遅くなると思います。（ならないかもしれませんが、作者次第です　／おい）

インフルエンザの予防接種も始まっていることなので、風邪等気をつけてお過ごしください。
ではまた来月の更新日に

第七話 関係調節（前書き）

どーもみなさん、あけましておめでとうございます。

ホントはちょうど0時に投稿したかったんですけど、見直したらいつの間にかこんな時間に・・・。

時間は計画的にね！

はい、そんなわけで前書きの尺埋めですね。
では本文へーどぞー

第七話 関係調節

キンコーンカーンコーン

チャイムの音が学校の中で響き渡る。

本日の学校は、新入生を除いた2、3年生の始業式の日だ。

ざわざわ・・・・・・・・。

一部を除いたほぼすべての生徒、または教師が体育館に集められている。

ざわざわ・・・・・・・・。

体育館の中は、春休みという「次年度の用意をする」という名目である休みを、「1年頑張ったのだから、もう1年頑張るために今内に休んでおきましょう」と勝手に意味を変えて過ごしてきた、ほぼすべての生徒たちのまとまりの無さであふれかえっている。

ざわざわ・・・・・・・・。

それ以外に、数人はしっかりと前を向き、教師による学校生活の開始の合図を今かと待っている生徒もいた。

ざわざわ・・・・・・・・・・・・・・・・。。

しかし、彼女は違った。

身体は前を向いているが、顔とその両の目は壁を向き、壁の向こうがまるで見えているかのように見つめ続けている。

ざわざわ・・・・・・・・・・・・・・・・。。

だが、それ以上にステージの上で話している校長先生の報告を聞いた生徒のざわめきであふれかえっている。

「えー、静かに。静かにしてください・・・・・・・・。」

ステージの上に居ない先生方も動揺は隠せないようだが、しかしそこは聖職者というべきだろうか、すぐに生徒たちを静かにさせる。体育教師だろうか、よく響く大きな声の注意が聞こえた途端に、体育館はまた静寂を取り戻した。

「えー、ということでした、今からステージに上がってもらいます。来てください。」

また生徒達がざわざわと騒ぎ出すが、今度は音ではなく雰囲気だけ

なので先生方も注意できないみたいだ。
といっても、先生方の方が興味を持っているのだろうか、注意する
気がほとんどないようにみえる。

カツカツカツ・・・・・・

ステージ脇の階段から誰かが昇ってくる足音が聞こえる。
一つ、また一つと音が聞こえる度に、体育館の中はざわめきを増し
ていく。

そしてその階段を上ってくる者の顔が見えた瞬間、ざわめきが一瞬
だけなくなった。

「みなさんはじめまして。先ほどご紹介に与りました、シロ・カレ
イドールと申します。よろしくお願いします。」

一呼吸置いた後、突然音が無くなった。

実際には無くなったわけではないが、耳が音として認識しないのだ。
鼓膜が空気の振動を捉え過ぎて、処理しきれなくなったのだ。

体育館の中では、数人を除いた全ての人間が音を無くしていた。
その中で2人は見つめ合っていた。

「ではここで。後は合図で教室の中に来るように。」

担任である葛木宗一郎はそう伝え、自分は教室に入っていく。

私は廊下で待っていていれればいいのだが、先ほどから魔力がこちらに向けられている。

そんなにも怪しいのだろうか。

それとも名前に反応したのだろうか。

どちらにしても印象はかなり悪いみたいだ。

担任が彼だからであろうか、教室は比較的静かであり、合図によって教室に入った時もそこまではうるさくはなかった。

というより、彼女が睨んでいるからだ。

この学校で優等生として有名である彼女が、感情をあらわにして睨んでいるのだ。

触れぬ神に崇りなし。

文字通り神（彼女）に触れないためにも必死で静かにしていたのだろう。

始業式も終わり、今日は授業がなかったのでこれで帰れるのだが・・・。

しかしそこはトラブルメーカーというのか、フラグブレイカーというのか・・・。

自分の好奇心に忠実なやつはクラスには一人は居るものだ。

「よう、転校生。あたしゃ蒔寺楓っていうんだが、シロって呼べばいいのかい？」

「彼女は転校生ではなく編入生だ、蒔の字。私は氷室鐘だ。」

「初めまして、シロちゃん。私は三枝由紀香っています。よろしくね。」

正直に言うといけない、そんな印象を持つ一人目と突っ込み役と天然さん。

なかなかのバランスだと思った。でも仲良くはできそうね。

「初めまして。呼び方はこだわりませんから、呼びやすいようにしてもらえば大丈夫です。こちらこそよろしくお願いしますね。」

.....

3人ともびっくりして固まってしまった。
何かいけなかったのだろうか。

「いや、驚いた。体育館でもそうだったが、出身は外国だと思うのだが.....」

「とっても日本語が上手なんだね。たくさん勉強したの？」

「ホントは日本人なんじゃないのか？いや、話せるだけで読めないとか.....」

「さすがにそれは侮辱しすぎだ。むしろ蒔の字こそ日本語を読み間違えるだろう。」

「意味が分かればいいんだっての。だからモウマンタイ！」

「蒔ちゃんはゆっくりだとちゃんと読めるもんね。平気だよ。それでね、今日の帰りなんだけど一緒に遊びに行かない？」

「美味しい甘味処ができたようなのでな。試しに行こうと計画していたのだ。どうだ？」

「鐘も由紀っちもひどい！」

さながらコントのような会話なのだが、用は親睦を深めるために甘いものでも一緒に、というわけだろう。
しかし私は……、

「ごめんなさいね。私の方で先約がありまして、今日は譲っていただけかしら？」

そこには優等生がいた。

「場所は……。屋上でしたかしら？」

「ええ、先に行ってますね。では後ほど……。」

「……。というわけなんです。今日は学校の方を見て回りたいので……。申し訳ありません。また後日、一緒に行きませんか？」

「えー。遠坂だけずるい。私だっていろいろ話したいのに……。」

「こら、蒔の字。べたべたとくつつくんじゃない。明日以降も時間は空いているだろう。」

そんなことをしながら、渋々と認める3人。
文句を言って帰っていく一人を2人がなだめて……。いいトリオですね。

「さて……………」

……………屋上に向かいますか。

「あの規格外は何なの……………」

規格外……………。

それは予想を超えるのではなく、私の根本にある規格自体を超えるものにつけられる称号。

それこそ人を超えるなんてしなきゃつけられるものではない。
もうすぐ始まるっていうのに……………。
なんでこんなことになったんだろうか。

「……………来たようね。」

ドアを開けるとまだ朝に近い、まぶしい太陽の光で目がくらむ。
こちらに殺気のみを放ちながら話し合う。

「はじめまして。私の名前は……。」

「本名で話しましょうか。さすがに堂々と偽名を上げられることは、かなり不可解に思えますが……。」

「……そうですか。しかし、本名はまだ教えることはできませんね。というよりも直球すぎやしませんか？被ってる猫も見えてきているというより、もう脱いできてしまっているようですが……。」

「……カレイドール。」

さすがに気付きますか……。いえ、さすがにこれで気付いてもらわなければ……。

「なぜその偽名を使っているのかは知りませんが、それを使われて私が黙っているわけじゃないじゃない。」

肩から手首に、そして指に魔力が移る。
その魔力を放つために指を向ける。

「宝石を扱う私の家系をなめないで！」

これさえ決まれば……。

ガッ

「え？」

相手に向けた指は、その手首をつかまれ上を向いている。
相手との距離は約5メートル。

人の一步は大体身長分の大きさを持つ。

ならこっちまで最低3歩は移動する必要がある。

それに対し、こちらは指を相手に向けるだけ。

どう見てもこちらの方が有利だったはず。

「何が……」

「起きたのか分らない？」

!?

その声は間後ろから聞こえた。
一瞬で移動したのか、それとも引き寄せられたか、はたまたそう見
せられていたのか。
もう・・・

「何が何だか分からない？」

「なんで・・・」

「心まで分かるのか？」

ゴクッ

飲み込まれた。

相手の技に、術に、雰囲気・・・。
自分のペースが作れない。

「そう焦ることはないよ。私はまだ敵ではないから。」

まだ？ならいつ？

「そう、そこが重要。でも分かっているはず。思い出してないだけ。」

それは・・・

「聖杯戦争・・・」

「そう。でもまだ始まってない。ルールだからね。何も手は出さないよ。」

「ならなんで教会に？」

「あそこは厄介な敵がいるから。そう、．．．とても厄介な．．．．．」

教会に彼女の資料は無かった。

普段は渡来してきた魔術師に関しては、本部から情報を取り寄せるのに。

あそこにはあいつしかいない。

言峰綺礼。

それにあいつは審判。

「ルールを知っているが故に、ルールを捻じ曲げることもできる。いや、ルールなど無いに等しいか．．．。気をつけた方がいい。後悔しないように。」

バサッ

「え？」

私の身体が宙に浮い．．．
いや、抱えられてる？
え？

カー

顔が赤くなるのが分かる。
いわゆるお姫様だっこ状態だから。
でも……………。

「はい。」

そう言って、私の身体をフェンス近くの段差に座らせた。

「できれば秘密としてほしい。対価は払うけれど……………」

差し出すその手には魔力が……………。
しかしその色は……………。

「虹色!?!」

「それと、今夜全ての魔力探知機器を停止させてほしい。そのため
の対価だよ。」

研究はこれでかなり進むが、はたして目の前の彼女は……………。

「もう一度言いますが、まだ敵ではありません。だからこそ取引を
したんです。」

断れば……、というわけか。
どっちにしても負けてしまったのだから従うしかないけれどね。

「分かったわ。すべての条件を飲むわ。けれど始まったら……。」

「ええ。では、今日のところは。」

そう言って出入り口から出ていく彼女。

それにしても無事でよかった。どうなることか心配だったが……。

そう言えば本題が……。

「あっ！本名！」

彼女が去ってから気づくのは、いつもの彼女が戻った証拠だった。

第七話 関係調節（後書き）

え？

さらにひどいって？

いやはや、投稿しようか悩みました。

改造に改造して、ここまでもってききましたけど・・・
これ以上にひどかったんですよ。

なんて見せてないからわかりませんよね。

すぐに続きを書き上げて投稿したいと思ってます。
次回はもっとまともになる予定です（予定だけです
今年もよろしくお願いします。

第八話 召喚（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。

はい、今画面に向かって土下座しています。

今度から予防接種ちゃんと受けます。

帰ったら手荒いうがいちゃんとします。

自分を見つめなおします・・・orz

しっかりと見つめなおしあとがきで反省を・・・。

第八話 召喚

屋上でのやり取りのために、帰ってくるのが遅れてしまった。

現在時刻は午後2時30分。

家に帰ると、玄関にはなぜか怒った様子の桜。

なぜ怒っている？

そしてなぜ藤ねえまで隣に居る？

「あのー……。」

「なにか？」（怒

「いえ、何を怒っていらっしゃるのかなあとと思いまして……。」

「何も起こっていませんよ。」（怒

いけない。

全ての会話の後に（怒）が聞こえるくらいに怒っています……。

「というより、お姉さまはこんなに早く帰ってきて大丈夫なんですか？」

「え？ いやー、なんかおもしろい事があったから教えなくちゃー、ってことだと思う帰ってきちゃった。てへっ。」

ふえ？ おもしろい事？

「おもしろい事ですか・・・？」

「そうよ。例えば、初登校日に学校一有名で綺麗な優等生に屋上まで呼び出しされた人がいるよーとか。他には、告白スポットは野球のバックフェンスの裏や屋上があるよーとか。後はシロちゃんが今日は帰りが遅れるってことね。」

人差し指を口元に軽く当て、こちらにウィンクをかます藤ねえ。

なるほど・・・。

「あー、今日は桜の調子がおかしいようですし、遅れたお詫びとして私が夕ご飯を作りましょう。」

「「え？」」

いきなりの言葉に戸惑う二人。

特に慌てているのは、なぜか桜の方だった。

「シロさん。今晚は私の番ですよ？」

「そうよ。桜ちゃんに任せた方がいいんじゃない？料理の練習になるし。もしかしたら新しいメニューかもしれないよ。」

「え、ええ。新しい味を試してみようかと思ひまして、今日は私に任せていただけませんか？」

「ほらほら、シロちゃん。桜ちゃんがこう言ってるんだから。今日は桜ちゃんだけでっ・・・。」

「いいえ、私が作ります。異論は認めません。それに桜は今の味のをもっと練習しなくちゃ、新しい味を試しても失敗しますよ。」

「・・・・・・・・シロちゃん厳しい。」

「・・・・・・・・そうですね、私は厳しいですよ。覚えておいってくださいね、お姉さま。」

藤ねえはこれで今後の悪戯は少なくなるでしょう・・・・・・・・。
むしろ無くならないですかね。

というより、先ほどから桜の様子が・・・・・・・・。

・・・・・・・・ブツブツブツブツ・・・・・・・・

ゾワゾワ

後ろを向いて何かをつぶやいている桜を見ると、悪寒がするのです
が・・・・・・・・。

気のせいでしょうか。

こちらも何とかしなくてははいけませんね。

とりあえず、今日の晩御飯は藤ねえのみご飯と梅干、ふりかけが3種類で、桜にはいつもよりちょっと豪華なおかずをつくりました。
私が少し目を離れた隙に、桜のおかずを取ろうとして伸ばしてくる箸をガードしつつ、桜のご機嫌を取っていたのだが、いつの間にか桜の機嫌は良くなっていて、問題は無くなってしまった。

藤ねえには、今後このような悪戯をしないという約束をさせおかずを与えたが、あまりにも軽いノリだったのですぐに破られると思わ

れる。

そこを見越して次のお仕置きを考えなくては……。

晩御飯が終わると、藤ねえは自分の家に帰って行った。

今日の仕事は……

「後は呼び出すだけですネ。」

「……桜。」

「大丈夫ですよ。藤村先生はちゃんとお家に帰りましたし、見届けもしました。先輩の体調もオッケーですし……。」

「唯一の問題は私が。それでは儀式から。」

「わー、普通の魔術なんて見たこと無いんですよ。それに儀式なんてするものなんですね。」

「本来は必要ありません。儀式とは術式を行使するために必要な場の整理を、便宜上他の言葉と別にしてあるだけです。ほら、勉強するときは必要なものを出さなければできないでしょう。あと、魔術に普通なんてものはありません。」

「なるほど。」

2人は歩き出す。

その先は土蔵。

儀式といってもすることは魔法陣を描くこと。

元々、この地は魔力自体でそこまで困ることはない。

現在の段階ではできないはずの、他からの魔力を吸収、固定化ができるため、個人の魔力だけではできない魔術も発動させること自体はできる。

ただし、コントロールは魔力概念を使わないと基本的に無理だが・・・。

今回は魔術陣という術式的にかなり大がかりな用意が必要であるが、その代わり必要な魔力は他所から持ってこれるという、かなりずるい設計となっている。

これも爺さんの剣の応用なんだが・・・。

「先輩って円描くのうまいですね。」

なにを言っているんですか？この人は・・・。

「魔術によくつかわれる記号というのは、魔力をその式に廻^{めぐ}らせる為にほとんどは始めと終わりがくっつきます。よって、円や星、三角、四角といった基本記号は綺麗に書かないと魔術が発動しません。陣なんか特にです。」

「なるほど……。」

「それに魔術を使うときの意識は、基本的に円を思い描くことで発動しますから、その円が綺麗に想像できない人はまず魔術が発動できません。魔術の発動が早い人っていうのは、その範囲をどれだけ素早く想定するかという面も含まれるんですよ。」

「なるほど。」

いつの間に私は解説なんてしているんですかね……。
まあ、準備というものは時間をかける割に地味なのですが。

「元々、魔術師というものは魔女という女性の魔術師が元になっている節があります。それは女性の脳の構造上、多機能にわたり同時に思考、または行動が男性よりもしやすいということも関係しているらしいですね。もっともこの話は科学で魔術を視るという矛盾がありますから、流してもいい話ですけど……。」

「はぁ……。」

「話を戻しますが、魔術には円や三角という図形をどれだけ正確に、多様に想像できるかというのが重要ですので、魔術を覚えさせる前に綺麗な円や三角などの図形をプリントした紙を永遠と見せるという勉強法も実際にあったそうです。」

「そんなこともやるんですか。私がやったら図形が目には焼けついてしまいそうです。」

「……。」

「どうかしたんですか？」

なるほど、考えてみればそうだ。

眼に図形を定着させれば魔眼の作成ができそうだ。

しかしどうやって？

義眼なら直接描くことができなくないが……。

それなら光やけを応用して？

いや、数秒で効果どころか陣が途切れてしまうだろう。

それに光やけでは綺麗に図形を調節できないだろう。

どちらにしても計算には2次元ではなく3次元で考えなくては。

魔法陣には角がある図形は使えないから……。

「あゝ、先輩？」

しかし、直線を使えば円と角を表すことができるからそれを組み合わせれば……。

そうすると、角を多く使う石化の陣は使えないにしても、ランクを落とせば発火させることはできる。

それだけでなく、五大元素による対象攻撃はできることになる。

だとしても全て通常威力よりもランクを落とすしかないから、ダメージを与える等の攻撃系魔術は使えないか。

補助だとしてもやっぱり身体強化はランクを落とさないといけないし、部分強化でしかも発動時間が極端に短くなる……。

部分強化？

そうか……。

「……………んぱい。……………てる……………先輩！聞いてるんですか、先輩！」

「……ん？ ああ、ごめんね。ちょっと考え事を……。」

「もう、先輩ったら……。もう陣を書き終えているんじゃないですか？」

「え？」

蔵の中はサーバント召喚陣を加工した召喚陣がすでに完成していた。

「ほんとだ……。」

やっぱりこの身体は……。

「しっかりしてくださいね、先輩。」

うん、しっかりしないとね。

しかし……。

「今更ですが、その先輩って？」

「先輩は先輩です。おんなじ学校の一学年上。そりゃ先輩ですよ。」

「……まあいいでしょう。では離れていてくださいね。」

陣の中央はこれから先、いえ、私の過去に血で跡をつけた場所。そこに宝石剣を刺す。

私は入口の一步手前で、桜はそれよりもっと手前で立っている。宝石剣の魔力収集機能を起動させ、私自身も魔力を創り出す。

「術式開始・・・・・・・・。トレース・イン。」

そう呟いた先輩は手を広げ魔法陣の中心を見つめている。
魔法陣が光を放ち、まぶしくて目が開けられなくなったが、どうも
先輩はまだ何か呟いているようだ。
なぜか私と先輩の間に壁みたいなものがあるような感覚があり、音
がうまく聞こえない。

ブワッ

風が吹き抜け私は飛ばされそうになった。
どうやら魔術は終わったようだ。
光がだんだんと収まって、夜の暗さへと戻っていく。
そこには先輩が立っていた。
そう、先輩が・・・・・・・・。

「はぁ、私ってどうしてこう詰めが甘いっていうか・・・・・・・・。」

赤い服の少女は、今日の昼ごろを思い出しながら自己嫌悪していた。

「あんな予想外というか、想定外というか無茶苦茶じゃないのよ・・・。」

あの白髪の少女の言うとおり、教会への報告はしなかった。

現在はもう一つの約束を果たそうとしているが・・・。

「あー、ムシヤクシヤする。観測装置一つだけ起動させてやる。どんなことするのか確かめてやるんだから。」

手元にある複合型観測装置を最小機能で起動させる。

この観測装置の利点はボタン一つとつまみが二つ。私でも扱える機械。

あとボタンが二つ付いていたら、たぶん爆発させてしまうだろう。

「これで何やってるか見てやるんだから・・・。」

と思った瞬間、目の前の観測装置は警告ランプを発する。

「え?」

メーターは振り切り、装置自体が振動し始める。

「え・・・え?」

戸惑う私に、警告を発する装置が振動によって動き出す、ついには・・・。

ガシャン

机の上から落ちてしまった。

メーターを視るガラス部分が割れてしまったようだ。

「ちょ、ちよっと!」

わたしは急いで装置を拾おうと手をのばす。

ボン

「・・・・っ!」

その時、装置はいかにもな音を立て、煙を上げる。

破片が飛び散ることはなかったが、それでも危険であることは間違いないだろう。

「何やってるのよ、あいつは・・・・。」

相手の行動を探れなかったばかりか、貴重な機械が一つ壊れてしまった。

彼女が扱える（・・・・）装置は少ないのだ。

機械音痴である彼女は、この部屋にある装置の半分以上を飾りとしている。

要するに使えないのだ。

使える装置の中で一番使いやすく、さらには機能としても申し分ない装置が、目の前の煙を上げている機械の他にいくつあるのだろうか。

「明日からどうやって観測すればいいのよ!このバカー!」

忠告を聞かなかった彼女の自業自得であることは明らかではあるが、
この怒りはどこへぶつけられれば済むのだろうか……。
今夜の通りは怒声が響き渡ったという……。

第八話 召喚（後書き）

こんな話ですみません。

短い上に話進んでない……。

もっと上手く書きたい。

ごめんよシロ……。

あんまり活躍してなくて。

基本的に私は話をストックしてないので、その場の気分とノリで書いてます。

え？ 同じだって？ 大切なことなんですよw

ストックしたいんですけどね？ なかなか話がかけない。

かいても今一つ。

どうやったらうまいと思われる書き方が身に着くのでしょうかね？

とりあえず考えながら書いてます。

参考にいろいろな人の小説を読んでいます。

けど、あれ？ なんか読む方に夢中になってる……。

ごめんなさい。はい。

次回、シロの使う魔術とその他の説明をしたいと思います。

あ、ちゃんと本文はありますよ。

同時にあげたいと思ってます。

今度こそ……今度こそ時間通りに話を上げるんだ……。

これはフラグじゃないんだ。決して……。

それとまじめな話ですが、資格試験用の勉強を始めますので遅れはないかと思いますが、いつの間にか忘れてるかもしれませんのでご了承ください。

せつかくやつてるんだから書ききりたいです。
ではみなさん始まったばかりの今年、頑張りましょう。
では

第九話 はじまりと前夜（前書き）

ごめんなさい。

いきなりですがごめんなさい。

いや、ね？

気持ちだけ先走ってしまったわけなんですけど……。
まあ、うん。気持ちだけじゃないね。

……。

頑張った結果がこれだよ……orz

第九話 はじまりと前夜

「んあ、はあゝ・・・・ふう。おはよう。」

目が覚め、誰もいない空間に挨拶する。

俺は学生。

今朝は特に用事はない。

しかし他の人はそれぞれの用事でもう出かけた。

・・・・・・

いつまでも布団の中に居ると遅刻してしまいそうだ。
そう思い、制服に着替え、立ち上がり部屋を出る。

「・・・・・・朝飯食べよう。」

朝飯を食べた俺は、部屋に戻って布団をたたむ。

机の上に置いてある鞆を手に取り、また部屋を出る。

現在時刻は7時20分を過ぎたところ。

今からゆっくり歩けば少し早い時間に学校に着くだろう。

ガチャリ

玄関に鍵をかけ、歩き出す。

が、どうにも見られているような……。

まあ、いいだろう。

登校時間は約30分。

走れば半分を切ることだってあり得る。

要するに信号と交差点が少ないのだ。

ただ、坂道を登らなくてはいけないので体力は必要だが……。

早めに登校しているわけでもないのに、今朝は人が少ない。

交差点まで下りてくると、見慣れない光景に出くわした。

数台のパトカーが止まっていたのだ。

さらには、かなりの人数の人だかりができている。

かなりの慌ただししい雰囲気が見てわかる。

そこまで時間もないので、俺はその光景を少し見ただけでまた足を動かし始めた。

予鈴の10分前に到着。

学校の校門をくぐると……。

「や、おはよう衛宮。」

「突然だな。おはよう、美綴。」

見知った女子が声をかけてきた。
しかし、その格好は……。

「なんだ、まだ着替えてないのか。もうすぐホームルームだぞ。俺に挨拶している場合ではないだろ。」

「あはは、いや、ごもつとも。相変わらずつれない野郎だねえ、衛宮は。」

何が楽しいのだろうか。

「今日は妹さんと一緒じゃないんだ。」

「いつも一緒に居るわけではない。今日は生徒会の方だ……。」

「なるほど、振られたってわけだ。問題児が揃って振られるとはねえ。あはは。」

「む、問題児ってなんだよ。それに揃って？」

「振られたことに関しては追及しないのか。」

「そんなこと言っても無駄だからな。むしろ何か言えばそれだからだろうか？」

「ばれたか。」

「それで、もう一人の問題児さんは誰に振られたんだ？」

「おや、気になるのかい？最近の慎二のお熱は遠坂だよ。だがこっぴどく振られたらしくてね。昨日一日ずっと機嫌が悪くてさ……。」

「はつきりしないな。慎二の機嫌が悪いときなんて結構な頻度だろうか。」

「いや、機嫌が悪いだけならいいのだが。昨日はやり過ぎてね、一人男子部員がやめてしまったのだよ。」

「一人やめた？」

「慎二のいじめだろうか。」

「はあ、と深刻そうにため息をつく美綴。こいつがこんな顔するのも珍しいけど、それ以上に今の話は……。」

「慎二が八つ当たりしたのよ。わざわざ女子を集めてね、弓を持ったばかりの子に射をさせて、命中するまで見世物にしたらしい。」

「はあ？おまえ、それを見過ごしたってのか！」

「見過ごすか！私だって聞いたときは腹が立ったさ。言い訳にしかないが、昨日は主将としての仕事をするために道場を離れてたんだよ。衛宮だって分かるだろう。」

「確かに主将は忙しい。」

「道場外の仕事もかなりある。」

「それにしても慎二のやつ……。必要以上に厳しく教えても、素人を見世物にするようなヤツではないだろ。」

「————呆れた。衛宮ってば、ほんとにアレだ。」

「む、アレってなんだ。失礼なこと考えなかったか？」

「そんなことはございませんよ。さあ、私は着がえてくるからね。偶には私の弓を見てくれよ。」

ああ、やっと登校してきましたね。

「おはようございます兄さん。」

「ああ、おはようシロ。」

なにか複雑な顔をしている衛宮士郎。

「まだ慣れませんか？」

「いや、違うんだ。慎二の奴がまたなんかやったらしい。」

ああ、なるほど。もうですか。

「……兄さん、分かってますね。」

「……ああ、分かっているさ。」

放課後、バスに乗って新都に出る。

彼と彼女、衛宮士郎とシロ（・・）・カレイドール（・・・・・・・・）が歩く。

今日は同じ場所でバイトである。

場所は飲み屋兼酒屋コペンハーゲン。

つまりは、酒を飲めるし持って帰れる。

もつといえばつまみも出る。

・・・・金さえ出せば。

今日は棚卸がある日らしく、男手が必要なのだそう。

実際にバイト先についてみれば誰もいない。

どうやらみんな逃げたようだ。

バイト先の店長であるおやじさんは軽いノリで「今度棚卸があるから、手伝ってくれるひと手伝ってねー」と言っただけ何もしてなかったそう。・・。

娘のネコさんは「そりゃ来るわけないよ。」と呆れたように声をかけたところ、なんと！来たではありませんか。

しかしまだまだ手が足りないのも事実。よって今日はできる範囲で倉庫を整理しよう、という運びとなった。

店番はシロに任せて・・・。

このような形になったので、飲み屋の方は休業。

酒屋だけの片店舗となったわけだが、どうしてか売り上げはいつもと変わらないらしい。

いや、シロが店番するときは酒屋が、料理を作れば飲み屋が儲かるらしい……。

とまあそんなことは置いておき、気付けば二時間後、棚卸が予定通り終わっていた。

「あれかね、士郎君はブラウニーか何かかな？」

「劳いの言葉は兄さんだけですか？」

「いや、そんなことはないよ。ささシロちゃん、これでも食べて。」

「アンタ、それラム酒入ってるやつでしょ。食べるならこっちね。」

「それだって酒のつまみだろう。それに辛いし。」

「なにを、そんな甘いものばっか食べていられるかー。」

ワーワーギャーギャー

辛党のネコさんと甘党のおやじさんが言い争う。

「もうそろそろ5年か。」

「ん、そんなに経つのかい？うわー、そりゃ歳とるワケだ。」

ネコさんが俺の言葉に反応したようだ。

「切嗣が亡くなってからすぐに雇ってくれたの、おやじさんのところ
しかなかったですから。」

「シロちゃんはもうすぐで一年かな。」

「もぐもぐ……そうですね。そうなりますね。」

先ほどのオヤジさんが食べているケーキとは別のケーキを食べているシロ。

いつの間に……。

「いやー、シロちゃんがこの店に来てから売り上げがドーンと増え
たし、ほんと君たちはこの店の、いやボクの福の神だよ。」

……シロちゃんに至っては天使かな……

バシッ

どうやら最後の言葉が聞こえたみたいで、ネコさんは怒ってしまったようだ。

「シロちゃんは私のだい！」

少し顔の赤いネコさんは、そんなことを言い出しながらシロに抱き
つく。

「……もう、ネコさんはハウスです。」

呆れながらシロが言う。

いや、それは犬だよ、シロ。

「さあそろそろ帰りますよ。兄さん。」

「えー、もうちょっと居ようよー。」

抱きつくネコさんを手で押しやるシロ。

「そうだな、そろそろ帰らないと。家には煩いのがいるし。」

「あぁっと、これは僕の気持ち。今日はありがとね。」

そういったおやじさんの手には封筒が。

中身は5枚の万札。

さすがにこれは……。

「ちゃんとシロちゃんと分けるんだよー。」

といってそそくさと逃げたおやじさん。

何も言わせないつもりか。

「はいはい、気持ちはちゃんと受け取りましょうねー。では店長、ネコさんお疲れ様です。」

「「お疲れ様ー。」」

「さあ帰りますよ。」

「……強引だなあ。」

帰ろうとした矢先、

「……あ、ちよい待ち。士郎君今日の話誰から聞いた？シロちゃん？」

「いや、たしか古海さんからです。」

「はあ、あのバカは。学生に自分の仕事押し付けるなよ……じゃあ今日は又聞きで来たわけ？」

「ええ、そうです。シロにも確認とりましたし。」

「……シーローちゃん。」

「だってウソつくのはいけないでしょ？私からは教えていませんよ。」

「……まあ、いいや。ちゃんと士郎君の手綱持っててあげてね。それじゃ。」

そういつてネコさんは奥に行ってしまった。

帰り路――――

「なんだよ、知ってて教えてくれなかったのかよ。」

「だって教えちゃダメっていうんですもん。それに兄さんは無茶するでしょ？今日みたいに。」

「無茶なんてしてないだろ？少し急いでやったら終わったただけだっ

て。」

「はあ、兄さんは……。まあ、今日のことはいいです。さっさと帰りましょう」

そう言って足を速めるシロ。

シロは目の前の坂を登り切った。

後ろ姿が見えなくなったと思ったら、シロに似ている子が坂の上にいつの間にかいた。

最初シロかと思ったが、シロではない。服装が違っていた。

このところ物騒な事件があったせいで、元々人通りが少ないこの坂道には人がいないと思ったが……。

そのシロに似た少女は坂を足音もたてず下りてくる。

シロより少し小さいだろうか……。

そんなことを考えていたら少女から声が聞こえた。

「早く呼び出さないと死んじゃうよ、お兄さん。」

おかしい言葉を、口にしていた。

声までシロにそっくりだった。

帰ってきた途端にまた鍛練というお遊びですか……。

まあやって意味がない事はありませんが。

まあ、その方がこっちも集中できますしね。

シロは衛宮家の洋館の一室にいた。

どうして洋館に移ったのか……。

本来の主が戻ったからである。

といっても、どちらも本人には間違いはないのだが。

約一年前、私が穂群原学園に通うようになってすぐ「衛宮士郎」を召喚した。

召喚と言ってもサーヴァントとは違い、そのままの形で時空を飛び越し、この世界（宇宙）へと連れてきた、と言ってもよい。

本人には、ほとんど自分を取り巻くこの世界と自分の世界との違いが分からなかっただろう。

まあ強いて言えば、私の存在と桜、後は……なんでしょうかね？
そこまでは変わってないですからね。

あの夜、補助魔術陣に間違いがなかったけれど、どうしても強度が足りなかった。

宝石剣に流れる魔力にどうしても耐えきれなかった。

そのために用意した概念魔術もどうにか吹き飛ばされてしまったように、途中から術式が変わってしまった。

変わったのは座標。

呼び出す元となる場所が、昔の私、あのお爺様に呼ばれたすぐ後の私だったのが、お爺様に呼ばれなかった私を呼んでしまったのだ。

しかし時間はとっさに修正したのがよかったのか、現在の時間と全く変わらない私を呼ぶことに成功した。

おかげで時間差による誤差は無いが、かなりの戦力は落ちてしまった。

といっても本来の形は今の戦力より下ですが……。

現在取り組んでいるのは3次元の魔術陣。

透視、望遠系魔眼の作成だ。

元々目に魔力で陣を組んだり、目自体に強化をすればいいのだが、それでは一工程増えるばかりか下手をしたら自滅する可能性もある。ワンアクションなので、今回は魔力を通せば魔力陣が自動でできるコンタクトを作成中だが、どうにも3次元の魔術陣ができない。まあできなければできないでいいが、できればかなり戦闘で楽ができる。

でも、最近はず士郎に戦闘方法を教える必要はないからそこまで時間が取れない。

戦闘方法と言っても魔術は一切教えてない。教えたのは二つだけ。

「戦力分析に必要な情報の種類」と「防ぎ方と逃げ方」
要するに生きるための方法だ。

といっても教えたのが自分だから、前者はいいとして後者はほとんど意味がない。

士郎じゃできないのが大半だからだ。

とまあそんなことはいいだろう。

今日は早く寝ましょう。

明日はいろいろ忙しいはずだから。

彼女は今日が忙しかったはずだけど……。

では、おやすみなさい。

第九話 はじまりと前夜（後書き）

はい、飛ばしすぎました。

もうなんかネタがね……。

やばいのしか浮かばなかったのさ、H A H A H A ……。

うん、巷で「あの人変態なんですって」なんて言われてしまうくらい
の事を書いてしまいそうで……。

うん、やめました。すっぱり切りました。

あと、説明がくって話は今回戦闘シーンまで行かなかったので無し。
戦闘シーンが入れば出します。

決して書いてないわけじゃないです。

（フラグだよ、この書き方……。

今回は見たことあるような内容でないでしょうか。

そりゃそうだよ。本編やりながら書いてましたから。

といってもまるまる同じ文章は無いはずです。

違うといってもセリフ抜いているだけのところもありますが……。

そこは、はい、すみません。次で書きなおします。

ワンアクション

一工程は工程を数えた時の呼び方であり一工程とは違いますのでご

シングルアクション

了承を。

シングルアクションはそれだけで一つの単語です。

（そういう解釈だと思ってますので、違ったら指摘お願いします。

あ、それと、P Vやら総合評価がかなりびっくりな感じに。

また何か作りたいですね。

では長くなりましたが、次回も楽しみにしてくれたら幸いです。

それでは。

大変遅れてしまって申し訳ありませんでした。

地震は大丈夫だったんですけど、直後に家族がインフルエンザ・・・。

なんか我が家にはウイルスが蔓延してるのでしょうか？

その他報告等はあとがきで。

注意..今回はっちゃけ回です

話の内容はほとんど進んでません。時間的に進んだだけです。

なんでしたらこの話自体を飛ばしてもらってもかまいません。

次話前書きであらすじ書きます。

ぷ「はい、こんにちは皆さん。」

第十話&PV10万を超えた記念といたしまして、ささやかながらこんな企画をご用意いたしました。題して、」

『——シロの一日を覗いちゃうin 稲穂原学園——！』

キヤー、パチパチ・・・・・・・・・・。

ぷ「え？期待してない？

あ、そうですか。でもつくったからにはやります。

じゃあまずは、起床する前の寝顔からきg」

グシャ

ぷ「あ、」

シロ「で？どこを書くの？」

ぷ「・・・・・・え？いや、まあ学園生活をね？」

シロが普段どんなことをしているのかとか、ね。」

ダラダラ・・・・・・・・・・（汗）

シロ「そう、でも家の中からなんて聞こえたような・・・・・・・・」

ぷ「いやいやいや（ブンブンブン）。学校に行くところからってだけですよ。」

いや、ね、学校のことゆうたら、そりゃ行って帰るまでが学校ということですよ。

いろいろ行事とかもそうですし、それ以外でも学校と関係があるものすべてがそうであると私は考えているわけです。

そりゃ、元々男だったからー、なんてことも含まれてないってことは断言できませんし、容姿がイリヤに近いっていうかイリヤの数年後、つか成長したらー、なんていう私の脳内がなんか作用していてこれ書いてるなんてことも全くないなんて言えませんかね？

というか、元々この小説書いている途中は基本そんな妄想しかしてない作者が、それ以外何を書けと？何をここに表したいと思っているのですか？

そりゃシロなんて単純な名前書いという思考が単純ではないと？いやいや、単純ですよ。そう私はシロという個体に魅力を感じてですね……………」

シロ「……………」↑どん引き中

ぷ「それにしても、元々ふあての世界から離れてたのにふあてのS書こうとした理由が同人読んだからっていうのに、そういうのが無いってゆうのはあり得ないと思いませんか？

そうでなきゃ桜とか虎とか、あんな暴走しませんよ？それより暴走させたいのがライダーであって、早く出してあげられないかなーなんて思っとるわけなんですが……………」

ツンツン、サツ

シロ「……………」あ、はい。これ、カンペ？え？進めろって？あ、無視していい。」

ぷ「ブツブツブツ……………」

シロ「はい、作者が大変残念な思考回路と、不純な欲望を抱いてるということが分かったということで、この企画を進めさせていたできたと思います。なお、途中までということですので、この企画、途中でいきなり終わってしまうなんてこともあります。その時は地の分で〳〵終了〳〵書いておきますのでご了承ください。」

ツンツン、サツ

シロ「え？はい……。メタなこと言うなって問い合わせ？メタですが……。そうだと思いますか。そうですね。このあたりはこの小説の後半もしくは終了後に書き足そうかな……。」

ぷ「この小説（妄想）はエンドレス!!!!!!」

シロ「五月蠅い」

バシ、ガン、ゴロゴロ……。

シロ「さあはじめましょう。では」

シロ、ぷ「よろしく願います。」

学校とはあまり関係はないが、朝の日課というものも紹介しておこう。

シロの朝はとても早い。

起床時間は大体6時前。

衛宮士郎は、聖杯戦争が始まるまで朝の鍛練をすることはあまりなかったのだが、現在は毎朝シロと士郎の鍛練から始まる。

といっても、シロは始めの数分身体を動かし、直接の指導はほとんどしない。

シロが士郎に教えようとしてもできないことが大半だからだ。

なので、実際は鍛練というより運動の方が的確であったりする。

ぷ「これは前話の最後にも書きましたね。」

シロ「そうですね。確か情報の読み取りと戦場の生きかたでしたか？」

ぷ「まあ、そんなものです。では続きを」

運動を始めて数分後、シロは朝食を作り、台所へ。

朝食を作り、制服に着替える。

朝食を食べ終われば学校に行くわけだが、時刻は7時40分。

普通に学校へ行く時間には早すぎるというべきだろう。

もちろんシロ自身も早いと思っている。

ここから学校のことを話していくわけだが、シロは現在生徒会に属しているのだ。

シロ「生徒会ですか……。面倒ですね。」

ぷ「元士郎とは思えない発言！」

シロ「ああ、まだ私の設定資料出してないんでしたね。」

ぷ「え？ええ、そうですね。いろいろあったもので……………」

シロ「……………はあ。」

ぷ「いや、でも、ちゃんと出しますよ？そりやもうバンバンと。シロだけで2、3話書く勢いで。」

シロ「……………はあ。」

ぷ「おんなじ反応！？え？マジですか？空気読んでないですか？」

シロ「さあ、続きいきましょー。」

ぷ「なんか言ってくれ！」

生徒会での役職は副会長。

会長はもちろん柳洞一成である。

副会長としての仕事は主に三つ。

- 1、 会長のサポート。
- 2、 衛宮士郎への連絡（緊急要請も含む）
- 3、 遠坂凜への牽制

である。

会長が言うに、「学園で遠坂凜と対決できる貴重な戦力の一つである。それに加えて親友と兄妹という関係だ。信頼できる人材であることは間違いないし、生徒会にいないてはならない一人とすぐに連絡が取れるという面でも効果的である。……できれば一緒に仕事をしていたきたい。」

という言葉を本人から直接言われ、“基本的に不参加”という生徒会にあるまじき条件をつけ生徒会に入った。

この行動により、その他の生徒会役員や各種実行委員は会長を称えるようになったという。

しかし、不参加という条件をつけたにもかかわらず、参加二日目にして書記の横領を発見。

これにより生徒会、実行委員等はシロに頭が上がりず、書記当人は反省しシロについていくとまで言われたそうだ。

ぷ「今思っただけだよ、」

シロ「なんですか？」

ぷ「生徒会ごときが全部活、委員の運営資金管理なんてするわけないよね。自分、元生徒会書記ですから。」

シロ「誰が？」

ぷ「私が。」

シロ「……………は？」

ぷ「いや、マジで。仕事と言ってもほとんどサポートだし。生徒会発行の冊子なら作ったけ

ど、いつもマニュアルがあるから例年通りにやれば無難にできるからね。といつても書記としての仕事以外に生徒会のパソコンやプリンタなどの機械修理をやってたなあ。そう思うと士郎が書記でもいいんじゃない？」

シロ「・・・・・・・・・・ほんとなんですか？え？まさか、務まるわけありませんよ。」

ぷ「・・・・・・・・・・傷ついた。もう立ち直れない。」

シロ「あゝあゝ、ごめんなさい。本当に謝るから。元気出して。」

ぷ「・・・・・・・・・・。」

ツンツン、サツ

シロ「え？なにになに・・・・・・・・。そのままそっとしておけば大丈夫？え、ああ、そうです

か。寂しくなったら勝手に出てくると。本当にこどm・・・・・・・・。っと口がすべりそうになりました・・・・・・・・。まあ、生徒会が教師とは別に運営資金の完全管理しているところは多くはないと思います。が、実際にあるらしいですね。と言っても私の学校は完全管理になっているので他のことは言えませんが・・・・・・・・。」

ツンツン、サツ

シロ「あ、早くしろと・・・・・・・・。はい、すみません。再開しますね。」

というわけで御覧の通り、生徒会の副会長に就任したという話でした。そろそろ学校の中の話にもなりますね。さあ続きを始めましょう。」

シロが通う穂群原学園は一日6時限、1時限50分の、通常の公立高校と何ら変わらない授業をしている。変わっているとすれば体育ぐらいであろうか。

年間に約5〜7種目のスポーツを授業内で行う。その中には通常では行いうことができない種目も入っている。例を上げるなら弓道など、設備がないとできないものだ。

といっても、体力検査などやらなくてはいけないものも含め、年間約60回しかない授業の中にそれだけの種目をやるので、ほとんどさわりしかできないのが現状である。

といっても生徒、親の共に好色を示しているので、成功だったのだろう。

これで何が言いたいというなら、それだけ担当の先生方がいなければならぬというわけである。

よって穂群原学園に在職している先生の数通常の学校よりかなり多い。

そして、人が多いということは変わり種もいるということだ・・・

「さあ、授業始めるわよー。先週先生が見たい映画を見逃したので、今日はその映画を英語で見まーす。字幕は無しで流しますから、今から配る用紙にストーリーの内容を簡潔でいいから書いてくださーい。」

ということなのである。

といってもこれだけの変わりものは彼女だけであるが……。

「せんせー、前回では先週やったテスト関連やるって言ってましたよね。やらないんですか？」

といったまともな生徒もいるが、

「バカ！いらんこと言わんでいいだろ。それで授業つぶれるんだ。授業後対策に寝かせろよ。」

という穂群の黒豹という自称を、自信満々に言いふらすことのできるおバカさんもいるというので、先生、生徒間の仲は良好だといっているだろう。

何が言いたって？

そりゃおにあい……。

ギロツ×2

なんで地の文を睨めるんですかね？あの人たちは……。
とまあ置いておき、このようなユニークのあふれる生徒や先生もいます。

かといって先生方にまじめな人がいないなんて言っていないですよ？ちゃんといますよ。安心してください。

むしろ立派に先生している方が多数を占めていますから。

ぷ「俺、こんな学校行きたくないなあ。」

シロ「あ、直った……。そう言わないでください。気にしてるんですから。」

ぷ「だとしてもなあ、あの授業は無いと思うんだよなあ。理由が見逃したからって。たぶん

レンタル料金は授業準備経費に組み込まれるのが目に見えて……。
」

タイガー「……ん？こっちで私の陰口言われた気が……。
。ていうか、この名前何よー！作者！作者はどこ！はやく見つけて……。」

ぷ「（見つけて……なんだ？）」

タイガー「……テイセイサセテ、ワタシノシナイノサビニ。
」

ぷ「（こわ！え？何このキャラ。というか竹刀に汚れはできても錆
！？血の鉄分ですか？ここからはやく逃げないと。」サササ……

シロ「というわけでかわりd……もとい、へんz……ちがう、個性的な先生の紹介でした。」

タイガー「どこだー！ー！ー！ー！」ドタドタドタ……

穂群原学園は基本的に公立の学園と変わりはない。

特色といえば先ほどの通り、体育の授業システムとその対策のため

の教師の数がそうである。

強いて言うなら文武両道を目指した結果、運動部と文化部が増え、部費の関係で仲が悪いということであろうか。

といっているのも、今年から数年、いやシロが学校にいる間はもうほとんどないだろう。

というわけで授業風景はほぼ皆さんが経験しているのと大差ないので割愛とさせていただきます。

というわけで、シロがどんな学校生活を送っているか分かったただけたと……

え？

分からない……

そう、……そうですね！

分からないですよね。

そうなんです！分からないんです。ミステリアスな人なんです。

事実、まだ聖杯戦争に参戦していませんからね。

これからおもしろいことが始まるんですよ。

さあ、これで落ちがついたということ……

シロ「ついてないですよね。」

え？そんなこと言われても……。作者の脳内ではこれが限界だということなので納めていただくには……

シロ「いきません。」

き、きびしいなあ。

シロ「というより、作者で合っていますか？」

いえ、私は作者ではなく作者の脳内、いわゆる人格というものですかね……

魔術関連的にいえば精神というものが妥当かと。

シロ「ああ、なるほど。だからそんな口調で。」

そうですね。そう言えばシロさんは知っていますからね。

シロ「ええ。この作品終わりそうもないから、今ここで話してもいいじゃないかと思いますが……。」

そうされると今後のネタが……。

シロ「聖杯戦争後の？」

……はい。

シロ「そこまでやるつもりなんですか。」

……作者はそのつもりだと……。

シロ「続くといいですね。」ニコッ

……（怖い、恐ろしく怖い……）

ぷ「はい、意味不明かつ自己満なセリフありがとうございました。」

シロ「出てきた。」

ぷ「そりゃ出てきますよ。これは私の作品ですからね。」

シロ「まあいいですけど、これで終わりではないですよね？」

ぷ「そりゃもう、まだまだ続きますよ。けど、私たちは退場ということにしたいかなと。」

シロ「ああ、もう出番は終わりということに。」

ぷ「はい、長々とこんな茶番にお付き合いしていただき誠にありがとうございました。」

シロ「私の設定に関してはこの後、投稿されるという形で大丈夫ですか？」

ぷ「はい、一応表設定という形ですので、この設定の後に出される設定はまた次回という形でお願いします。」

シロ「散々しゃべりましたが、まだ終わりではないのでね。このまま本編をお楽しみください。」

ぷ「といっても、本編進めるため都合のいいように時間を進めてるだけなんだけどね」

シロ「……………」

ぷ「おうっ。怖いよ。無言の睨みは怖いよ。まあ失言はさておき、私たち抜きで本編の方を進めていききたいと思います。」

シロ「このような無駄な部分も読んでいただきありがとうございます。」

ぷ「これからも精進していききたいと思います。では、」

ぷ、シロ「ありがとうございました。」

というわけで、今後は私が説明をさせていただきます。

軽く説明させていただくと・・・。

え・・・？ 知らない。そうですか。

まあ、さっそく本編移りたいところですが。あとほんの少しだけ説明入れさせてくださいね。

ここからは、シロが生徒会に入ったということで、生徒会の仕事を見せていきたいと思っています。

生徒会の仕事というのも、基本的に一日で終わりません。何日かかけて行うのが普通なのですが、今回は一日だけということで、集会を覗かせていただくという形になりました。
ではどうぞ。

「本で行うのは、各部活の活動報告と実績による反映された部費の明示予告です。」

ここにいる人は、部活の部長または副部長、生徒会のみである。

本来であるなら監督の先生方を招き、その監視の下で行われるのが普通であるが・・・。

「まずは副会長であるシロさんから、提出された報告書を読んでいただきます。よろしく願います。」

シンッ

場が静まる。

その場にいる誰もが注目する。

「……まず、先に言っておきます。発表の順番はここにある資料の順番ですので、賞などの大きさは関係ありません。今回は顧問の先生方がいないのである程度までは騒いでも結構ですが、度が過ぎれば今後この会自体がなくなりますので、それですらうければどうぞ。」

皆の緊張が高まる。

「まず、野球部、地区予選一回戦突破。バスケット部、地区ブロック2位。科学部、気象関連論文の完成。囲碁部、地区大会3位。……」

各部活の実績がシロの口から発せられる。

今までであれば、それぞれの報告等は会長または書記から発表されているが、シロが副会長になったときからその担当が変わった。

というより自分たちの実績をシロの口から言ってもらいたくて、各部活の部長、副部長達が会長に直訴したらしいのだ。

それだけではなく、生徒会によるシロの声をもっと聞きたいという意味が分からない願いも込めて、生徒会全員が作成した副会長の引き継ぎファイルの中にある仕事一覧内に忍び込ませたのであった。

シロ本人はそれでいいと思っているので、まあ良しとしておく。

と、話は逸れたが、なぜこんなことをしているのかというと。

「……最後に弓道部、段位試験一級合格者2名、初段2名、三段1名。以上です。これより、実績のあった各部活はいつも通り報酬を選んで発言してください。」

「はい。」

野球部の部長らしき少年が手を上げる。

「はい、野球部ですね。どうぞ。」

会計の子が指名をする。

私はまだ部活と部長の顔がまだ一致していませんので、分からないのです。

というより意識して覚える気はありませんが。

「次の大会に副会長の応援を要求します。」

という報酬があるので、先生方を呼べないのです。

もちろんこの集会は厳密に言えば公式ではありませんので、部費変更といった報酬は今ここではできませんが、この会限定でこのような報酬もありとしているのです。

生徒会としては、貴重な戦力ではあるが部活動全体の活気も上がるし、何より部費を払わなくてもいいという、なんというか……腹黒い考えでOKを出したのである。

報酬は主に3つ。

部費の増量。

基本的にはこれに決定ですが、部活の総数の関係で上がらない場合もありますので、他の選択肢も選ぶことも。

設備等の購入。

部活動における必要な設備や小道具、消耗品の購入を経費として落とすことを生徒会が許します。また、基本的にも高額なものばかりであるため、割引という形、または準生徒会役員（衛宮士郎）がどこからか持ってきて、修復して調達という形を取る。

厳密にいくらと決定しているわけではありませんが、その時々によ

って許される範囲が変わるので、安定した報酬とはいえないかもしれません。

ただ、各部活はシロのことを信じているので、必要な時はこれを選んでいく部活も多いです。

シロによる部活動参加または大会等の応援。

なぜこれが出てきたのか知りませんが、さる変わり種の教師による陰謀かつ部長連盟というものによる熱い（暑苦しい）期待と要請によって正式に報酬とされました。

また上記のほかにも一日マネージャーというのもOKだそうです。主に大会に勝つための士気向上などをお願いするというまじめな部長もいるので、シロは強く反発できないのです。

ましてや生徒会に常に参加しないという条件もここに反映されますので、どうにもできないのが現在の状況ですね。

しかし、最近は新しい意図があって選ばれることがあります。

では、「野球部、囲碁部、陸上部、弓道部が私の部活動参加という形になりました。その他の部活は次回の公式発表で正式に発表されますので、そちらで確認をお願いします。では今回の集会は終了します。では解散。」

囲碁部、陸上部はこれで5回連続になります。

理由といえば・・・・・・。

囲碁部では、部長とほぼ同等の強さで勝ち負けをしっかりつけておきたいということらしいです。このような時しか戦いませんか。陸上部では、それぞれのエースを抜かないにしても、それぞれの部門を一人で荒らしているような形になっているようです。前回では高跳びでエースと同じ高さを跳んだらしいですが・・・・。

いわばどちらもプライドですね。本職には本職の意地があるということ。

「シロ」

「アヤコ……。今からですか？」

「そそ。私の弓の調子見てくれよ。まだ少し時間あるだろう？」

リン……。遠坂凜を通して私とアヤコは友達となりました。一回このように報酬として私にマネージャー関連をさせましたが、その時の弓の調子が良く、さらに下級生の弓の上達の下地にもなったそうです。

それ以来、報酬が必要ないときは私を呼ぶようになりました。

今日は……。まあプライベートですからね。いいでしょう。

「会長。」

会長に許可を得れば、これで今日は仕事が終わります。

「いいですよ。後片付けは事前の通りに。今日はもう大丈夫です。」

「では、お疲れ様です。」

「シロさんお疲れ様です。」 「副会長お疲れ様です。」 「」

会長とその他の役員に挨拶を交わし、アヤコと一緒に弓道場へ行く。

「それにしても、最近またシロの人気は上がったね。」

「・・・上がってほしいものではありませんが。」

「そりゃ、バチあたりだね。皆シロの人気に羨ましがってる。でも納得しちゃうんだよ。」

「そういうものですか。」

「そういうものなんですよ。」

そこまで目立ってほしくはないですけど、それ以上に士郎に目立ってほしくないですからね。

只でさえ私の存在が引きつけてるから、大丈夫だとは思いますが・・・。

「あれ？」

弓道場に電気がついている。

「電気がついてますね。」

「ああ、それはいいんだ。掃除がまだ終わってないんだろう。点検のときもつけるし・・・。けど・・・。」

「・・・？まあ、入りましょう。」

私たちは弓道場に入る。中には明りはついてるが人がいない。

「あれ？」

私はそのまま備えの休憩室を覗く。
アヤコは簡易更衣室を覗いている。

「いませんね……………」

「……………」

「綾子？」

綾子が黙りこんでいる。
何かを考えているようだが……………。

「どうしたんです？」

「慎二の掃除の仕方じゃない。それにこの床からはじめるやり方は……………」

どういうことでしょうか。掃除の当番は慎二だということは分かりましたが、いまいちわかりません。
普通は床からでは……………？

ガラガラガラ

扉が開く。

誰かが入ってくる。

たぶん……。

「衛宮、お前か。慎二の奴はどうしたんだ？」

「おお、美綴か。どうしたんだ。」

「それはこっちのセリフだ。……いや、まさか掃除が変わったなんて言わないだろうな。」

「ん？変わったが、いけなかったのか？」

「「はあ」」

私と綾子は同時にため息をつく。

「すみません、綾子。」

「いや、いいんだ。苦労するな、こんな兄貴を持つと……。」

女子二人は気落ちし、男子はその理由が分からずに？マークを浮かべる。

時刻は5時を少し回ったところ。

あたりは少し暗くなり始めたころであった。

はい、どうでしょうか。

なぜかこんな話が出来上がってしまったて、どう処理すればいいか・
・・。

設定ですけど、延期ばかりですが今回も延期という形で。

元々この話で赤VS青だったんですけど。記念なんて入れ込んだせいで長くなって切らざるを得なくなりました。

1万文字は軽く超えてしまいましたからね。

この話だけでも8000超えてますが・・・。

学校も始まるおかげで、やっぱり月一がちょうどいいかもしれません。

くどいようですが、月一更新は自分のノルマですので変わる場合もあり得ます。

その時は謝罪と共に（ry

第十一話 黒と白と紅と蒼（前書き）

どうも、またまた遅れてしまった作者であります。
はぁ。。。どうして、こう・・・

プログラムって難しいのですかね・・・ハア

さて、今回はちょっと難産でした。

といっても忙しすぎて脳内劇場の開演回数が減ったからなんですけどね・・・。

戦闘は今回は軽め。

たぶん次回が主な戦闘になるかと。

これ以上は後書きにでも書きましようか・・・。

前話の前書きで書きました、前話のあらすじを書きます。

興味がない、もしくは「前回の見たからこんな下手なあらすじ見るよりちゃんと覚えてるさ。ハッハア」なんて言う方は本文へお進みくださいなw

- 1、一日開始
- 2、シロの学園生活は謎であった
- 3、シロ副会長万歳！！
- 4、アヤコ・・・あれ？デレ？
- 5、士郎が弓道場の掃除をワカメに頼まれる
- 6、シロとアヤコが士郎とかち合わせ

これでだいたいok
よし、これで勝つる

え？ごめん正直もう限界・・・寝かせて。

第十一話 黒と白と紅と蒼

慎二が頼まれた弓道場の掃除を、俺が代わりにすることとなった。

それはいい。

あまり丁寧に掃除を続けていたわけではなかったらしく、この際だからいろんな所も掃除しようと思った。

それもいい。

水を汲もうと水道からバケツで水を運んでいる間に、なぜかシロと美綴が弓道場に來ていた。

まあ、これでもいいだろう。

正直に掃除が変わったと言ったら、目の前の二人はため息をついた。

・・・なんですか。

「なんだよ。美綴だって弓を見てくれて言ってただろ。ついでに見てやろうと思ったのに・・・。」

美綴は申し訳なさそうに、

「あー、すまん。弓の件なんだが、シロが見てくれるっていうんで今連れてきたところなんだわ。」

・・・なぜ？シロが整備等できることは知っているが・・・。

「衛宮だって知ってるだろ？生徒会のアレさ。今日はその件で私が抜けるのと、慎二がこの前やらかしただろ。だから今日は休みってことにして、罰として掃除をさせてたのさ。」

「あー・・・・・・・・。」

それは申し訳ないことしたなあ。

「すまん。そうとは知らず。」

「いいって。まだ部員じゃないんだし、善意でやっていることだからな、むしろ助かるよ。」

「・・・・・・・・まだ？」

シロがその言葉につっこみを入れる。

「ああ、“まだ”だ。絶対にもう一回入ってもらうさ。あんない腕しておいてやめるなんて勿体ない。」

「まだ諦めてないんですか。・・・・・・・・まあ頑張ってくださいね。」

「おいおい。敵を応援してどうする。」

「ひっどいねえ。私に向かってそんなこと言うんだ。」

「というより慎二さんの頼み事はある程度無視しなさいって言いましたよね？」

「いや・・・・。なんか用事あるらしくてな。」

「そんなものほっとけばいいだろ。基本的に私から慎二への頼みごとってのは罰しかないだろう？」

「わかってるって言ったくせに・・・・。」

「あーあー。すまなかった。今度一品増やすから。」

「あはは。シロは衛宮の乗り方がうまいねえ。このまま弓道部に引っ張ってこれないか？」

「それはだめです。」

そんな会話をしながら俺は掃除を始めた。

その後の話で掃除範囲は縮小され、たぶん遅くなることはないだろう。

あのまま掃除をするんだったら、10時を過ぎても終わらなかっただろうからな。

最近は何騒な事件も起きている。

新都の件や坂を下りた一軒家もそうだ。

なるべく早く帰宅するように教師に・・・・藤ねえに言われてることだしな。

「さあ、やりましょうかね。」

そう呟き、掃除のスピードを速める。

現在時刻は8時30分。

辺りは暗くなっていて、教師もたぶん残っていないでしょう。

元々、私はアヤコの弓を視るだけでしたのでそんなに時間はかかりません。

それに解析もしていますしね。

そろそろアヤコを家に送らないと……。

「兄さん、そろそろ帰らないと……。」

衛宮士郎は黙々と掃除をしている。

少し離れていた場所に居るせいか、今の声では聞こえなかったようだ。

「おや、終わったかい？ シロの集中はすごいね。こっちの声が聞こえてなかったし……。」

「っ！……びっくりしました。いきなり出てこないで下さいよ。」

「気付いてすらなかったのか。まあいいか。そろそろ帰らない？」

「ええ。後は兄さんがいいと言え……。」

「……ん？ なんか呼んだか？」

ようやく気付きました。

私もあんな風に集中すると周りの声が聞こえなくなるんでしょうかね。

「もうそろそろ帰りませんか？」

「んー……。もうちょっとだからな。これが終わったら帰ろうか。」

「そうですか、なら待ちましようね。アヤコ、お茶はもう出せませんか？」

「うーん。そうだねえ。……」

「いや、先に帰っててもいいぞ。途中までシロに送ってもらえばいいんじゃないか？」

「おいおい、それはまずいだろう。シロと私は女だぞ。」

「坂を下りた辺りまで送りましょう。私はまた戻ってきますので、兄さんは終わらせておいてくださいね。」

「おい……。いいのか？そんなことして。」

「大丈夫ですよ。それにアヤコなら護身術があるでしょう？私より強いんですから。」

「ホントにこの兄妹はひどいね。……。わかったよ。それで妥協するさ。」

「なら行きましょうか。」

私は急ぐ。今日はアノ日だから。

「さあさあ、いきましようか。」

準備が終わったアヤコの背中を押しながら、私たちは弓道場を出て、校門を抜け、坂を下りる。

「何を急いでたんだ？何かあるのか？」

「いえ、いやな予感がするんですよ。こういう時の感は当たるんです、私。」

「なら衛宮も危ないんじゃないか？置いていいのかよ。」

「すぐに戻って連れ戻しにいきます。すみませんが、見送りはここまですでいいですか？」

「ああ、いいよ。今日はありがとうな。んじゃさっさと帰りましようか。」

「ではまた……。」

タッタッタッ

そんなに急いでたのかね？ いやな予感というのは私もあったんだが・
・・・。

まあ、あんな真剣な顔してちゃ断れないよね。

にしても、相変わらず足が速いね。もうあんなところにいるよ。
変なことにならなきゃいいんだけどね。

「さあシロもいってたし。早く帰ってお風呂にでも入ろうかな。」

私は鞆を持ち直し、軽くジャンプをしてから走り出した。

「いやな予感ね・・・。」

「そろそろだろうか・・・。」

タッタッタ

シロは坂を走り抜ける。アヤコに見える位置は普通に走っていたが、
見えなくなると魔力を使って速度をもっと上げた。

一度出た校門から入り、弓道場へ近づく。
しかし明かりが消えているようだ。

「っ！ ・ ・ ・どこへいった。」

――
聞こえる。

――
ンッ

どこか遠くで。

――
キンッ

ぶつかる音が。

――
ガキンッ

それも高速で打つ金属の音が

ガキンッガキンッ

時間は……、そうか、もうこんな時間だったのか。

ザッザッザッ

私はその音に近付く。

ザッザッザッ

相手には気付かれないように。

ザッザッザッ

最速で・・・。

私は校舎わきからグラウンドへ逃げたの。

突然の戦闘だったけれど、ここまでの選択肢に間違いはないはずだった。

ただ、一つだけこの作戦に欠点があるとすれば、“人に見られやすい”ということかしらね。

こんな時間まで学校にいる生徒はいないはずだし、この学校の先生は帰るのが基本早いし。

最近は事件があったから、先生同士でも早めに帰宅するようにしているようなの。

だからといっても確認をしたわけではないけどね。

感覚では一般人はいないと思ってたんだけどな・・・。

この時までの感想をとある女子が語った。

ガキツガキンツ

制服姿の女生徒の前には、紅い男と蒼い男がいた。

2人の格好は、私服とはいえず、また礼服でもない。

ましてやファッションという外見を一番に見立てるような格好でもない。

それはそれぞれの手に持つ、凶器を扱うための服装である。

片方は短剣二振り、もう片方は紅い長槍。

2人は素早く動いているのであろう。

素早くがどの程度まで表すのか分からないが、その速さは残像が見える程度だ。

ガキンツ

ツザシユ

大きめの金属音が聞こえ、それぞれが距離を取る。

「やめないかね、ランサー？」

紅い男がつぶやく。

「な、何言ってるのよ。」

その後ろに立つ女生徒がその言葉を拾ったようだ。

「こっちに手を出さないらしいが、高みの見物を決められるのは癪に触るな。」

紅い男に蒼い男が言葉を返す。

「このままなめられるのも嫌だが……こっちのマスターは臆病なんでね、帰らせてもらおうか。」

2人の会話に入っていけない女生徒は苛立つ。

「な、なんなのよー！どこにいるってのよ！見えないし感じないじゃない！」

そういい、紅い男がその女生徒に説明しようと口を開くが……

「凜。常に優雅たれ、というのはどこに行ったのかしらね。」

また別の、女生徒の声がそれを遮った。

この場に現れた少女は、足だけ月の光に晒され顔は見れない。

「凜。あれは誰だ。」

紅い男がそう問いかける。

「アレだなんて、口の悪い方ですね。」

そう言い、月明かりが身体すべてを照らすところまで歩く。
凜は驚き、紅い男は警戒を、蒼い男は殺気を向ける。

「シロ。なんで来たの……。なにg」

私はその場を動く。

特殊な（・・・）移動の仕方であつたからか、その場の3人はさらに驚く。

「ばかな！俺の槍を避けた！？」

「逃げるんじゃないたんですか？」

私は毒を吐き、紅い男と向かい合った。

「私の用事は……。今は貴方ですよ。……。アーチャー。」

「なっ！その剣でアーチャーだったのか！」

「あら？まだ知らなかったのですか。」

そう言いながらアーチャーの目を視る。

その目には何も宿らず。先ほどのVSランサーの殺気が消えていた。

「……。なぜシロがアーチャーを知っているのかは聞かないでおくわ。なぜここにきたのかしら。」

先程とは変わって、冷静さを取り戻した凜は私に聞いた。

「んー、そうね。一つは確認したくて。もうひとつは……やっぱり確認したくて。」

そう言い両手に剣を持つ。

「「っ!？」」

アーチャーとランサーが警戒をする。

「ライダー」

私がそうつぶやくと、戦闘服を着こんでいるライダーが私の隣に現れた。

「っな！」

言葉を発したのは凜。

その声が合図となり、男2人と女2人が戦闘を開始した。

カンツカカンツ

先程の重い金属音とは違い、軽い音を立てながら戦うライダーとランサー。

シロとアーチャーは一度動き、また足を止めて睨み合っている。

「その術は……」

「同じよ。喋る余裕があるのかしらね。」

「それはこちらのセリフだ。」

2人、両手に持つ剣の色は白と黒。

片方は短剣二振り、もう片方は脇差二振り。

色が対となっている二組四つの剣が、先ほどの重い金属音より少し鋭い音を鳴らす。

ギンツギンツ

剣の打ち合いはさらに激しさを増す。

しかし、

キンツカラカラン

軽い金属音がした時、シロの持つ剣が手から離れた。

アーチャーはその剣を拾わせないように追いかけて、シロはその刀を拾う素振り（……）をする。

アーチャーはシロの目の前で急に止まりだし、後ろへ避ける。

「……あと一步。」

「え？」

その様子を見ていた凜は、なぜアーチャーが後ろに下がったのかまだわかっていない。

「…………あと一步で私の勝ちだったのにね。」

その言葉を聞いた凜はアーチャーの首筋に切られたような傷を見た。

「なっ！」

「おどろいた？」

「……………」

凜は私を睨みつけ、アーチャーは目を閉じて沈黙を貫く。

「もういいかしら。」

「……………もうひとつは？」

「物分かりはいいのね。」

「皮肉を言う暇があれば、さっさと用事を済ましておいた方がいいと思うが。どうかな。」

アーチャーは視線をランサーとライダーに向けた。

あちらは武器の打ち合いを続けていたらしい。ライダーが少し苦戦している。

「そうね。ライダー、もういいわよ。」

そう言うと、大きな金属音を鳴らし距離を取った。

どうやらランサーの方も、もう戦う気の無くなったライダーと戦う様子はないようだ。

「シロ。無茶はほどほどにしておいてくださいね。」

ライダーはそう言い残し消えていった。

「さて、あと一つでしたね。単純ですよ。受けてますか？」

「何をかね？」

「指令ですよ。抑止としての。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「あと、嘘をついてもわかりますからね。」

ニコリとアーチャーに向けて笑顔を送る。・・・・・・・・殺気を混ぜて、
アーチャーはその顔を見ると、少し目を細め、

「受けてはいない。」

と答えた。

「そうですか。なら私は・・・・・・・・。」

ガサッ

音が聞こえた。

シロを除く3人が音のした方を見た。

「チッ」

ランサーは、逃げて行っただろう生徒を追いかけて消えた。

「アーチャー、追いなさい。」

凜はそう言い残し、私を見る。

「だが、」

アーチャー言いかけるが、

「早く！」

そう怒鳴った凜を見た後、私を一睨みしその場を消えた。

「私はもう少し用事があるから、このあたりで解散ね。」

「いつか話してもらおうよ。」

「……いつかね。」

そう言い残し私は歩き出した。

「早くいかないと間に合わないよ。」

そう言い残して……。

タッタッタツ・・・

廊下を全力で逃げる。

ヒュッ

タッタッタツ・・・

何かが迫ってくるが気にしない。

しないというのは嘘かもしれないが、気にしてしまえば逃げる
ことができないからだ。

ヒュッ、ガシャン

ガッ、ドサ

しまった！

相手の攻撃自体は避けることができたが、攻撃で跳んできた障害物に当たってしまった。

「え？」

しかし、俺にぶつかってきた障害物が見当たらない。

「何かにぶつかったか？」

俺を追いかけたやつはそう言う。

「何もぶつかってなんていねえよ。強いて言えば、人間がいつもぶつかってるものさ。」

なぞなぞでもない。

ある程度なら予想はついている……。

「……空気。」

倒れている俺を見下ろしているその男は、感心するように腕を組む。

「よく知っているな。そうだよ。」

「正解した俺は何かもらえるのかな？」

「そうだな。もう10秒だけ待ってやるよ。立ち上がって走り出すぐらいはできるだろう。ただし、」

それを聞いた俺は即座に立ち上がり逃げ出そうとする。

グサッ

何かが刺さった音がした。

「最後まで聞かねえから。俺は10秒、ここに足を留めるだけ（・・・）と言いたかったんだが。最後まで他人の話を聞かないからこんなことになるんだぜ？」

背中から胸に何かが刺さったままで、俺は壁をずり落ちていく。
逃げ切れなかった。

「巻き込んだこっちもこっちだが、それ以上に自分の運を恨みな。」

男の手が胸に刺さった槍を掴み、抜き取る。

グボッ

まるでそんな音がしたような気がした。

俺は激しい痛みと薄れていく意識を、まるで他人事のように感じていた。

ああ、きっと明日の朝は大変なんだろうな、と。

「――――、――。」

最後のつぶやきは誰にも聞こえなかっただろう。

第十一話 黒と白と紅と蒼（後書き）

さあ、後書きの時間が参りました。

反省？生きててごめんなさい・・・・・・・・

ここで連絡をば

表にでろ。俺は出ないけど様、誤字報告ありがとうございます。

次回以降もこのように善意の方が報告される場合、できれば話数を書いていただけるとかなり助かります。

ええ、ほんとに。寝る時間が＋3時間延びるほどに・・・

なんてのは冗談で、まじめにかなり助かります。

もちろん、報告自体が大変うれしく思っています。

本当にありがとうございます。

さて設定の件ですね、

次話の前に出そうかと思っております。

長引いてしまって申し訳ありませんでした。

以後雑談

私みたいに月一更新の方っていうのはそんなに多くないのですかね？

私のリストの中の神作者様たちは二日に一話など、とんでもない方ばかりで、かなりのプレッシャーというか、頑張らなきゃいうか・・・・。

うん、次の話書こう！

あ、ようやく出たアルケミーマイスターを手に入れてずっとやって

ます。

たぶん次話も遅くなるかも……。オイ
ではでは、次話でお会いいたしましょう。
ありがとうございました。

第十二話 因縁の対決（前書き）

どうも、また遅れ気味な作者です。

むしろ遅れてきています。

ああ、また15日に間にあわなかった……。

先に言います。

データ飛びました……………え

いや、まじで。

本文とかはまるまるサルベージできたんですけどね。

設定メモを残して、書き出し用の設定が見事お逝きになりました。

……………はあ。

やるからってデスクトップに残しておくんじゃ無かった…………。

とりあえず、メモだけはサルベージには成功してますので、そちらだけ投稿します。

はい、

まあ内容は見てくれれば分かりますよ…………。

メモでしかない…………。

そして作る気力もう無くなった…………。

点々が多くなってしまった作者ですorz

とはいえ、この作品の続きを待ってくださってる方々もいらっしやいますので、とりあえずこの話と設定を投稿させていただきました。まあ長々とこんなことを書いていても始まらないので、本文ははじめます。

ではでは、後書きでノシ

第十二話 因縁の対決

「くっ・・・・・・・・。」

予想外のことが起きすぎだ。

私はただ、学校にしかけてあるバレバレの罠を対処するべく残っていただけなのに・・・・・・・・。

まだ仕掛けた本人が登場するのはいい。

しかし、別のものを引き当てるのは・・・・・・・・。

「予想外・・・・・・・・っていうのは間違っているのかな。」

赤い制服を身につけている女生徒は階段を下りる。

制服の赤は点々としていて、綺麗な赤色ではない。

元々が赤色の制服というわけではない。

彼女の制服に赤い何かがついた。

黒く濁った赤色の何かが・・・・・・・・。

女生徒は一人の命を救った。

彼女が巻き込み、死なせてしまったという結果を消したくて。それは理不尽というものを取り去りたくて。

これが始まりであったことを、彼女は知らなかった。

「ん・・・つくあ。」

寝ていた少年が起きる。

制服と場所からその学園の男子生徒であるようだ。

「なんだっ・・・ぐっ。」

寝ていた身体をほぐそうと、大きめの伸びをしようとしたところに痛みが襲う。

「がはっ・・・。なんなんだ。」

痛みがなんなのか分からず、戸惑う男子生徒。

「ここは・・・学校か？」

なぜここにいいのか分からない。

それだけでなくこんな時間にどんな用事あったのだろうか。

男子生徒の疑問は止まらない。

「・・・とりあえず帰らないとな。心配しているだろうし。」

彼の家には待っている人がいる。

それだけ思い出しながら、帰り路を急ぐために足を速める。

時刻は11時を過ぎていた。

直前まで弓道場を掃除していたことを思い出し、出入り口のカギの確認だけして帰った。

家までの道は酷く静かで、まるで人がいないのではないかと錯覚させるほどだ。

速めていた足をさらに加速させ、何かから逃げるように走る。

ついた家に明かりは無く、同居しているもう一人の姿もない。

玄関のカギを開け、身体を滑り込ませる。

入った後の玄関のカギを素早く閉め、転がり込むように居間に入る。ここまでの帰り道、ほとんどを走って帰ってきたために息が荒い。身体が休息を求めたからであろうか、壁に背をつけ、ずり落ちるように座る。

「はぁ、はぁ・・・・・・・・・・。」

部屋の電気をつける気力も無く、そのまま目を閉じ、息を整える。

「あれは夢か・・・・・・・・・・?」

帰り道、ぼんやりと思いだしてきたあそこに倒れるとき。

いや、殺される（・・・・）とき・・・・。

「くそ・・・・あの青いヤツ。」

次にいつ出会うか分からない。

出会えば只ではすまないだろう。

「とりあえず今この場にあるものは・・・・。」

藤ねえが持ってきた特典ポスター。

自衛隊の顔が描いてある、鉄製の強度の高いポスター。

「これしかないのか・・・・。」

居間のすぐ隣にはキッチンがあるが、彼は何か急いでいた。

キッチンには包丁など凶器があるだろう。

しかし、そのようなものではリーチが足りない。

何かと組み合わせないと・・・・。

しかし、彼は急いでいた。

それは予感なのだろうか、キッチンに行く時間は無いと・・・・。

カランカラン・・・・カランカラン・・・・

「くそ！」

その予感は的中した。

この家にかけてある防犯用の術式。

登録されていない者がこの家に侵入すると鳴る仕掛け。

「シロ……ではないな。」

シロなら「ただいま」ぐらい言うだろう。

こんな時間にこの家に来る知り合いはいない。

それに、この警鐘は正規の手順でこの家に入れば鳴らない。

鳴るとすれば、泥棒の類か……。

「ぐっ……。」

休息半ばの身体に鞭を打ち、近くにあるポスターに魔術をかける。

「――――トレース同調・開始オン」

あまり成功率は高くない。

しかし、その魔術はいとも簡単に成功した。

まるで、そうしなければいけないように。

「―――――全行程・完了」
トレース オフ

強化を終わらせ、その場に座っていた彼は立ち上がろうと……。

「ほう、……もう準備は整ってるじゃねえか。」

気がつけば自分はその場に立ち、強化したポスターを両手で握りしめ、自分を殺した相手を正面に睨みつけた。

「動きが早いな。誰に教わったんだ？」

蒼い男は感心したような言葉を吐くが、身体は戦闘態勢をとっている。

槍を構え、相手を殺すように。

「……まったく、一日に同じ人間を二回殺すハメになるとはな。」

それだけ言い、槍を突き出す。

赤子の首をひねるより簡単だと思っていたのだろう。

一撃は強力ではあったが、追撃はしなかった。

それが幸いした。

ガキンッ

手に持っている、強化したポスターは一発で曲がった。
いや、曲がっただけですんだ。

「・・・・・・？」

蒼い男は油断していた。

自分の一撃は防げないだろうと思っていたし、万が一防いだとしても、手に持っているものなどたやすく貫通するだろうと思っていた。

「二度も同じ場所を突かれるかよ。」

そう言い、防いだ反動で庭側へ動き出す。

窓ガラスに体をぶつけ、そのままガラスを突き破る。

反動は強く、ガラスを破り、外へ出てもその慣性は止まらなかった。

「・・・・・・ほう、変わった芸風だな。」

庭に転がっている彼を見下ろしながら、蒼い男は言った。

「――――あ。」

身がすくんだ。

先程の慢心していた顔から、表情が消えたのを見た。
体は震え、恐怖が身体を支配し始める。

「一度目といい、先ほどといい……。それにその紙だ。なるほど、生きているのはそういうことだったか。」

蒼い男は一人で納得し始める。

槍の先は彼を向く。

奇跡はもう続かない。

一撃目は蒼い男が同じ場所を突くと思い、先に防いでいただけだったのだ。

見切れない攻撃など、避けるどころか防げもできないだろう。

「いいぜ。……少しは楽しめそうじゃないか。」

そう言い、蒼い男は槍を横殴りに振るった。

ガキンッ

「ぐ．．．！？」

「ほら、次だ！」

「が．．．．．！」

その一撃一撃は、強化した鉄のポスターを曲げていく。
攻撃は重く、これ以上受けるのは無理だと判断した。

一撃を放ち、油断だろうか、遊びだろうか、戻さない槍を叩きつける。

ゴンッ

「――――！」

蒼い男の持つ槍はほんの少し先が逸れただけで、こちらは両の腕が
しびれてしまった。

「おいおい、魔術師が討ち合いしてどうする。．．．．．やっぱり
つまらんな。」

そう言い槍を構えなおす。
その瞬間、転がるように駆けだし、全力で真後ろへ逃げる。
そして手に持つポスターを、また真後ろへ振る。

ガキン

「ぬ・・・！」

真後ろに逃げたために、追撃は真後ろに行われる。
どれだけあるか分からない実力差に、こちらは運をつぎ込まなくて
は勝てる見込みがない。
追撃は必ず来るだろうという確信をもって、また奇跡は生み出され
た。

後は土蔵まで走り抜ければ・・・。

「——————飛べ！」

回し蹴りをまともに受け、身体は宙に浮く。
真上にではなく、真横に。
そのままの速度で壁に激突し、

ドガンッ

土蔵の壁まで飛ばされたのだ。

「がはっ・・・・・・・・・・！」

まともに回し蹴りを受けた身体は、絶え間なく脳に危険信号を発する。

脳が揺れ、意識を保つことも、思考することもできなくなった。

激突した背中には激痛が走り、うまく立ち上がることもできない。

肺から空気が抜き出され、息ができない。

砂埃で辺りの視界もない・・・・・・・・・・。

壁に手を着き、土蔵に入るための扉を探す。

しかし時間は・・・・・・・・・・。

「シッーーーーー！」

・・・・・・・・無かった。

砂埃のためか、それとも予想外すぎたか、俺は膝を折り、しゃがむ

ことで一撃を避けた。

ガキンッ

壁に当たった音ではなかった。

まるで金属でできたものに当たった音……。

槍はちょうど土蔵の鍵に当たったのだ。

俺は四つん這いで土蔵の中に入る。

シロはいつも「なにかあれば土蔵の中を探しなさい。」という。土蔵の中に何かあるようなのだ。

それだけではない。

自分が鍛練用に作成したのもここに置いている。

俺は土蔵の中を見渡した。

なにか使えるものは無いのか……。

ジャリッ

後ろから足音が聞こえた。

「……これで終いだ！」

槍先がこちらへ飛んでくる。

避けることはできない。

「まだだ。この……おおおおお！」

俺は強化したポスターを広げ、その場に盾を作った。

ガキッ

ドゴンッ

必殺の槍はまた防がれた。

しかし、広げたからだろうか、何度も折れてしまったからだろうか、盾はボロボロになり、身体と共に壁へ吹き飛ばされた。

「が——、あ——、ぐ——。」

何度目だろうか、また立ち上がりも、息もできなくなる。
正面を見れば……。

「———。」

槍先が目の前にある。

これで終わりだ。

この後は、槍を前に出せばもう終わり。

「詰めた。最後のは割と驚かされたぜ。」

そう男は言ったが、頭の中に入ってこなかった。

目の前にある槍を見つめるだけで、他のことは考えられなかった。だってこの後は槍を突き出し、自分は死ぬ。それ以外のことは無いだろう。

「しかし、分からねえな。機転は効くくせに魔術はからきしだ。逃げ方や対峙の仕方は形になってたが……筋はいいのにな。」

………？

何かが男の後ろに見える。

あれは何だろうか。

いや、だれだろうか………。

「もしやと思うが、お前が七人目だったのかもな。ま、だとしてもこれで終わりなんだが。」

「………終わらせませんよ。」

「な・・・・・・・・！」

やはり、シロだったか。

やっぱり助けられるのだろうか。

俺は助けたいのに。

切嗣^{じいさん}みたいなヒーローになりたいのに！

そのようなことを思いつつ、俺は手を地面に着いた（・・・・・・・・・・）。

ヒュン

それは白い閃光。

そして吹き荒れる風。

始まったのだ。

衛宮士郎の聖杯戦争が。

「終わらせませんよ。」

間にありましたか。

といっても、私が何もしなくてもこの危機は乗り越えられるのだから、私がここに来る意味はあまりないですね。

ヒュン

「おや・・・・・・・・。」

ちょうど良かったようですね。

まさか私が召喚するわけでなく、元の私がここで召喚するなんて。

私は私の願いが叶えばいいのですが。

だからこそその聖杯ですし。

さあ、始めましょうか。

最後の聖杯戦争を。

第十二話 因縁の対決（後書き）

さて、とりあえず言いたいことは……。

雑で申し訳ない。

そしてなんか短い。

最初の下りいらない。

閉めしっくりこない。

……こんなところでしょいかね。

まあ、この話を投稿した後に冒頭のようなを書いて、後日続きを書くと……。

そして残りを投稿前に仕上げ……なんてやっているとどうもまとまりが……。

しかも、これからの話は長くなって終わらなくなるからって無理やりめるし……。

はい、申し訳ありませんです。

ここからは今後の話ですが、

来月はたぶん投稿できません。

教育実習がありまして、大学側と相談して、その後に高校側に訪問、その後大学側に報告。

さらにはテストが被るんですね。

ああ、忙しすぎて目が回る……。

プログラム作ってレポートに書きこみ、さらには解析学の上位系授業のレポートまで……。

どんなけレポートが好きなんですかね。もう。

被災地の方は片づけ等もありますし、こっちはまだといいます、それでも忙しい……。

皆さん頑張って生きました。
以上、作者の独り言と連絡でした。

設定資料 (メモ程度) (前書き)

はい、再び帰ってきました作者です。

とりあえずノーコメント。

むしろ何か反応があったら消します。

そんな設定ですので、あまり気にしないでもokです。はい。

あと、設定はもしかしたら今後付け足したり、作り直したりするかもしれません。

その時は間違いなく消します。

だれがこんな作品を……。オレカΣ

設定資料（メモ程度）

シロ・ゼルレッチ・シュバインオーグ

元衛宮士郎

現在学校では、衛宮シロという認識もある。（ただし、ほとんど使われていない。

身長155センチ、体重???、視力両1.5

意識には男性時と女性時のときとで性格（または口調）が変わる。基本的能力は衛宮士郎時と変わりはないが、使う魔術の違いにより能力による戦闘力は上がっている。

使う魔術は概念魔術。魔法に近いとされている魔術の一種。

会得技、術

神語（ワケあり。通常のとは異なるが、便宜上そう分類している。今後の展開により、情報公開はストーリー上での紹介後で。）

投影

衛宮士郎、アーチャーとほぼ同じ。

ただし、戦闘時にはその密を劣化させ、隙間を概念で補強。これにより純粋な強度は少し劣るが、剣の効果は通常と異なるものが多い。

身体強化

普通の魔術師が行う強化とは違い、どちらかといえば投影時に行う概念補強に近い。

よって身体をそのまま強化という意味ではないことの方が多い。

衛宮士郎

シロの元だったもの。

シロと出会ってしまったために、分岐後の世界の住人として、元の士郎とは少しだけスペックが高い。

魔術はほぼ原作と同じだが、藤ねえの竹刀を5回に一回は避けられるくらいには回避能力があがった。

シロのことは切嗣の実子だと思い込んでる。

間桐桜

現在穂群原学園一年。

シロの本性を知っている。

藤村大河とは知り合いであり、衛宮士郎とはよく話す程度。

シロが衛宮士郎であったことを知っているために、現在の衛宮士郎に何かしらの気をまわしている。

令呪…1つ

ライダーのマスター

魔術は刻印虫を抜き取ったために、使用可能ではあるが総量は激減。ただし、元々虫による魔力の強化を行っていたため、現在では通常の魔術師よりも多いくらい。

刻印虫による魔術の発動を行っていたため、現在では令呪を主にした特殊な魔術のみ可能。

藤村大河

衛宮士郎のお姉さんの存在

地元のヤの字の大本、藤村家の藤村雷画の孫。

父、母の仕事は不明。しかし父は婿として藤村家に入った。とてもずぼらな性格。しかし士郎にだけは鋭い。

今は亡き故人、士郎の養父である衛宮切嗣と面識有。

シロにはお姉さまと呼ばせている。

遠坂凜

シロと同じクラス。

本人はシロのライバルであると思っている。（らしい）
機械音痴。

アーチャーのマスター。

現在は原作とほぼ同じであり、令呪をアーチャー召喚時に1つ消費している。

シロの介入があつたが、英霊衛宮士郎が誕生するきっかけは存在している。

美綴綾子

シロ、凜と同じクラス。

それぞれとは下の名前で呼ぶほど仲がいいが、シロと凜の関係はまだ良くない。

弓道部の現部長。

それぞれの関係はほぼ原作通り。

キシュア・ゼルレツチ・シュバインオーグ

シロを生み出したきっかけを作った本人。

シロの概念魔術をほぼ完成まで創りあげた。（といっても概念の知識と未来予測関連だけである。）

現在暗躍中。

その他サーヴァント達

ほぼ原作通り。

アーチャー、ランサーはシロを警戒。

ライダーはシロに信頼を置いている。

さらにマスター桜から護衛まがいのこともお願ひ（命令ではない）
されている。

間桐臓硯

肉体死確定。

間桐慎二

ワカメ。

うざい。

有頂天時はちょー嫌い。

設定資料 **(メモ程度)** **(後書き)**

はい、

黒歴史とはいえ、出すと言った以上出さずにはいかないめんどくさい性格の作者です。

はい、これ読まなくて正解でしょう？

いいのです。

これが作者があんな文を書く理由ですから・・・・・・。
では次話で。

第十三話 衛宮士郎の始まり（前書き）

大変申し訳ないです。

手違い？それとも何かの誤動作？でなぜかこの話が消えてしまいました。

ですのでこの前書きは更新したときとは違っていますが、ご了承ください。

・・・なんでだろうなあ

前書き、後書きは保存してないのに・・・

重要事項はあとがきで書きます。

ホントに申し訳ありませんでした。m（――）m

第十三話 衛宮士郎の始まり

「・・・・・・・・なぜ、あんなことを・・・・・・・・。」

私たちは歩く。
方向は凜の自宅。

「・・・・・・・・だとしても、・・・・・・・・だから？」

先程から凜は同じ言葉を口にする。

学校から家まで30分の道程は、凜の繰り返す独り言を聞いていた。
このループも先程2回目が終わったところだ。
その間私は無言で隣を歩いていたのだが……。

「……にしても、……そうすれば。」

「……はあ、……凜。」

私はこのループを3回目で中断させた。
ここまでずっと無視されていたのだが……。

「……なにか呼んだ？」

「先程から同じことしか口に出していないが、それで私の主^{マスター}が務まるのか？」

凜はショックを受けておかしくなったかもしれない。

「え、……私口に出してた？」

……訂正だ。

私のマスターはショックを受けておかしくなっていた。
しかし、今日のところはどうすればいいのか。
指示が無ければ、私は自由に行動したいのだが。

「それで……、今夜はどうする。先ほどのこともあるだろう。一人の方がいいかね？」

「……………」

凜はさらに考え込む。

私は彼女に切られたくないのだが……………。

「先程は邪魔が入ったが、一応戦闘を行ったのだ。

それなりに魔力も減っただろう。凜も魔力の回復のために休んだ方がいい。」

「……………っ！」

凜が何かに気づくような顔をする。

戦闘のことで考え込んでいたのではないのか。

「……………ぐ……………なさい。」

「ただでさえ通常の……………ん？」

「今すぐランサーを探しなさい！あいつをまた殺しに行くはずだわ！」

「……………それでいいのかね？」

「なによ。また令呪でも使ってほしいわけ？」

「それで困るのは私だけではないだろう。……………まあいい。」

そう言い、私は凜を腕に抱き空を跳ぶ。

「……………ちょ！私は走って行く……………ひゃあ。」

「この方が早いだろう。舌をかまぬよう口は閉じていた方がいい。」

家の屋根を次々に跳び、少し振動を与えれば声を上げる凜。

その反応が面白いのか、アーチャーはニヤニヤと顔を歪めながら目的地へと跳んでいく。

30くらいの屋根を跳んだだろうか、次第に異様な魔力の流れをその身で感じた。

「この刺々しい魔力は……………おそらくランサーだろう。また戦鬨に入っているのか。」

「……………っ！アーチャー、急ぎなさい！」

「……………仰せのとおりに主^{マスター}」

私はアーチャーに命令し、あいつの家に向かう。
魔力をたどり、近づくにつれ感じる魔力はあまりにも強大で、あまりにもおぞましい感覚に襲われる。

「……………なに、……………これ？」

「……………おそらく殺気を混ぜたな。本気で殺しにかかっている。
このままでは……………」

その瞬間光が見えた。

私は驚き、アーチャーの顔を見る。

アーチャーの顔は歪んではいたが、どこか嬉しそうな表情も混ざっている気がした。

あの光をもう一度見る。

すでに光は消えかかってはいたが、目には見えない魔力の渦は未だに無くなってはいなかった。

これは見たことがある。

いえ、……………実際に体験したことがある。

これは……………、

「召喚……………魔術？」

ただの召喚魔術ではないようだ。

陣を使う魔術というのは、その魔術に必要な魔力を必要な分だけ、それこそ、用意する魔力は使い切らなければいけない。だけどこの召喚魔術は、魔力が漏れ出している（……………）。

「……………そんなことよりも。アーチャー！」

私は頭を回転させる。

あそこで戦闘しているのはランサー。

相手をしているのは、たぶん……………あいつ。

いや……………、そう言えば兄妹だったわね。

そうすると、あそこで召喚したのは……………。

「凜、あそこではおそらく戦闘が行われている。そのまま戦火につっこむのはどうかと思うが？」

「……………そうね。近くに坂があるでしょう。

あそこを登りきったところ辺りで、地上から行きましょう。」

「わかった。」

アーチャーはそれだけ言って、凜を迅速に運ぶ。

二度目の戦闘を行う準備を始める凜は、まったく気付かなかった。アーチャーが戦闘を行う準備ではなく、別の覚悟をしていたことなんて。

「さあ、聖杯戦争が始まります。」

これでやっと聖杯戦争が始まる。

私が望んだものが手に入る。

私が欲しいものも。

私の未来（答え）も。

「なら、下準備かしらね。」

私は先制をかけるためにランサーに攻撃を仕掛けようとするが・・・

ドゴッ

「ぐはっ！！」

ランサーが横を転がっていく。

目の前には実体を帯びた風のようなものが通り過ぎる。
いえ、それはちょうど私がいたところを通過した。
大きな、そして鋭い風切り音がしたが、それ以上に威圧する気配が
目の前から発せられている。

まだ辺りは明るい。

光の名残がようやく消えかかり、辺りは元の暗さに戻っていく。
それと同時に、舞い上がっていた砂埃も晴れてきた。

私は敵と判断されたのでしょうか？
とりあえずもう一人の私に……。

「――、――」

土蔵の中から声が聞こえる。
そういえば、そうでしたね。
それが無ければ、セイバーはセイバーではありませんからね。

さあ、そろそろでしょうか。

「…………お邪魔しま…………。」

「それ以上こちらに来るな、メイガス魔術師。」

「あら、なぜです？」

「こちらこそ何故と問う。貴様はあのサーヴァントのマスターではないのか。」

「なおさらおかしいのでは？」

仮に私がマスターとするなら、あちらに飛ばされたサーヴァントに駆け寄ると思いますが。」

「隙についてこちらのマスターを殺しに来たのでは？」

私を召喚させる前にマスターを殺そうとするような、姑息な奴らが考えそうなことだ。」

「とりあえず私は敵ではないということを言ってあげてください、兄さん。」

「……兄だ^{あに}と？ そんなはずはないだろう。」

「兄さん？ ……、兄さん！」

衛宮士郎は呆けていた。

いや、見とれていたというべきか。

どちらにせよ頭が働いていないようだ。

「はあ、再起動には時間がかかるというわけですか。」

「……さいきどう？」

「ああ、いいです。とりあえず、あちらを片づけた方がいいのでは

ないですか？」

そう言い、私は視線を飛ばされていったランサーに向ける。
どうやら話が終わるまで待っていたようだ。

「それで、どっちがお相手してくれるんだ？」

そう余裕をかまし、まるで一騎打ちを望んでいるようだった。
その姿は、戦いに飢えたただ一人の男。
戦いが望みという、矛盾した願いを持つ、しかし、その願いの強さ
ゆえに顕現された一人の英雄。

「・・・私がお相手しよう。」

そう言い、正面に立つ青い甲冑の英雄。
こちらにもまた、矛盾が故に強き願いによって顕現した英雄。

まあ、私は何もありませんが・・・。

「私はガラスの修理をするので終わったら言ってくださいね。」

そう言い私は屋敷の裏手の方に歩いて行く。
まあ、これもすぐ終わりになるだろうし。
とりあえずは・・・、ガラスというより窓枠かなあ・・・。

「……………いったい何なのだろうか。」

「今の奴か？知らねえよ。むしろそっちの関係者だろう。」

「……………らしいと言えばそうなのだが、……………うむ。」

「まあ、俺らはやろうじゃないか。聖杯をかけた戦争を。」

そう言い、構えるランサー。

セイバーは何かを両手で握り、見えない何かを構える。

「おいおい、自分の武器を見せないとは卑怯と言わないか？」

「それも戦略の一部だということだ。話し合いは終わりだろう。……いざ、」

それ以降は何も音が聞こえず、声どころか風の音さえない。

先程の風のせいだろうか、一枚の葉が2人の中央におちてくる。
おそらくきっかけだろう。

それが地面に落ちた瞬間が始まりだということは、この時はまだ傍観者であった衛宮士郎は思っていた。

そしてその葉は、

――落ちた。

ヒュッ！！

ギンッギンギン！

ガゴン（・・・）！

打ち合うたびに増える、一際大きな異音。

異常なのはその音だけではなかった。

青い甲冑を着た女の子が、その手に持つ得物のすごさが分かった。

いや、魔術を、魔力を扱う人間であれば分からざるを得ない。

一撃に込められる魔力を目視できる時点で、それは異質な武器だと理解した。

「ぐう！」

蒼い男が、魔力をまとったその見えない何かを受け止める度に、庭には金属音と火花が飛び散る。

見えない武器を相手にとって、それを防ぎきる男も男であるが、その男を相手に絶えず武器を打ちつづけている。

そのまま防戦一択の勝負、勝機を得たと思ったのか大きく武器を振りかぶる。

「バカ、それは……。」

それを見た男はとっさにできた隙を逃げに使う。

いや、反撃に使った。

一度後ろに下がった男は空振った女の子に向かってまた攻め出したのだ。

しかし、それを考えていないわけではなかったのだ。

それこそ待っていたのだった。

討ちつけた武器を持って、その場を回転しながら敵に武器を振りかぶる。

2人はそれぞれが相手を仕留めようとした一撃だったために、それぞれがダメージを負った。

そのダメージはどちらも大きいものであった。

外から見ていた衛宮士郎は、2人の身体が揺れていることにすぐ気付いたのである。

それだけではない。

青い甲冑の女の子は片腕を抑え、蒼い男は膝をついていた。

そろそろ決着がつくだろう。

しかし、この時の衛宮士郎は、サーヴァント同士の戦いにおいて、宝具という切り札があるということを知らなかった。

それどころか、サーヴァントという言葉でさえ知らなかったのだ。

「そろそろ終いにしようか。こっちの主は臆病^{マスター}でな。さつきからずっと命令を送ってきやがる。……帰って来いとな。」

「そうはいかない。ここで仕留めさせてもらう。・・・ランサー、覚悟。」

「アホが。そりゃこっちのセリフだ。セイバー!」

それぞれが気を張り詰める。

後ろの衛宮士郎は、というよりほとんどの聖杯戦争に関わる魔術師も知らないだろう。

サーヴァントの宝具を使用するための準備というものを。

それは物であったり、場所であったり。

雰囲気であったりもする。

今、蒼い男が行っていることは、その準備に当たることをしている。

気持ちをあの戦いの日のように。

匂いをあの日の風のように。

身体をあの頃の動きに。

そして、この場をあの戦場に。

全てを最盛期に塗り替えていく。

そしてそれらが全て終わるとき、

「・・・・・・・・ぐっ!」

その技は伝説、伝記のままの形でここに成り、

「刺し穿つ（ゲイ）・—————」

———そして放たれる。

「————死ボルグ赫の槍」

瞬間、脳の反応を超えた二つの行動が衛宮士郎の目に映った。

反応を超えたために、その映し出された映像は脳の処理機能を作動させず、それをただ「人ならざる動き」としか決めることができなかった。

辺りには魔力が。

槍と甲冑には火花が。

そして女の子の右胸には血しぶきが舞った。

その血しぶきを見て、一番に驚いたのは蒼い男、ランサーと呼ばれた男の方だった。

「……ははは、はははははははははは！！！！！！」

ランサーは大声をあげて笑いだす。

衛宮士郎は起きたことが分からずに、セイバーを見つめている。ただただ、怪我を負った右胸を見つめ、何があったのかを考え込む。

「・・・その技・・・。貴方は・・・、かのアイルランドの光の御子とは・・・。」

「そりゃ分かっちゃうわな。有名ってのも困りものだ。」

「・・・ぐっ！」

セイバーは傷を負った右胸に手を当て、地面に着きそうな片膝をその手の武器で支えていた。

「・・・つとにさあ、空気読まねえからなあ。」

突然ランサーはそう呟き、大きく後ろに下がった。それを見たセイバーは、痛みに歪んだ顔を直してランサーに問いかける。

「どうしたランサー。私はまだ倒されていないぞ。」

「そうなんだが、俺の必殺の槍を避けられたから撤退しろなんて言いだしてな。」

俺も不本意だがそろそろ令呪を使われそうでな。そうされるとまずいだろう。」

「・・・なるほど。分かったが・・・、素直に逃げさせると

でも思ったのか？」

「ああ、そうだな。その傷さえなかったらの話だがな。」

そう言いランサーは後ろを振り向き、次の瞬間には大きく跳躍してこの場を離れた。

「・・・・・・・・マスター。」

セイバーは、戦闘が終わったことに安堵している目の前のマスターに警告する。

「もう一体こちらに向かってきます。迎撃しますが、治療はどうしますか。」

「え・・・・・・・・、治療ってふさがってるじゃないか。」

マスターである衛宮士郎は、サーヴァントのことをよく知らない。だからこそ、今、そんなことがいえたのだ。

現在のセイバーの右胸は、始めにあったときと同じように鎧で覆われている。

挟まれた鎧が直っているのだ。ならばその下の傷も治っていると思ってもおかしくはないが・・・・・・・・。

その言葉にセイバーは別の意味を見出し、

「わかりました。このまま次の戦闘に移ります。……………では、」

そう言い塀を跳び越え、隣にいるだろう敵を討ちにいく。

「……………な、なんなんだ、あれは。」

俺はそう呟き、跳んで行った塀の先を眺めていた。

こんなことは知らない。教わってもいない。

切嗣^{じいさん}にも、シロにも……………。

どうすれば……………。

「……………っ、そんな場合じゃなかった。」

俺は跳んで行ったセイバーを止めるべく（……………）玄関まで迂回し、外へ出た。

そこで見たものは……………。

「そろそろ……ですかね？」

ガラス窓の枠を裏の倉庫から取り出し、後はつけるだけという段階で私は呟いた。

ランサーはセイバーを討てずに帰って行くし、セイバーはセイバーでマスターが衛宮士郎だから追ってはいかない。

それに凜が近づいてきているし……。

んー、とりあえず行ってみようか。

私はそう思い、先程の庭に顔を出す。

そこにはぼーっと立っている衛宮士郎がいる。

……セイバーは？

その時、塀の向こう側から魔力を感じた。

そこに立っている兄さんを見無視して塀を跳び越える。

案の定、凜を護るようにセイバーに切られたアーチャーが見えた。

アーチャーは顔を痛みで歪ませ、その後霊体化したのだろうか、見えなくなった。

凜は持っていた宝石を使ってセイバーを迎撃した。

黒く、呪いを持つ魔力弾。

風邪といった軽い呪いを昇華させ、物理的に威力を高めたガント（指差し呪い）。

凜のガントはなぜか呪いの類ではなく、その威力の方が脅威であるが……。

しかしサーヴァントの身であるセイバーに、そのような魔力攻撃が効くとは思えない。

ガントはセイバーに当たる前に消失した。

それは、凜の攻撃が効かないということであり、もう打つ手がないという意味でもあった。

凜に剣を向け、何かを話すセイバー。

私は両刃剣を投影し、セイバーの剣を受け止める。

「セイバー、勝手な行動はマスターが起こりますよ。」

「シロ！どきなさい！これは私の……。」

「凜は黙っててねー。」

私はそう言い、凜に振り向く。

セイバーはそれを隙と見たか、私に振りかぶったが……、

「やめろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

その声に反応し、ぴたりと身体を止めた。

セイバーは振り向き、何かを眼で訴える。

しかし、

「やめてくれ、セイバー。シロは俺の妹だ。間違いない。だから戦ってはだめだ。」

それは却下された。

私は凜を肩で支える。

「……もう一人は敵だと思われませんが……、それでも？」

セイバーの言葉に兄さんは凜を見る。

そして驚き、言葉に詰まる。

「客人に大層なもてなしですね。シロ、しっかり躰けておきなさいよ。」

そんな言葉を発した凜は、とても度胸があると思った。きつと私と兄さんは同じ顔をしていたに違いない。

その後、私たちは家に入り話をする事となった。
私は凜に説明を全部任せようと思ったけれど、無理やり連れてこられた。
やっぱり身長之差は大きいと思うんだ……。
凜に力で負けるなんて……。ああ。

――――聖杯戦争の説明は、基本省きます。話の途中
大変失礼しました。BY主

「はあ！？そんなこともしらないわけ！？シロ！あんた何教えてたのよ！」

「そんなこと言っても、私は少数分野特化型ですから。」

「にしてもそんなことはないでしょう！そんなやつに負けたの！？」

「そうだね・・・・・・・・・・。ぷっ。」

「あああ、あ、ああ、あんた、笑ったわね！？覚悟しなさい。」

「ほらほら、こんなことしている暇はないですよ。」

「そんな事とは何よ。むしろ貴方がへっぽこだったなんて知らなかったわ。」

「あら、そのへっぽこに負けた貴方はへっぽこ以下ですね。」

「なにおーーーーー！」

目の前にはこんな状況が繰り広げられていた。

数分前はあんな殺伐とした雰囲気だったのに・・・・、なんでだろうな。

発端は確かに俺のせいなんだが・・・・・・・・。

それにしても魔術師の普通ってのと、そこまで離れていたただなんて。

きっかけは、遠坂がひびの入ったガラスを直すことから始まった。

それを見た俺は、素直にすごいと口に出してしまった。

それ自体は悪いことだと思っていなかったが、その魔術が基本中の基本であつたなんて・・・・。

その時はすぐに収まったんだけど、その後、「マスターってなに？」
発言によって再発。

質問タイムではなく、尋問タイムとなってしまったのだ。

遠坂が尋問と解説の両方を繰り返して行っている傍ら、シロとセイ
バーは部屋の隅でお茶を飲んでいた。

いつの間に仲良くなったのだろうか……。

尋問も区切れそろそろ終わるところだと思った時、思わず「シロもマスターなのか？」と聞いたら、遠坂は急に黙って、次の瞬間シロに向かつて大股で歩き、首根っこを掴んで部屋の真中へ連れて行った。
次はシロへの尋問タイムだと思ったが、シロはのらりくらりと会話を避け、気付けはこのような状態になったのである。

要するに全て俺のせいだ。

先程から、口だけ笑っているシロがこちらを睨んでいるのだ。

ぶるぶるぶる……

「……、もういいわ。教会は……シロが嫌だから無理かしら。」

突然話を変えた遠坂はまるでこれからの行き先を告げたようだった。

「教会？」

「そう、教会。マスターになったのなら登録をしなくちゃいけないの。その場所が教会。」

「そんな場所に……?」

「昔から魔術と教会は関係があるのよ。世界史でも習ったでしょ? 魔女狩りとか。」

その教会から審判を任されている神父がいるんだけど、そいつに聖杯戦争について聞けばよく分かるでしょ。」

「なるほど……。」

「明日は幸い日曜日だし、遅くなっても大丈夫でしょ? シロはどうする。」

「………ついていきますよ。でも近くまでですけどね。」

「わかったわ。なら行きましょう。」

というわけで隣町にある教会へ行くこととなった。

深夜一時、だれもない街中を、橋を、道を。

巻き込まれた聖杯戦争^{ゲーム}の審判者に会いに行くために。

その聖杯戦争をよく知るために。

シロは黙って、考えながら歩いていた。

衛宮士郎に、凜に、桜に、まだ会えぬイリヤに、これから起こることを思い出していく。

物語が加速していく中、シロはこれからをどうしようか悩んでいた。

第十三話 衛宮士郎の始まり（後書き）

はい、戻ってまいりました。

ホントに申し訳ないです、はい。

重要事項だけ。

今回ので長い話書くのはきついと判断しましたww（オイ
です、次回からは最低5000文字で行こうと思います。

ではでは、また次話で

第十四話 分岐（前書き）

どうもお久しぶりでございます。

本当に遅れ気味ですね。

いえ、遅れてますね・・・・・・・・。

とりあえず投稿いたしております。

終わりたいところまで終わらず、どうにか詰めようと頑張ってはみましたが・・・・・・・・。

このザマですね W W W W W

（ ㇿ ） ハア：

ちよいと I M E を変えてみまして前よりはいいのですが、使うもので出てこなくなっただけのものがありまして・・・・、誤字等が増えているかもしれません。

なるべくなくすように、後日自分でも読んでみるつもりです。

ですので訂正等は少し遅れるかもしれません。

諸連絡はこれくらいでしょうか・・・・・・・・。

ではでは、あとがきにて

第十四話 分岐

教会はもう目の前まで迫っている。

私はあの神父が好きではない。

でも、嫌いという感情を持つてはいなかった。

それは本人に「――――」が■■■■いるからである。

それはむしろ哀れだという感情が強いのだろうか。

それとも羨ましいと思っているのだろうか。

私には分からないが、彼に何かを想っているのは確かだ。

だからこそ私は、それに気づかれないように、あいつにまた会わないように教会には来たくはなかった。

ただ、あいつに会いたくなかっただけでもあるが……。

「……大丈夫でしょうか。」

私の顔を覗くセイバー。

ファーストコンタクトではあれほど殺気をぶつけられたが、今では話をしたからだろうか、彼女とは和解している。

どうやら、私が衛宮士郎の妹であるということを認めたのでしよう。

「・・・・・・・・ええ、大丈夫ですよ。」

私はそう答え、笑顔を作りだした。

「・・・・・・・・そうですか。何かあれば言ってください。」

そう言い、セイバーは私から前を歩く主^{マスター}ともう一人に視線を戻した。
どうやら、私は笑顔を作りだすことに失敗していたようだ。
気を使わせてしまったようね。

「士郎、気をつけなさい。」

私は教会に入ろうとする兄さんに向って、そう注意を促した。兄さんは少しだけ気を引き締め、凜と共に教会に入る。

ボタン

教会の大きな扉を閉めた音と共に、辺りは静けさを取り戻した。セイバーはまだ私を疑っている。

敵ではないと言っても、私が魔術師であるということは否定していない。

ということとは、敵対意識が無くても主である兄さんマスターに対して、この聖杯戦争で不利になってしまうことをしてしまいかもしれないからだ。

それは当然の警戒だと私も思う。

その静寂は不意に破られる。

「……貴方は、なぜマスターの味方に？ いえ、兄妹で魔術師である？」

この二つの質問は実には的確であると言える。

一見つながっていないように思えて、しっかりとつながっているのだ。

魔術師とは本来、一子相伝のものとされている。

それは、そういう伝統とか儀式とか言うものではなく、もっと別の問題だからだ。

魔術刻印。

このコピー不可能のものを受け継ぐことができるのは、その魔術に適した、いえ、その魔術を知識として理解している魔術師だけなのだ。

魔術刻印とは、魔術を行う際の、いわゆるレシピ本とも言える。

魔術を行う際の過程を魔術刻印にすべて任せてしまうことで、その魔術を行使するための経過を全て補ってくれる。

魔術師一家がこれを大切に扱うことは、当然のことと言えよう。

そして受け継がれた刻印をまた増築し、進化させ、そして意のままに操る。

この魔術刻印を絶えさせないがための措置ではあるが、一般常識とされるものを軽く無視する行動が行われている。

例えば人身売買、近親婚・・・etc。

であるからして、魔術師というものは闇に扱われ、表に知られない理由の一つである。

話は飛んでしまったが、その魔術師の一族の中での兄弟、姉妹は基本的に片方にしか魔術を教えない。

一族の全てを、複数に同じように受け継がせることはできないからだ。

よって、基本的に生まれてしまった兄弟、姉妹の片方、魔術の素質が無い方はどこかへとばされる。

それは文字通りに。

それこそ、死んだ方がいいという人生を歩まされるかもしれないのだ。

そのような兄弟、姉妹が2人とも魔術を知っている。いえ、使えている。

そのことに疑問を持ったのだろう。

そして、魔術師同士が戦うこの聖杯戦争に、何をもって協力をしていいのか。

全てはマスターのため、ですかね……。

「そうですね。まずは私と兄は実際の兄弟ではありませんから、普通の””といえますか、一般的といわれる魔術師の一族の方とは違います。」

セイバーはその言葉に少しだけ（……）驚き、再度聞きなます。

「ならばなぜ兄妹で聖杯戦争に？」

「元々は兄さんが聖杯戦争にでるのは反対……といえますか、もともと予想外の出来事なので。安全確保と監視という意味を込めて私が協力しているという形ですね。」

「いえ、知りもしないでしょう。教えていませんからね。」

「貴方は兄を利用し聖杯を手に入れようとしているのですか！」

セイバーは声を大きく荒げる。

しかし、その声は教会の扉を越えはしなかった。

「落ち着きなさい。私は聖杯を望んではない。」

「貴方は……何を言っている。聖杯が欲しいがためにこの聖杯戦争に参加しているのではないのか。」

「……いえ、聖杯がもたらす効果には興味はありません。」

セイバーは私が何を言っているのか理解していないようだ。

もつとも、聖杯を欲しているからこそ英霊の身となって死を、時代を乗り越えたのであれば、怒ることは当然であると思っていたが……。

「……何故聖杯を欲しない！あれは願いをかなえるものではないのか！」

「……まあ、それは追々という形でしょうか。」

そろそろ出て来るだろうと思いますし、簡潔に答えましょう。

私が欲しいものは聖杯その物であり、聖杯によってかなえられる願望は一切ありません。

あれでは私の望みはかなえられませんので。」

「……なぜそれが、！」

「ストップ。」

私は扉が軋んだ音を聞き、話を強制的に終了させる。

開かれた扉の先に、士郎と凜と……あの男が見えた。

私は軽くお辞儀をし、この場を去るべく背を向けたが、

「・・・・・・・・待ちたまえ。」

———そう声をかけられ、私は再度教会に面を向く。

兄さんと凜は私と神父、言峰綺礼を交互に見つめ、その場の空気を読むべく黙っていた。

「・・・・・・・・はじめまして。」

数秒の沈黙の後、なかなか切り出そうとしない言峰の代わりに、私は話し始める。

「・・・・・・・・はじめまして、だと？・・・・・・・・いや、この場での会話ではやめておこうか。」

珍しく自ら引きさがる言峰を見て、凜は驚愕の顔を浮かべる。

「・・・・・・・・今後、会話をしにここに訪れることはありません。」

私は言峰に笑いかける。

しかし、手はきつく握っている。

いつまで我慢ができるのか、私はここをすぐに去るべく、背を向け帰り路に足を踏み出す。

「次は私から出向こうか。」

「必要ありません。次はありませんから。」

私は背を向けたままそう言い、この場を離れた。

少し遅れて凔と士郎、それからセイバーが背中を追ってきた。

「あの神父を毛嫌いするのは分からなくはないけれど……、本性を知っているの？」

「ええ、たぶん本人よりも。」

「はあ？……シロって時々分からないこと言うのね。まあいいわ。」

凔はそう言い、まるでついてこい言わんばかりに先頭を歩きます。

私たちは深夜を回った街を帰る。
凜は考え事をしているのだろうか、それともアーチャーと連絡を取っているのだろうか、ここまでの道程の中では言葉を発することはなかった。

私は知り得る情報を元に、あたりを警戒する。

今日から聖杯戦争が始まったのだ。

であるなら、初日の戦闘は5戦。

ランサー 対 凜、アーチャーが1戦目

ランサー 対 衛宮士郎が2戦目

ランサー 対 セイバーが3戦目

セイバー 対 凜、アーチャーが4戦目

そして5戦目が……ここにいる凜、衛宮士郎、セイバー 対

イリヤ、バーサーカーである。

全ては間違いなく、同じ順序で行われた。

物語が加速し、分岐し始めるのはここから。

私がここにいなければ（……）の話であるが……。

とはいっても、このままであればバーサーカーと戦うことにはなる

でしょう。

警戒は怠らないほうが無難であると……。

「…………マスター、警か」

「セイバー、遅いよ。」

警戒していた私に気づいたセイバーが、マスターである兄さんに警告を促したが、一步遅かった。

目の前には、この道を立ち塞がんとする巨大な男がいた。

その男は上半身には何も着ず、右手に巨大な岩のような物を持ち、肩に担いでいる。

それよりも優先されるのは、その男の前に立つひとりの少女であった。

「こんばんは、お兄ちゃん。こうして会うのは二回目だね。」

兄さんと凜は、その場で固まっている。

兄さんに関しては、何かを感じ取ったのか少し身震いをしていた。それはバーサーカーの視線をまともに受けたからだろうか、それともほかのサーヴァントに出会ったからであろうか。

「・・・・・・・・バーサーカー。・・・・・・・・やばいわね。」

凜は兄さんとは違い、すぐに身を構えた。

もつとも、身を構えただけでは何も状況は変わらないのだが・・・・・・。

「あれ？・・・・・・・・なぜここにいるの？こんなところまで逃げてきたの？」

その言葉は私に向かっていているのだろう。

「何と勘違いしているのかわかりませんが、その予想とは多分違うでしょう。」

「ふーん。なら一緒にやっつけちゃえばいいのね。

そっちはサーヴァントを持ってないし・・・・。

どうせなら、まとめて潰してあげようって思ってたのに。」

そう少女は言うてから、おじぎをした。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるですよ？」

「……………アインツベルン。」

聖杯戦争御三家の二画がここに揃ったことに、そして、新たな御三家の一人に対して凜はますます警戒を強める。

「準備はいいかしら。

じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー。」

イリヤは歌うように、まるで楽しみにしていた子供のように笑顔を浮かべ、自分のサーヴァントに短く命令した。

バーサーカーはその言葉の直後、何十メートルという距離を跳ぶ。

「……………マスター、下がって……………！」

セイバーは身に付けていた、鎧をも隠せた特大コートを脱ぎさった。

ガキン！

バーサーカーの着地点で、よくわからない異質な音が鳴った。それは何がぶつかったのであろうか。

それぞれの武器は、セイバーは剣であろう金属、バーサーカーはそれこそ岩のような斧・・・だろうか。

それらがぶつかって鳴った音にしては、想像よりも軽いし、何よりも小さい。

その音は次第に数を増やしていき、

「・・・っ！」

セイバーはどうやら追い詰められているようであった。

ガゴンッ！

どうやら、セイバーは打ち合いの際、まともにバーサーカーの剣を受けていたわけではなかったようだが、それもすぐに破られてしまったようだ。

一際大きな音になったときには、セイバーは後ろへ押しやられていた。

セイバーは私たちの前まで転がり、見えないその武器を地面に突き、支えるように立つ。

その体は今日だけで、三回の戦闘を行なっているのだと兄さんは気

づいたようだ。

その身でサーヴァントを相手していた差を、今のセイバーとバーサーカーとの差として見てしまっているようで……。

「……………逃げろ。」

震える声でそうつぶやく。

次第に震えは収まり、この場にいるすべてに聞こえるように叫ぶ。

「逃げろ！セイバー。」

これは、シロが衛宮士郎に行なった修行の成果である。

撤退という可能性の大きさについて、度々言っていたのだ。

これにシロは顔で喜びを表し、セイバーに要求を述べる。

「……………セイバー、あと一分いける？」

「どうでしょうか。バーサーカー相手にこの傷ですので、かなり無理があります。」

「それだけ言えれば上等よ。少しの間お願いね。」

私は兄さんと凛に向き直し、作戦を言う。

「私が逃げろと言ったら、何があっても逃げなさい。この場でなければ私がどうかします。」

「なっ！……」

「あんたに何ができるっていうのよ！もっと現実を見なさい！そんなの……」

当然、そのような対応はすると思うが、その続きは出てこなかった。シロの後ろでは、今にも倒されそうなセイバーが戦っていたのだ。それを見た二人は、それ以外に方法はないのだと思ったのだろう、その場で頷き、互いに目を合わせた。

「タイミングはもう少し後で。心構えだけはしておいてください。」

私はそう言い、またセイバーとバーサーカーの方に向き直した。いえ、そうではなく、イリヤの方を向いた。

私はセイバーとバーサーカーの戦闘のすぐ隣を歩く。

後ろは私の行動を見て、その場で固まっているようであった。

それもそうだろう、すぐ隣りで戦闘を行なっているのだ。

剣があたりってしまったら死ぬ。

そうでなくても壊された壁などが飛んできて、あたってしまったも死んでしまうのだ。

でも、それらは起きなかった。

数十メートルという距離を歩いて無事渡り終えたのである。

それを見ていたイリヤは、私を睨んでいた。

私はそのままイリヤの前へ立ち、挨拶する。

「はじめまして。私は衛宮シロと申します。以後お見知りおきを。」

「どうも、ご丁寧に。私は先ほど自己紹介しましたので、省かせてもらうわ。」

それで、なんのようなの？」

「そうですね、時間がないので手短に。」

私たちはこれで御暇させていただきましたとおもいまして。

誠に勝手ではありますが、手土産としてバーサーカーのストックを一ついただこうかと。」

「無理よ。サーヴァントでさえないあなたに、バーサーカーがやられるわけないもの。」

ガン！

ドッドサツザザー！

「……だめだ！先に逃げろ、セイバー！」

後ろから兄さんの声が聞こえた。

どうやらセイバーはまた傷を負ったようだ。

あの体でバーサーカー相手にそこまで持つのは、さすが最優のサーヴァントである証か・・・。

「―――――!」

バーサーカーが吼える。

どうやら本当にギリギリのようだ。

ドガッザザーー!

ビチャッ

液体がはねる音が聞こえた。

セイバーは立ち上がろうとしている。

鎧を赤く染めるが、それでも引くことはない。

あと一撃くらえば、いえ、一撃打ち合えば崩れてしまいそうなほどに疲弊している。

もう無理なのであろう。

立つこともできていないのだから。

なぜ同じサーヴァントでこうも違うのか。

なぜ自分は何もできないのか。

なぜセイバーに戦わせているのか。

その時の私は、出てくる疑問は尽きないだろう。
しかし、今は違う。

一時の静けさを取り戻したこの場所に、はじめと同様イリヤの言葉から入る。

「勝てるわけじゃない。あたしのバーサーカーはね、ギリシャ最大の英雄なんだから。」

「……！？ギリシャ最大の英雄って、……まさか————」

「そうよ。そこにいるのはヘラクレスっていう魔物。あなたたち程度が使役できる英雄とは格が違う、最凶の怪物なんだから。」

ましてや、あなたなんて傷すらもつけられないんだから。」

私たちに言い放ち、私たちにその自信の内を晒した。

イリヤはこれで私たちのココロを崩しにかかってきた。

元来、英雄とは神格、神威を表すものに近いものであり、その性質も受け継がれている。

つまり、広く名が知れ渡ればそれだけ力を増すものである。

ある内容を除けば、それがどんな意味で伝わっているようにとも、名が知れ渡っている範囲の大きさだけ、その強さが大きくなる。

つまり、イリヤが言うヘラクレスという英雄は、その有名さによって決まる強さに関しては、どの英雄をも群を抜くだろうということ。ただでさえ、ヘラクレスという名はギリシャの英雄^{ヒーロー}であるのだ。英霊という範囲の中であれば、これほど強いものはないだろう。

ただ、ここでは個人的なスキルに関してであるので、戦い方、武器、作戦等によって倒しうる相手であるというのをここに追記しておく。

それぞれが何かを思い、何かを考えている。
誰もが動かないその場で、一人が怪物の前に立つのであった。

第十四話 分岐（後書き）

どうも、お疲れ様です。

モチベーションが上がりません……………。

もう少しで一年経つんですよね。

よく書き続けているなあ、なんて自分で思ってみたり。

でも月一だしなあ、なんて自分の能力の低さに嘆いてみたり。

なるべくいろんな話を書きたいので、色々と端折ってしまうことになりそうです……………。

ああクオリティが落ちることが目に見えてしまう……………。

なんてマイナス思考ではいけませんよね。

がんばっていきましょー、おー。

今月思ったより暇なんで、早めに続き上げたいですねえ。

なんて思ってはおりますので、もしかしたら早いです。

そんなけです。

あ、これ読んでいる人はコミケ行ったのかなあ？

私は三日間全部外並びで日に焼けました。

唇を日焼けして、ちよつとできものが痛かったり……………。

早く治らないかなあ。

そういえば、地獄のミサワはロックマンの続きを無料配布だったらしいですね。

また伝説が生まれるんですねww

ggdggdですがこれにて。

また次話で会いましょう。
それではノシ

第十五話 分岐後、本物の始まり（前書き）

大変申し訳ありませんでした。

2, 3日ですすなんて言っておきながらまたもや遅れ……。

言い訳ながら状況を書かせていただくと、台風の影響で実家の方に手伝いに行っていました。

実家なんですけれども……、ニュースでご存知かもしれませんが、庄内川の近くなんですね。
まあ愛知県ですけれども。

下流の方なのでだいぶマシと言えませんが、家の前が雨で土が溜まって、と言ってもそんなにたまってはいないのですが、掃除をしていました。

私を含めて家族等は何もなくて大丈夫でしたが、いやはや雨はすごかったですね。

久々の大雨でした。

とまあこんなわけでしたが、作品が遅れた理由的には私情なので何も責任は変わっていないというわけですが（何が言いたいんだ私は・

そろそろオリジナル展開が多くなります。

というよりオリジナルのみ？

質が落ちてきてはいますが、これ以上下げないように努力していきたいです。

はい。

長くなりましたが、これにて切らせていただきます。

では、本編へどうぞ

第十五話 分岐後、本物の始まり

「勝てるわけじゃない。あたしのバーサーカーはね、ギリシャ最大の英雄なんだから。」

「……！？ギリシャ最大の英雄って、……まさか——」

「そうよ。そこにいるのはヘラクレスっていう魔物。」

あなたたち程度が使役できる英雄とは格が違う、最凶の怪物なんだから。」

ましてや、あなたなんて傷すらもつけられないんだから。」

静かなこの場所に、足音になる。

支えを使っても立てないセイバーの目の前に、サーヴァントではない一人の少女が立つ。

「セイバー、時間を過ぎてしまったようね。謝るわ。」

彼女とセイバーが会ってから、まだ半日も過ぎてはいない。
そんな彼女らではあるが、女という生き物の性^{さが}であろうか良好な仲
を作るのに時間はいらなかったようだ。

それはまるで友達に気を遣う親友のような口調である。

「もう大丈夫。あとは任せて。」

そう言い、セイバーを下がらせる。

自力で立てないのを見ていた凜は、セイバーに肩を貸していた。

セイバーと凜と士郎が後ろに立ち、その前にシロが立つ。

シロはこのような立ち位置に、苦笑を隠しきれなかったようだ。

「なにかあったのかしら。」

その顔を見て、イリヤが尋ねる。

「いえ、何も。……そろそろ始めさせていただきます。」

その言葉と同時に空気が変わった。

それが分かったのはイリヤとセイバーだけであった。

私は目の前の英雄（化け物）をみる。

見る、観る、視る。

いろいろな「みる」があるが、この場はあえて「視る」を使わない。

私が使うのは概念。

その「モノ」が成り立つロジック論理。

「モノ」は「物」でなくてもいい。

ただ、物である方が視ることは楽であるが……。

一言断っておくが、概念でバーサーカーを見たわけではない。
ただこの場の情報をみただけだ。

概念はこの両手に持つ剣に「入れる」。

両手の剣は、干将・莫耶をもとに私が創った。

設計図はむしろいらなかった。

干将・莫耶の刀身を伸ばし、脇差しのような形にした。

両手剣と言えば、私にはこれしかなかった。

「……トレース・イン」

私はつぶやく。

「トレース・オン」

この言葉とは違う。

この言葉は主に、私をカタチ作る魔術を使うために言うコトバ。意は同調。発展は投影。

その意を組み込み、挿入の意を継ぎ足したコトバである。

その真価は概念を作ること。

そして注ぎ込むこと。

両手に持つ「干将・莫耶改」とでもいえいいのだろうか、この剣を構える。

【踊る】

そして補助をつける。

私の動きに補助^{フースト}を付けることで、ストックの一つ位であれば容易につぶせるだろう。

準備は約3秒。それ以上でもそれ以下でもない。

私は構えた剣を振る。

キンッキンッ

その攻撃は、バーサーカーの前に置かれた大剣ではじかれた。

攻撃の勢いを殺さないように私はバーサーカーを飛び越す。

それはまるで舞っているかのように体を回転させ、円を描きながら攻撃を作り出す。

ザクザシユッ

背後からの攻撃をバーサーカーはまともに受け、傷が生まれた。

戦闘は儀式。

過程は傷跡。

そして結果は死、または逃亡。

今、その過程が生み出された。

「なっ！」

イリヤは驚く。

今までセイバーを圧倒する戦闘力を持ったバーサーカーが、たかが一人の「ニンゲン」に傷を負わされたのだ。

・・・正確には「ヒト」であるが。

私は立て続けに剣を振る。

剣を振る度に位置を変え、踊るような動きにバーサーカーの体の動きは止まる。

今まで早いと思われる動きをしていたその巨体は、今度はまるで岩のような頑丈な個体が変わった。

私は剣の概念を動きながら再確認する。

タンッ

ザシュッ

タタンッ

ゴアアアア

タンッ

ドガンッ

音は私の足音と、バーサーカーの大剣の音。

その場でまるで台風のような風を生み出しながら、私に向かって攻撃が飛んでくる。

次第に私の足場は狭くなり、そろそろキツくなってきただろうか。

「そろそろ分かったかしら。あなたでは一つでも削ることはできないわ。」

私はその言葉に目線で返し、また攻撃に移る。

次は右腕を集中的に狙い、何かの意図を匂わせる。

「腕を切り落とそうとするつもり？ 傷を負わすことについてはびっくりだけど、切り落とすまではいかないわよ。」

私の精神を試しているのか、それとも本気でそう思っているのか。イリヤは私に向かって再度口を開く。

「でしたら、そこで見てください。．．．そろそろ、終わらせますので。」

踊りはさらに激しくなる。

くぼんだ地面に着地し、斜の部分を足場に飛ぶ。

先ほどとは変わり、曲線的な軌道から直線的に動く。

こちらを驚きの顔で眺める凜たち三人に、視線を向けてそろそろだと気づかせる。

「さあ、終わりにしましょう。」

その言葉と共に、振り下ろしたバーサーカーの腕に干将を刺す。
刺した干将を切り落とすかのように、莫耶で干将を打ち付け腕を切り落とす。

バーサーカーは勇の吠え声ではなく、痛みの吠え声を上げる。

片腕を無くし、バランスを崩したところに、回転しながら両手の剣をバーサーカーの胸に刺す。

劍は肌を、肉体を、心臓を突き抜け、背中まで劍は貫通した。

初めは解らなかった。

それが私の自慢のバーサーカーを貫いたということ。

それだけではなく、私の令呪から痛みが走ったのだ。

どういうことか、……それはバーサーカーが一回殺されたということ（……）。

私はその事実を受け入れられなかった。

だから私はあいつらなんかを無視して、バーサーカーだけを見つめていたの。

「……バ、バーサーカー？」

私の声に反応したのか、それとも再生が終わったからなのか、バーサーカーは自分の腕を持ち上げた。

その時に気づいた。

あいつらはもう逃げていたことに。
見えるのは後ろ姿。

私はバーサーカーに命令しようとして、

ドガンッ
ビシャ

バーサーカーが自分の腕ごと剣を投げるのを眺めていた。

「今よ！」

私は後ろの三人に向かって合図をおくる。

3人はそれまでの私とバーサーカーとの戦いを見ていて、思考が停止したような顔をしていた。
3人ともだ。

「早く！」

私は3人を正気に戻すべく、大きな声を上げながら逃げる。
凜はセイバーに肩を貸し、士郎はそれを手伝おうと慌てて近づく。
しかし、それを断られて私の方を見た瞬間、私に向かって走ってきた。

「――、――。」

何か叫んでいるようだったが、なぜか聞こえない。
私が走っている風のせいだろうか、よくわからなかった。

ドガンッ

ビシャ

私は飛ばされていた。

飛ばしたのは士郎。

予想していない衝撃に私は一瞬瞬きをして、
・・・・・・絶句した。

ピチャ、ピチャ

血が地面に、私の顔に当たる。

私は抗えなかったのか。

それとも抗えなかったために私が（・・）傷を受けなかったのか。

そんなことはどうでもいい。

結果は衛宮士郎がバーサーカーの攻撃を受けた。

これは私の失敗であった。

しかし、成功でもあった。

「・・・・・・・・興が削がれたわね。帰るわ、バーサーカー。」

敵であったバーサーカーが引いたのだ。

助かったのかもしれない。

逃げたとしても、彼と彼女が追わないわけではないのだから。

私は何も考えることができずに士郎を見る。

いや、考えすぎて纏まらない思考で士郎を見つめる。

「・・・・・・・・シロ！」

いち早くこの状況に適応した凜が声を上げる。

凜は士郎の傷がどのようなになっているか見るために近づく。

その場で固まっている私に声をかけながら、ケガの状態を見ていたが・・・・・・・・。

「……なによこれ……。」

私に向けて疑問を投げかけた。

「先ほど言われた部屋に寝かしつけた。」

家まで帰ってきた。

発言はアーチャー。

あの後、凜が家にいるアーチャーを呼んで士郎を運んだ。

アーチャーが動けるという状態ならば、今後の展開は読めては来るのだろうが、これほど元の道と異なった枝を渡ってきたのだ、多分これからの出来事も違うだろう。

ということは、このアーチャーも私の仮定したアーチャーではない可能性を考慮しなければならないが……。

「どうした、茶なら勝手にだがいれたぞ。座らないのか。それとも怒っているのか。」

そんな言葉を聞いてからは妙に毒素を抜かれたというか、そんな考えはどうでもいいと思えた。

さしあたって私が今しなくてはならないことは……。

「……それで？これはどうなっているんですか、シロさん？」

この皮肉げに下手にでているお猫様の機嫌を治すか、それとも情報を隠すか……。

まあ、アーチャーを使ってもいいけれど、そうするとアーチャーは自分の望みのために暴走することもありえるし……。

どうしようかしら……。

「……はあ。」

「そんな大きなため息してどうしたのよ……。それとも聞いてまらなかった？」

妙に可愛げがある凜のお言葉をいただくのはやぶさかではないけれど……。

いつまで立ってもこのままの状態にいるのは私の精神が耐えられない。

しょうがないか……。

「……凜。アーチャーを借りるわよ。」

「突然話し始めたと思ったら……。アーチャー？ いいわよ。こっちはセイバーと話してるから。」

「な、あなたはマスターの姉でしょう。その従者の私を見捨てるのですか。」

セイバーが何か言っているようだが……。
多分誤解でしょう。

「凜。セイバーを怒らせると怖いわよ。私の勘がそう言うの。……着せ替えまですよ。」

「^{メイガス}魔術師殿！」

「私の名前はシロよ。衛宮シロ。」

「シロ殿。助けてください。」

「殿なんていらないわ。呼び捨てで読んでくださいね。……さあ、アーチャーこちらへ。」

「シロ！ さあ呼びました！ 今この時はあなたに従います。かわりに助けてください！」

「なら命じます。凜の相手をしてくださいね。
あ、そうそう。カメラが必要ならこちらに。衣装ならこちらから出

て右に曲がって突きあたりの部屋です。出どころは聞かないでくださいね。汚さなければオッケーです。」

「分かったわ。ありがとう、シロ。今はあなたが輝いて見えるわ。」

「シ、シロ！裏切りましたね！」

「さあ行きましょう、すぐ行きましょう。」

「い、いやだ。やめてください。……。ああ……。」

引きずられて連れて行かれているセイバーと、首元を掴んで意気揚々と歩き出す凜。

凜、あなたの方が輝いているわよ。

そしてセイバー。

力はあなたの方が強いでしょうに……。そんなにショックだったのかな？

第十五話 分岐後、本物の始まり（後書き）

どうでしたでしょうか。

短いながらも話を終わらせてみました。

最後はコメディっぽくなってしまいましたが、平和が一番です。（ドヤア

とまあ戯言はおいといて……。

短いのはこのあともうちょい続けてたんですが、話の都合上カットいたしました。

もう少し後で出るかもしれませんね。

という訳で、原作の分岐も終わりというわけで、次回からは分岐の後の話となります。

このままで行くとセイバールートになりそうですが、そこはそこ。オリジナル展開からの別ルートを予定しております。

なので、苦しいところ、とってないフラグなど、多分あると思いますので、遠慮なくおっしゃっていただければ修正、改正、追加ストーリーなんぞも出るかもしれませんね。

とまあ妄想かもしれないですけど……。

（だってそんなに技量ないからねえ……）

次回以降も頑張って作ってはいますが、また私情で遅くなるかも（えん。ではでは書きなぐりましたので、後で読んで訂正するかもしれません。

こんな作者ですが、ご期待に添えるよう頑張りますので、これからもこの作品を覗いてやってください。

ではダメ作者の言葉でした。
次話でお会いしましょうノシ

謝罪とお詫び（これいつもだよね・・・）

この作品を読んでいたいただきありがとうございます。

予定投稿日より一週間、前回の投稿より一ヶ月が過ぎておりますが、諸事情により今回も投稿を延長させていただきます。

いつもと事情が異なり、どれだけ時間がかかるのかわかりません。

しかし、無期延長というわけではありません。

時間的なお約束はできませんが、来月までには必ず次話を投稿したいと思っています。

本当に申し訳ありません。

以降尺稼ぎ兼雑談

2年半自分のわがままに答え続けてくれたノートPC（愛機）がついに・・・

メモリーが常に2GB使用って・・・

最適化もしたんですけど、なかなか下がらず。

データもかなり退避した状態ですが、ほとんど効果なし。

なのでメモリの寿命と判断して、交換したいと思います。

交換自体に時間がかかることはないのですが、ものが届くまでが・・・

あとお金が・・・。

ノートのメモリはデスクより高いのです。

ああ・・・。デスクを置ける空間があれば・・・

とまあ愚痴ってもどうにもならんのです、はい。

こんな状況ですので、ものが届き、交換次第続きを書きたいと思います。

途中まで書いてあるので、どうにか抜きだせないかも検討中ですので、どちらか早い方法で投稿したいですね。

別段ノートにこだわっているわけではありませんから。

という訳で、これにて失礼したいと思います。

久々のブルースクリーンが怖かった私でした。

では次話でお会いしましょう。ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6095n/>

白き剣製/other future

2011年10月23日17時10分発行